

かわさきの 男女共同参画に関する アンケート調査報告書

平成31(2019)年3月
川崎市男女共同参画センター

目次

調査の目的と実施概要	3
調査内容	4
回答者の属性	6
1. 男女の地位の平等感	14
2. 女性にとっての働きやすさ	24
3. 用語や制度の認知	31
4. 生活満足度	40
5. 家庭内での分担状況	45
6. この1年間の悩みごと、困りごと	51
7. 生活優先度の〈希望〉と〈現実〉	59
8. 生活時間	66
9. ジェンダー規範	73
10. DV／デートDV被害の認知と現状	95

調査の目的と実施概要

【調査目的】

本調査は、川崎市常住市民における男女共同参画に関する意識と行動を把握し、市の男女共同参画関連施策、センター事業、さらには市民・市民活動団体・事業所等の活動に活かすことを目的とする。

【母集団】

平成30(2018)年9月1日時点で満20歳以上の市内在住者(外国人市民を含む)
1,155,939名

【対象者】

住民基本台帳(外国人市民を含む)より抽出された3,500名

【抽出方法】

単純無作為抽出

【調査方法】

郵送配布・郵送回収法(督促状1回)

【調査期間】

平成30(2018)年9月3日(月)～16日(日)

【回収数】

有効 1,083票(30.9%) 無効 1票

調査不能 22票(転居19, 病気・障害・高齢1, 長期不在1, その他1)

調査内容

【調査内容】

「第4期 川崎市男女平等推進行動計画」(平成30～33年度)の進捗状況把握に必要となる項目、および「川崎市DV防止・被害者支援基本計画」(平成27～31年度)改定のための基礎資料となる項目、さらに前3版の調査結果から引き続き推移を把握しておく必要がある項目を中心に、次のような調査内容とした。

●〈男女共同参画社会の現状や制度〉

男女の地位の平等感／女性の働きやすさとその理由／男女共同参画に関する用語や制度の認知

●〈生活の状況や考え〉

生活満足度／パートナーとの間での家庭での子育てや家事等の分担状況／悩みや困りごと、相談先、相談しなかった理由／ワーク・ライフ・バランスの希望と現実／生活時間

●〈夫婦や家庭に関する考え〉

性別役割についての意識／女性が職業をもつことについての考え／夫婦の望ましい分担の意識(*)
／男性の育児休業取得についての考え、理由／結婚・家庭・子育て観

●〈男女の人権の実態と意識〉

DV内容の認知／DV相談窓口の認知／DV被害経験、相談状況、相談しなかった理由／デートDVの認知、認知経路／デートDVの被害経験／DV防止に必要なだと思うもの

●〈属性〉

性別／年齢／居住区／同居者／同居の要介護者／職業／年収／婚姻状況／パートナーの職業／意見・要望

*設問選択肢に誤りがあったため、当該設問の結果は不掲載としている。

回答者の構成

【回答者の構成】

本調査の有効回答者の構成は以下のとおりであった。

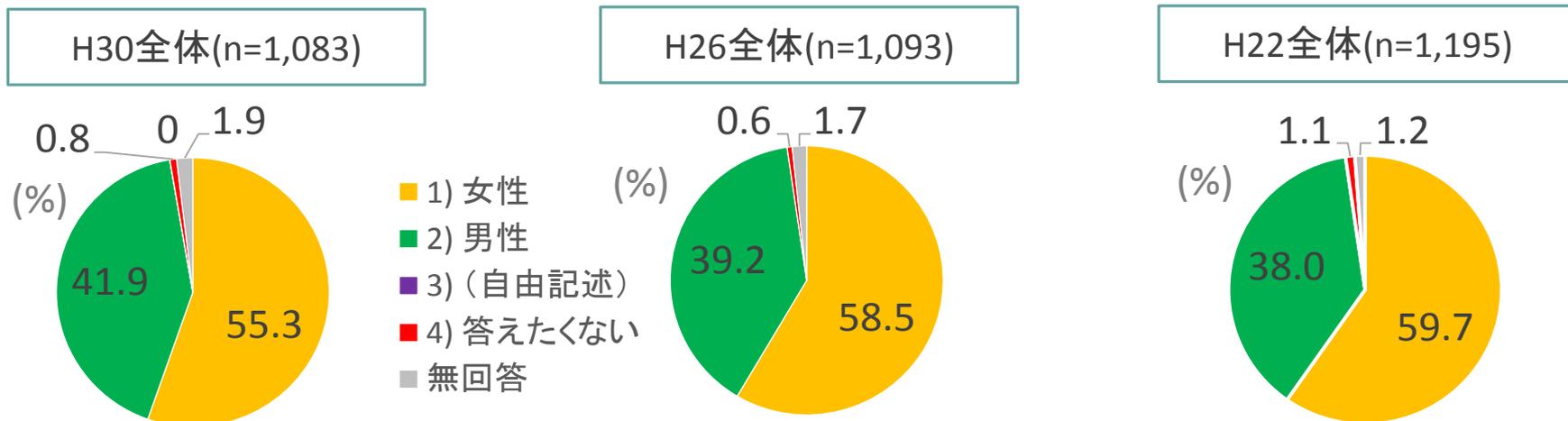
	合計	川崎区	幸区	中原区	高津区	宮前区	多摩区	麻生区	無回答
合計	1083	121	116	191	168	175	148	137	27
	100.0%	11.2%	10.7%	17.6%	15.5%	16.2%	13.7%	12.7%	2.5%
女性	599	73	64	106	95	100	84	73	4
	100.0%	12.2	10.7	17.7	15.9	16.7	14	12.2	0.7
男性	454	46	52	84	72	72	63	63	2
	100.0%	10.1	11.5	18.5	15.9	15.9	13.9	13.9	0.4
答えたくない	9	2	0	1	1	3	1	1	0
	100.0%	22.2	0.0	11.1	11.1	33.3	11.1	11.1	0.0
無回答	21	0	0	0	0	0	0	0	21
	100.0%	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	100.0

※小数点以下を四捨五入しているため、各区の構成割合の合計が100%にならないことがあります。(以下同様)

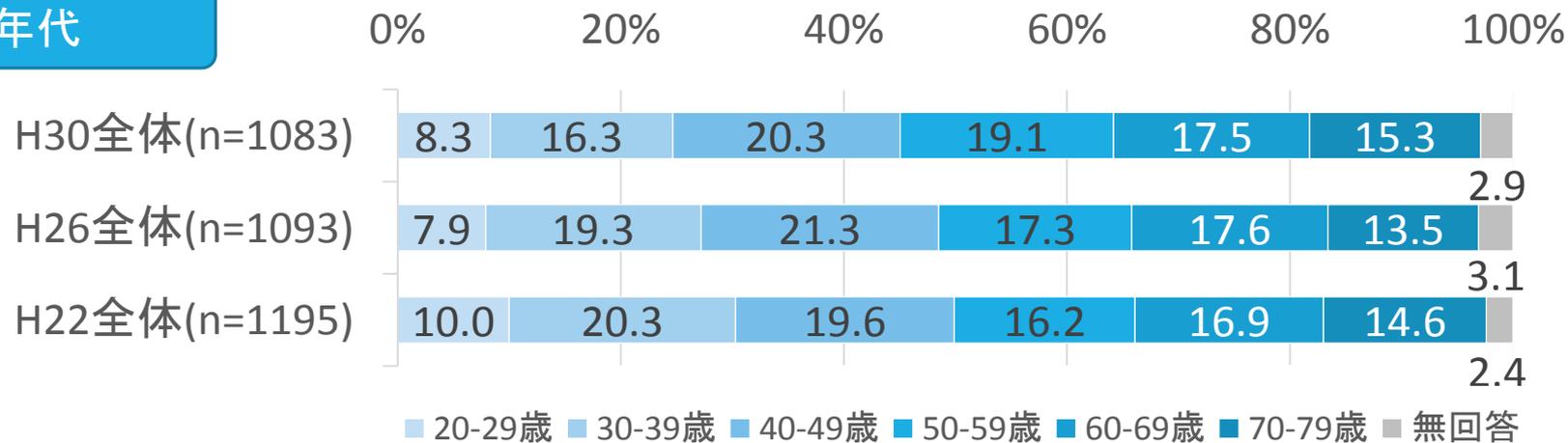
回答者属性

回答者の属性(1):性別、年代

性別



年代

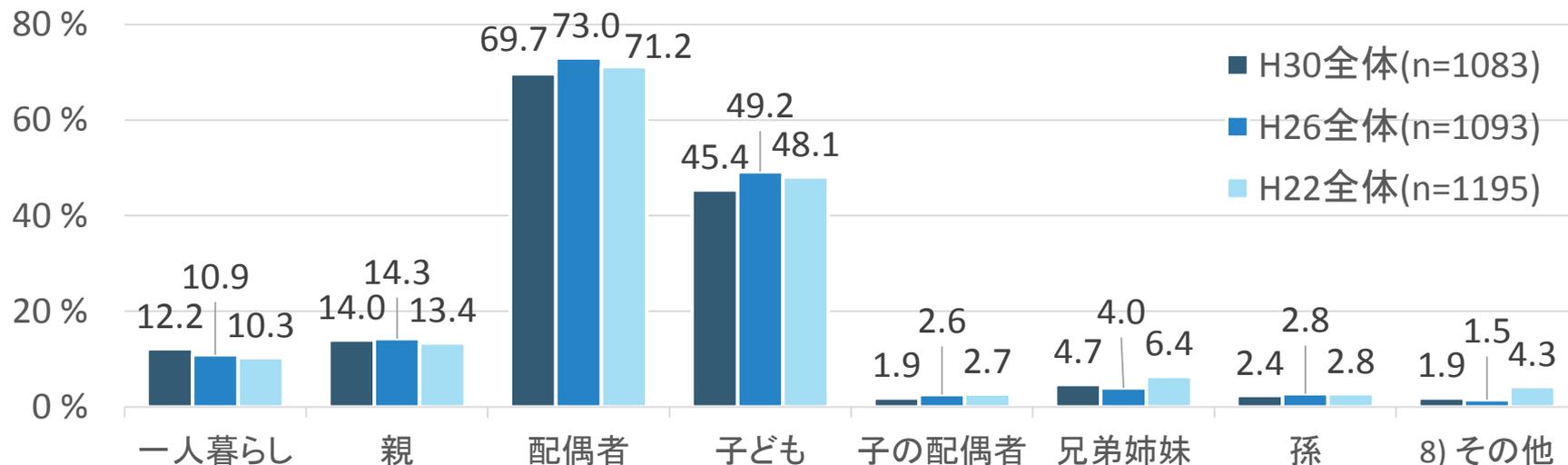


回答者の属性(2): 居住区、同居者

居住区

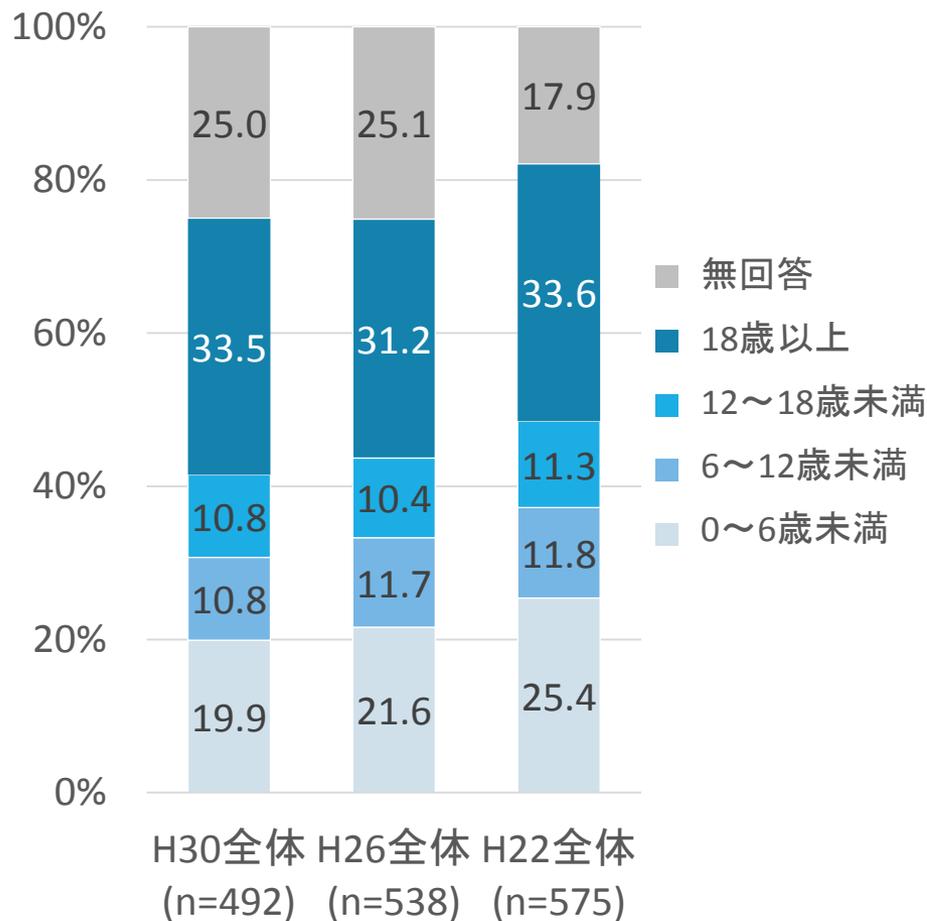


同居者(複数回答)

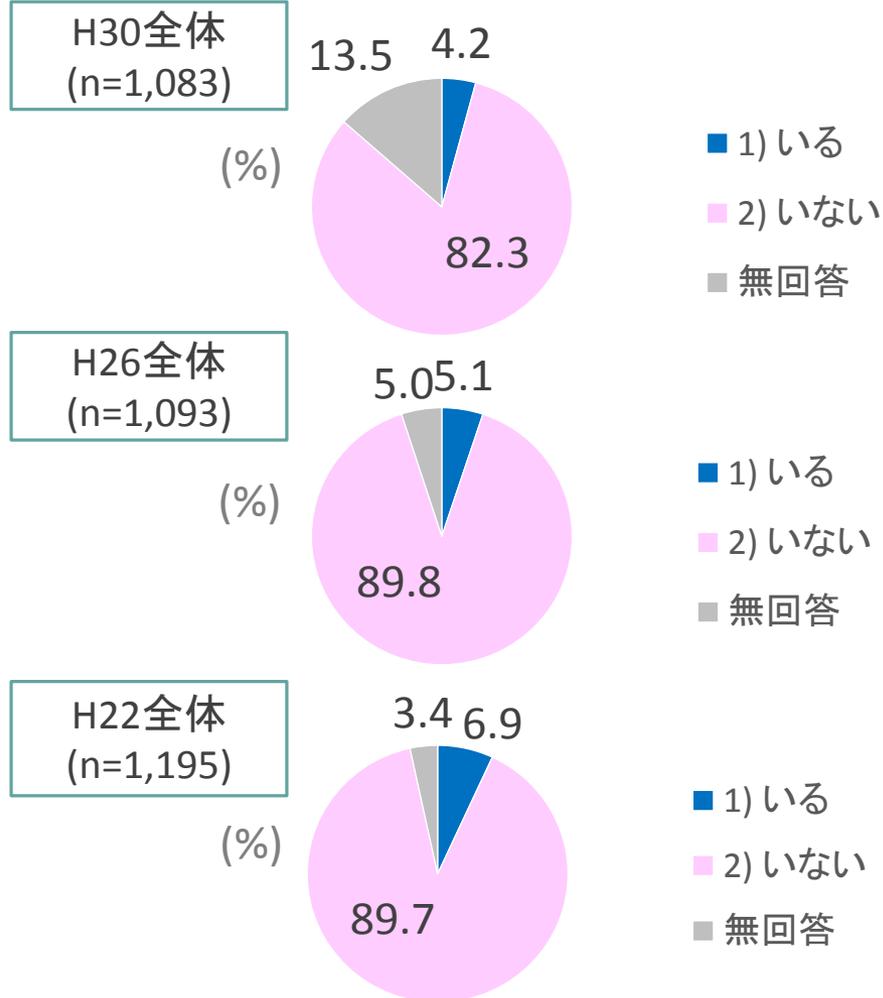


回答者の属性(3)末子年齢、同居要介護者

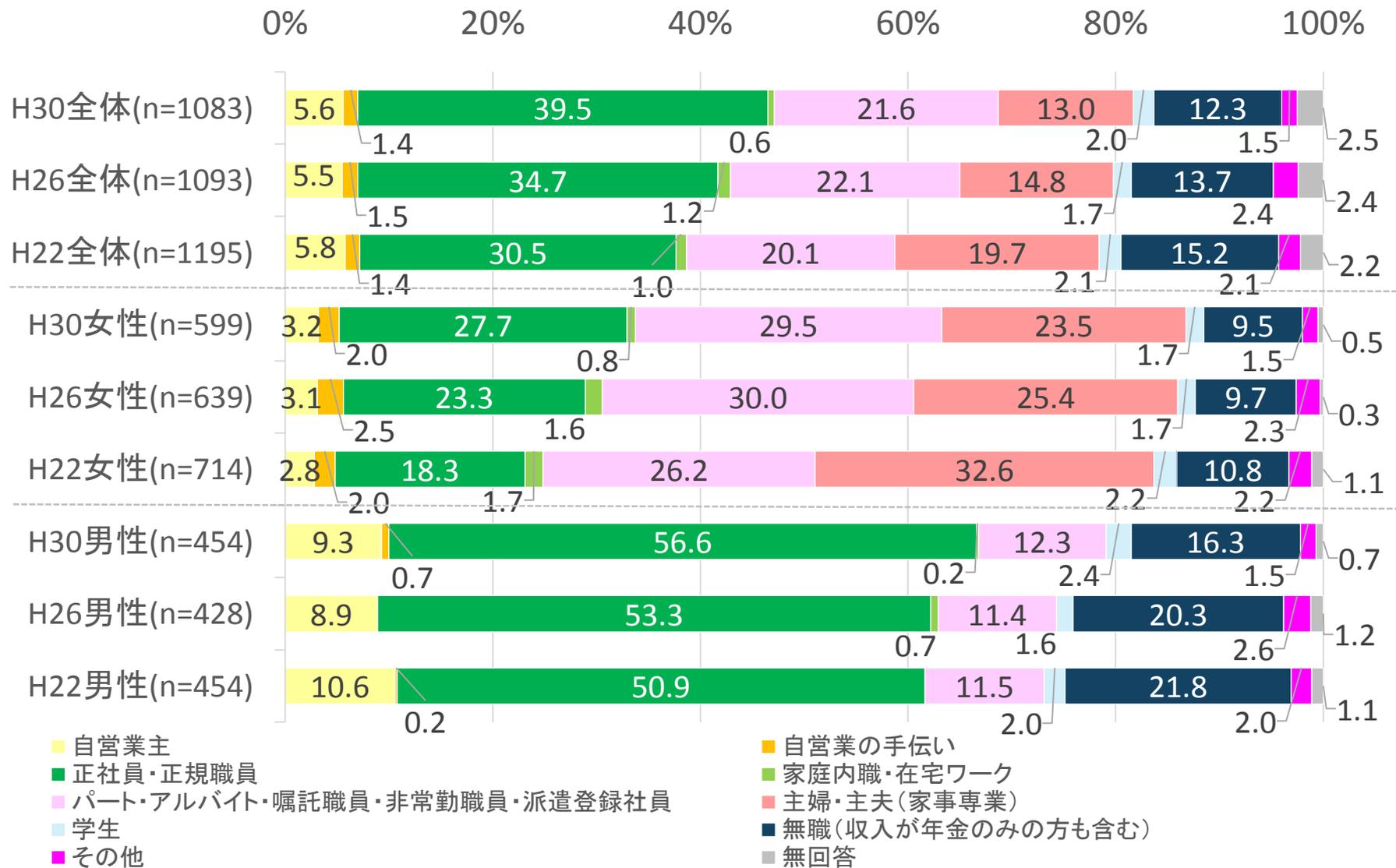
末子年齢



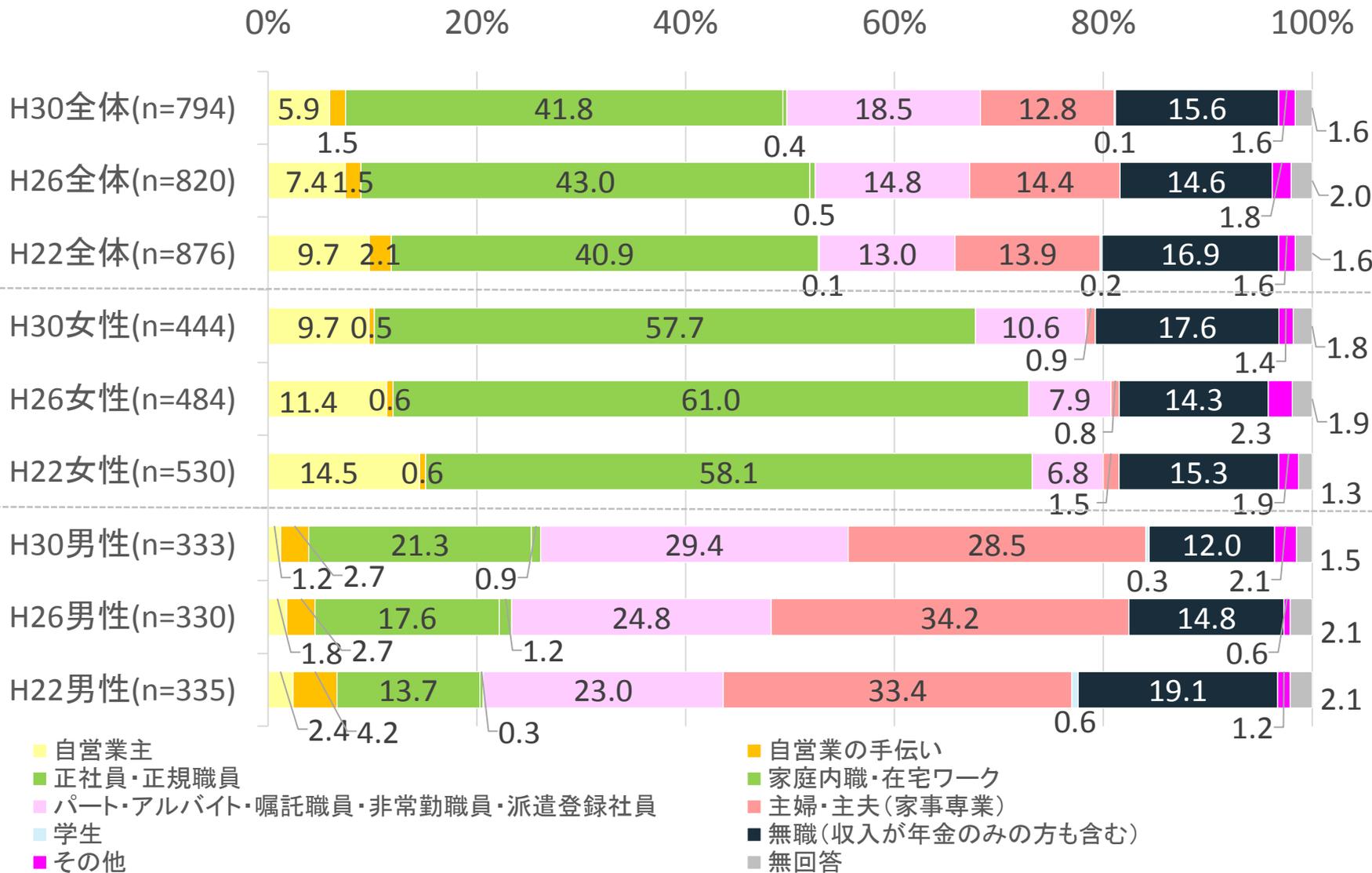
同居要介護者



回答者の属性(4): 本人職業

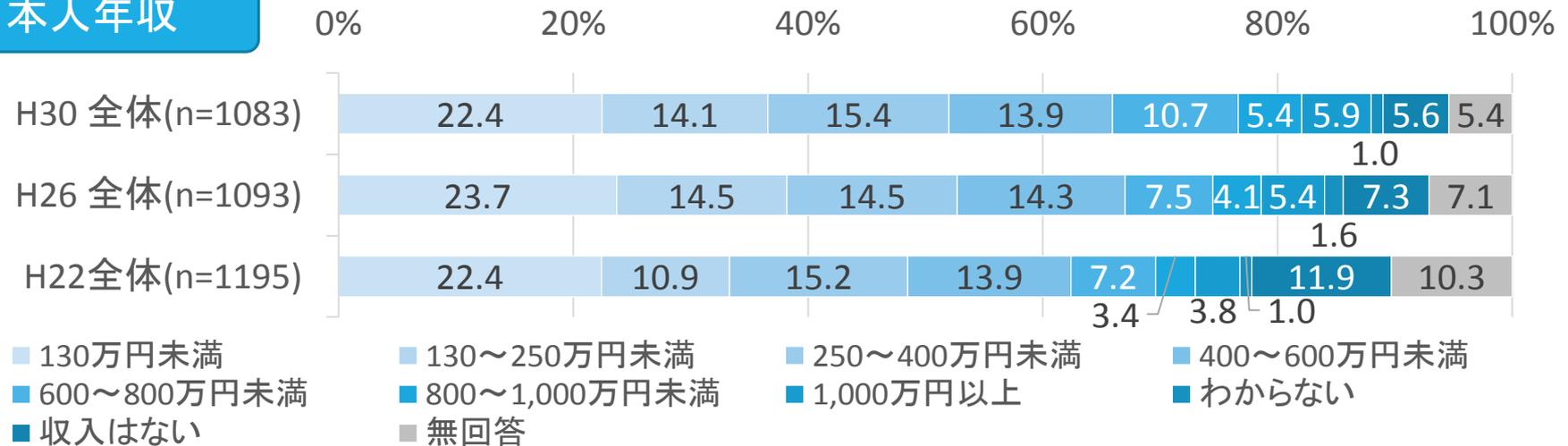


回答者の属性(5): 配偶者・パートナーの職業

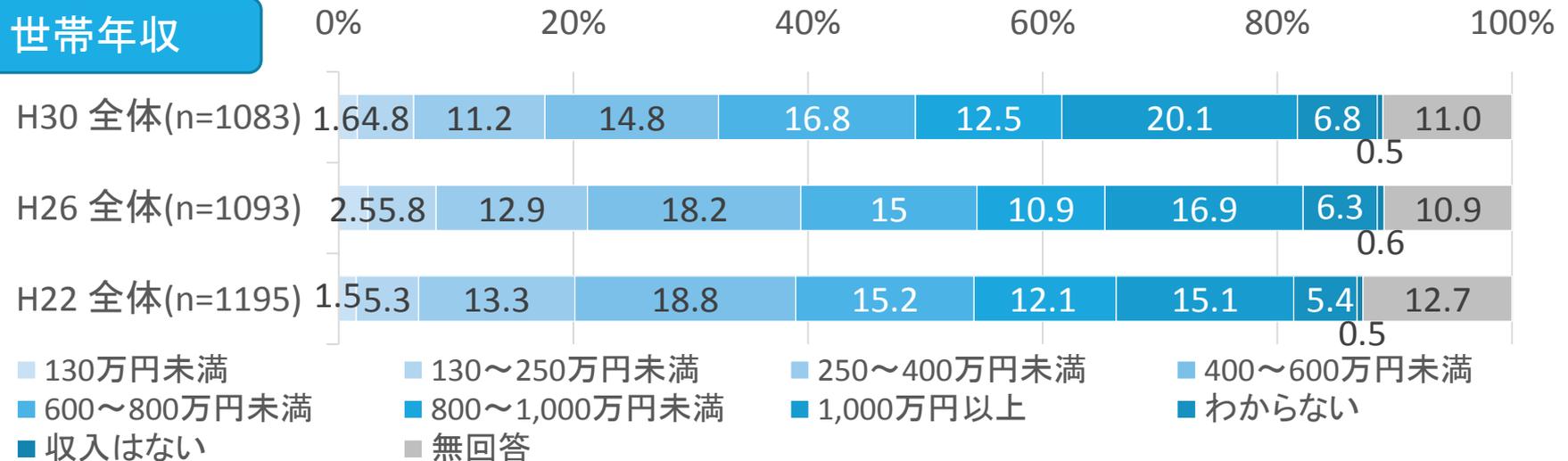


回答者の属性(6): 本人年収、世帯年収

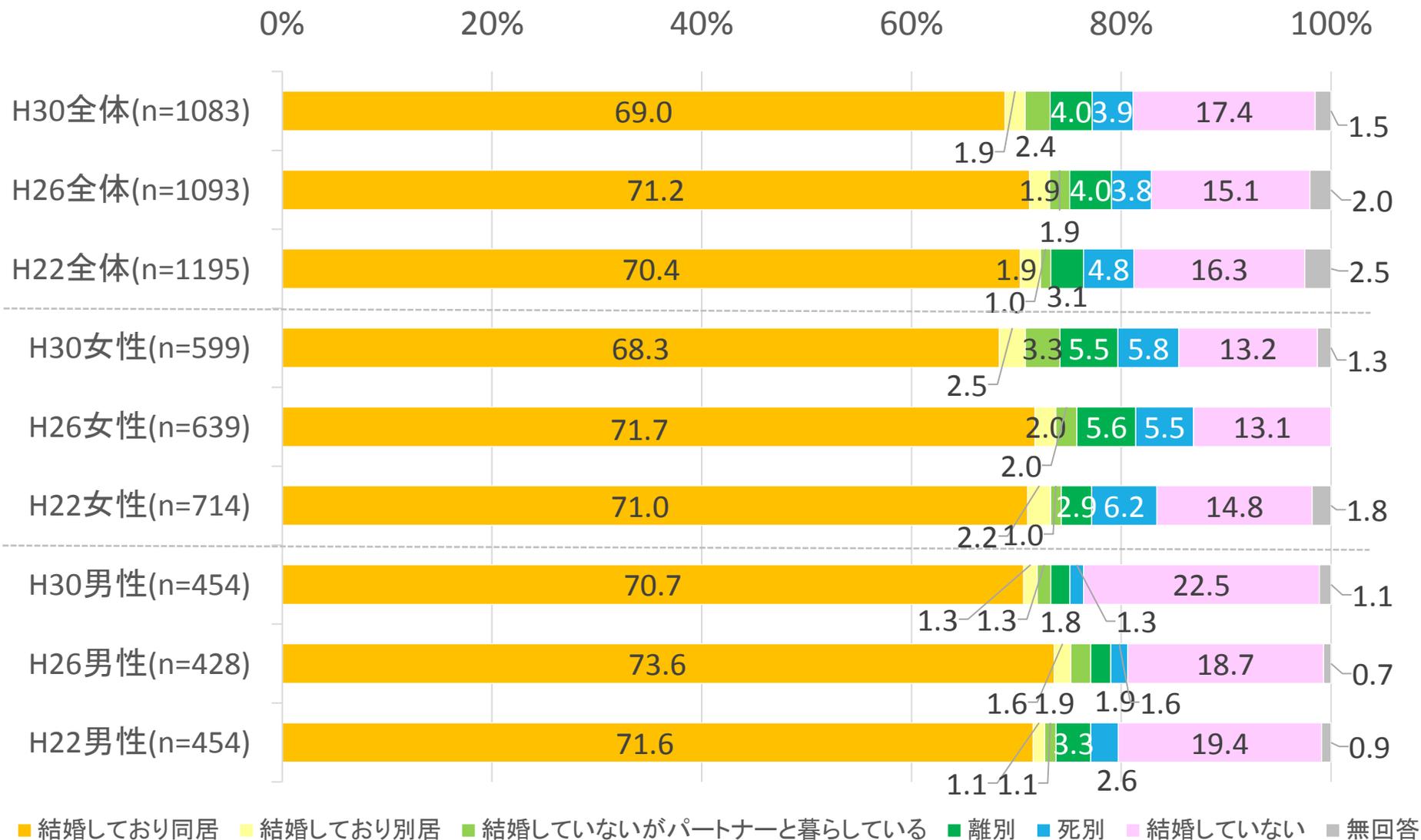
本人年収



世帯年収



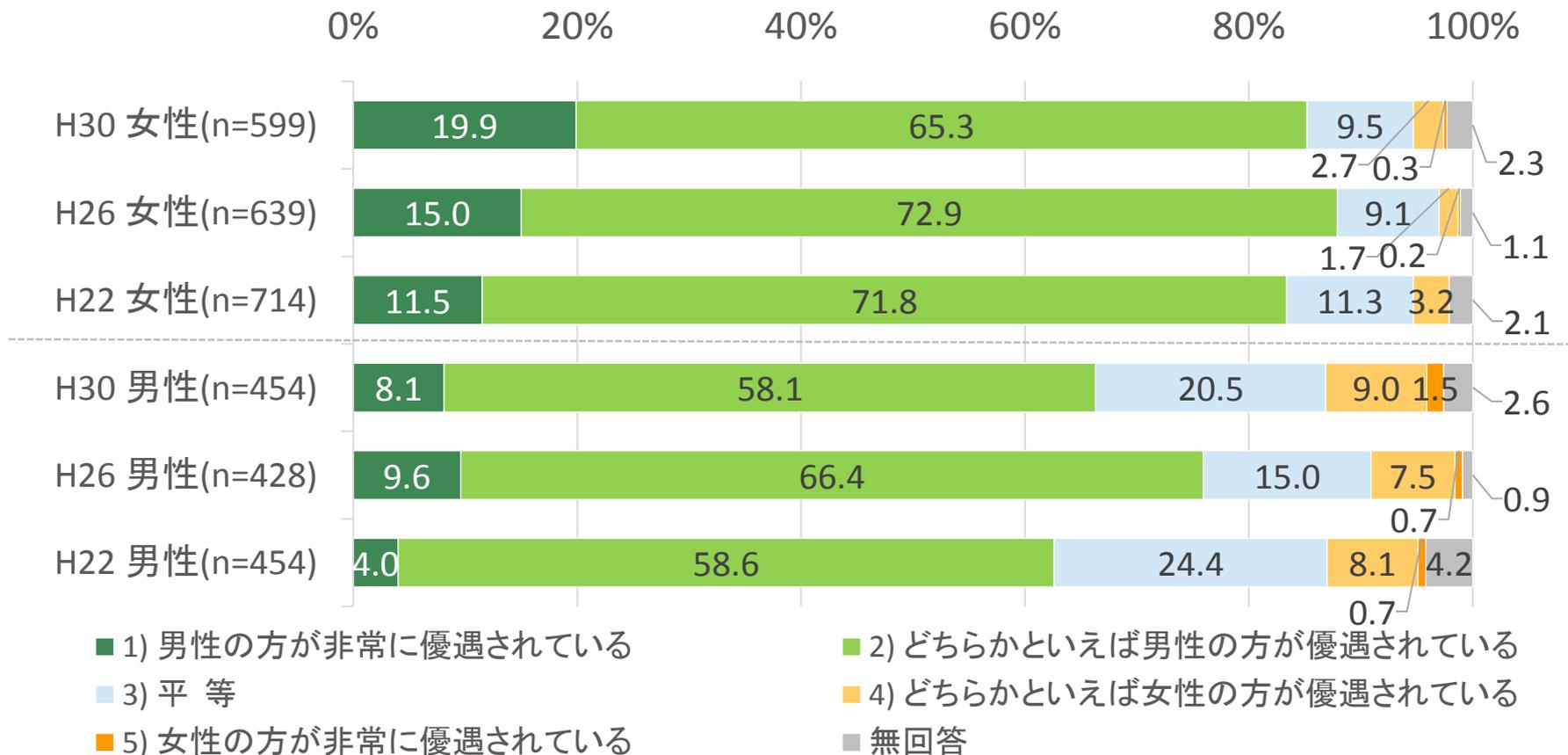
回答者の属性(7): 婚姻状況



1. 男女の地位の平等感

男女の地位の平等感(社会全体)

- 社会全体の男女の地位の平等感は、女性回答者では8割台が〈男性優遇〉と感じており、H22調査、H26調査とほぼ同レベル。ただし、「男性の方が非常に優遇されている」のみを見ると、前回より5ポイント近く増え、19.9%となった。
- 男性回答者では、〈男性優遇〉が前回よりも10ポイント近く下がり、66.3%であった(*)。

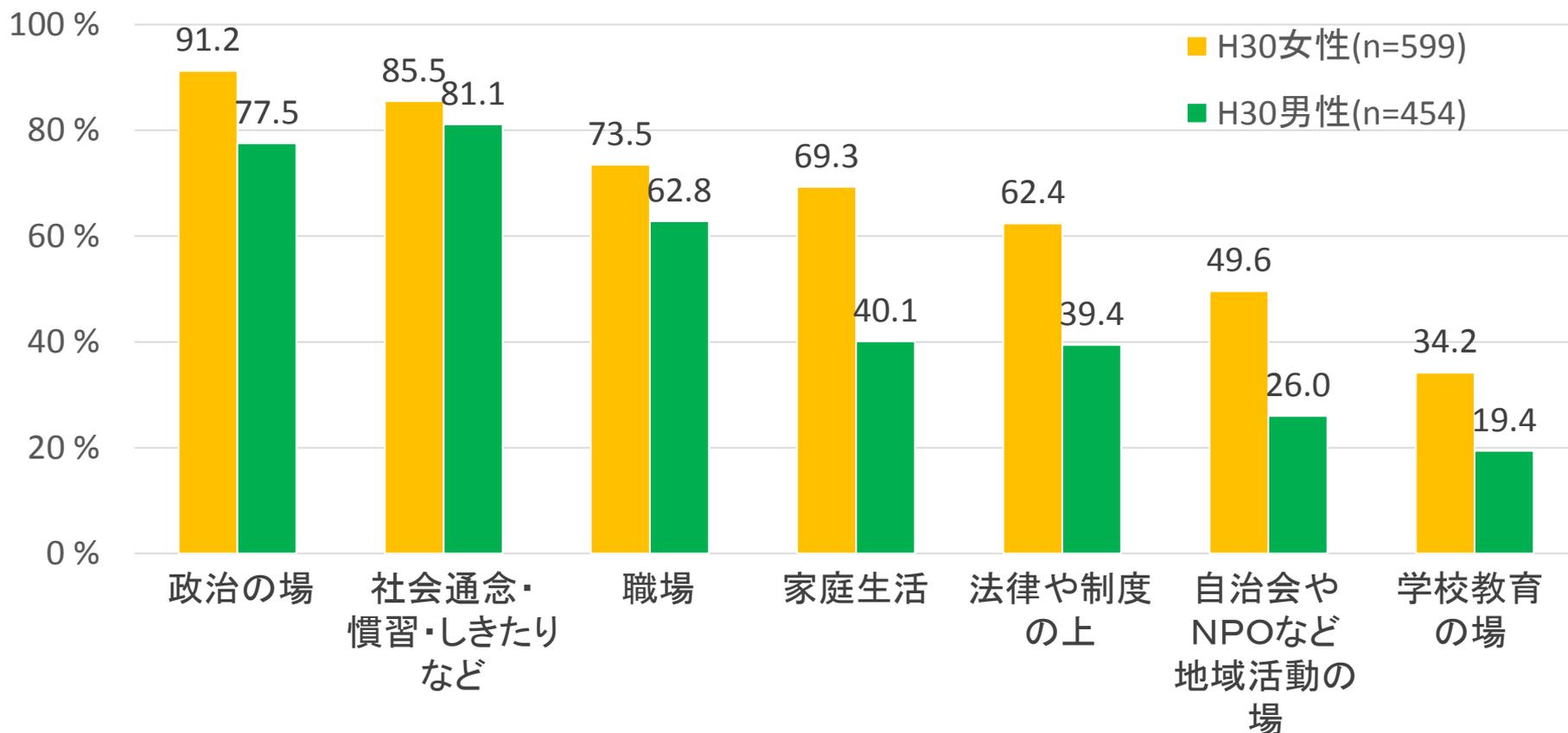


* 解説文中の項目合計数値は、四捨五入により図表の値と一致しない場合があります(以下同様)

男女の地位の平等感：男性優遇サマリー

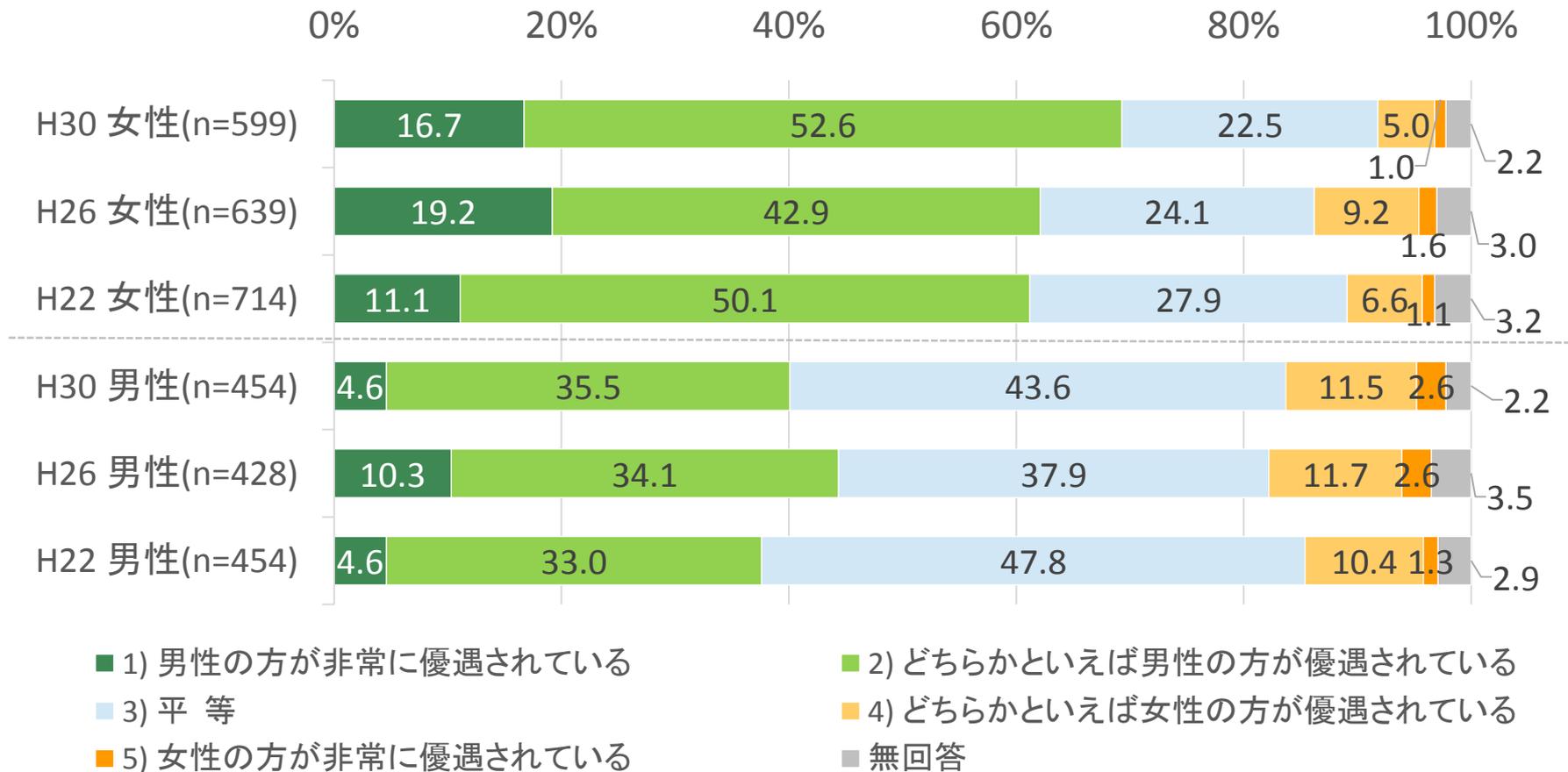
- 分野別に、男性が優遇されているとの回答割合を見ると、女性回答者では「政治の場」が最も高く9割超、次いで「社会通念・慣習・しきたり」が8割台であった。女性では、そのほかにも「職場」、「家庭生活」、「法律や制度」でも、男性が優遇されているとする人が6割以上を占めた。
- 男性回答者でも「社会通念・慣習・しきたり」及び「政治の場」が8割前後と高い点は女性と同様だが、「家庭生活」と「法律や制度」は4割程度となっている。

「男性の方が非常に優遇されている」+「どちらかといえば男性の方が優遇されている」



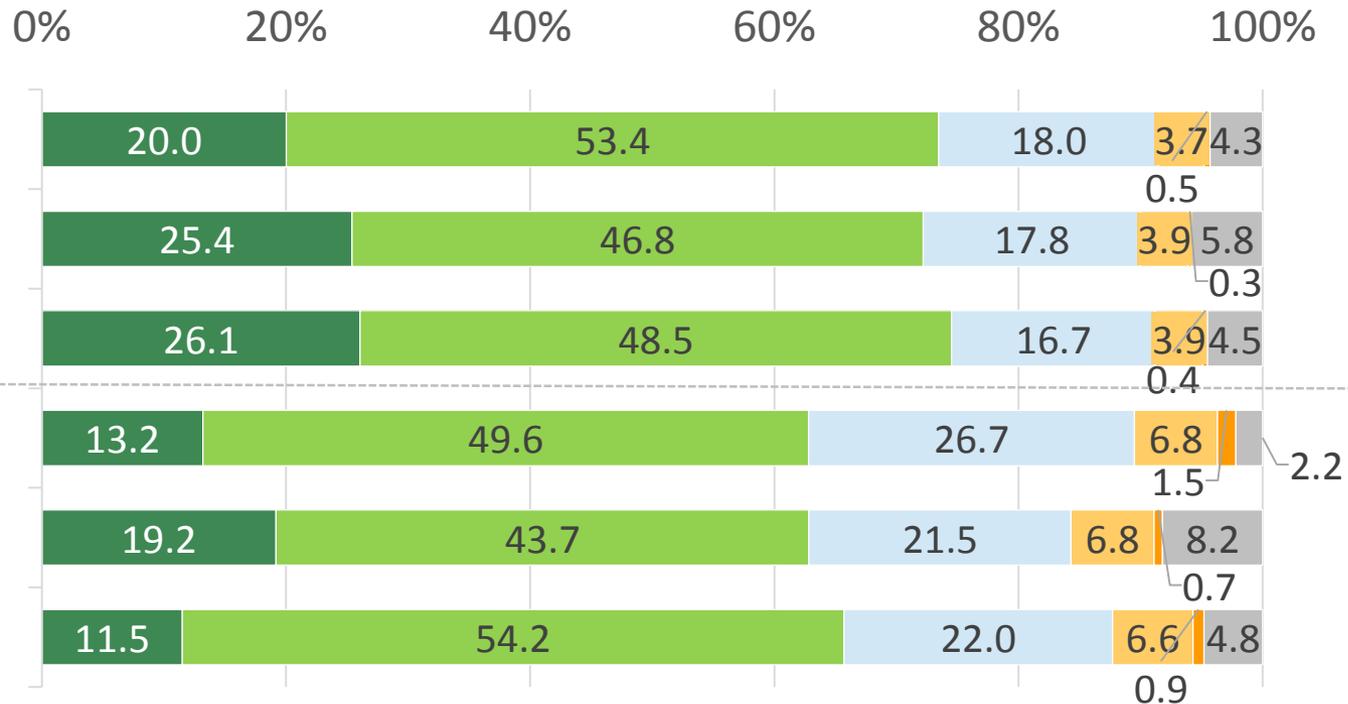
男女の地位の平等感(家庭生活)

- 家庭生活では、女性回答者の69.3%が〈男性優遇〉と回答し、H26(62.1%)よりも7ポイントほど高い。
- 男性回答者では〈男性優遇〉が40.1%で、女性回答者と30ポイント近い開きがある。



男女の地位の平等感(職場)

- 職場の平等感について、女性回答者はH22、H26とほぼ変わっておらず、7割超が〈男性優遇〉としている。
- 男性回答者も、〈男性優遇〉が6割超と大きな変化はない。女性回答者とのギャップは10ポイントほどであった。

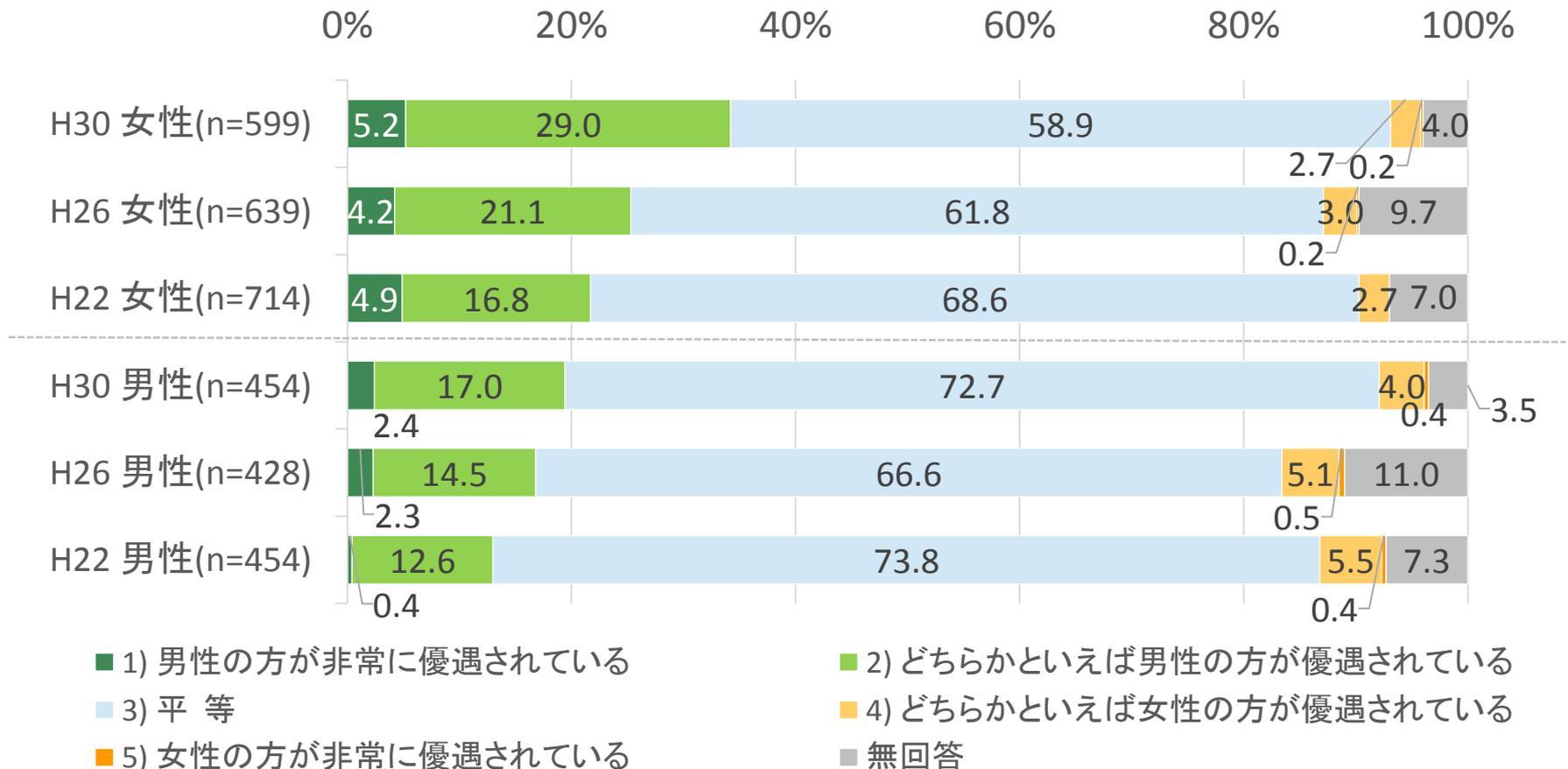


- 1) 男性の方が非常に優遇されている
- 3) 平等
- 5) 女性の方が非常に優遇されている

- 2) どちらかといえば男性の方が優遇されている
- 4) どちらかといえば女性の方が優遇されている
- 無回答

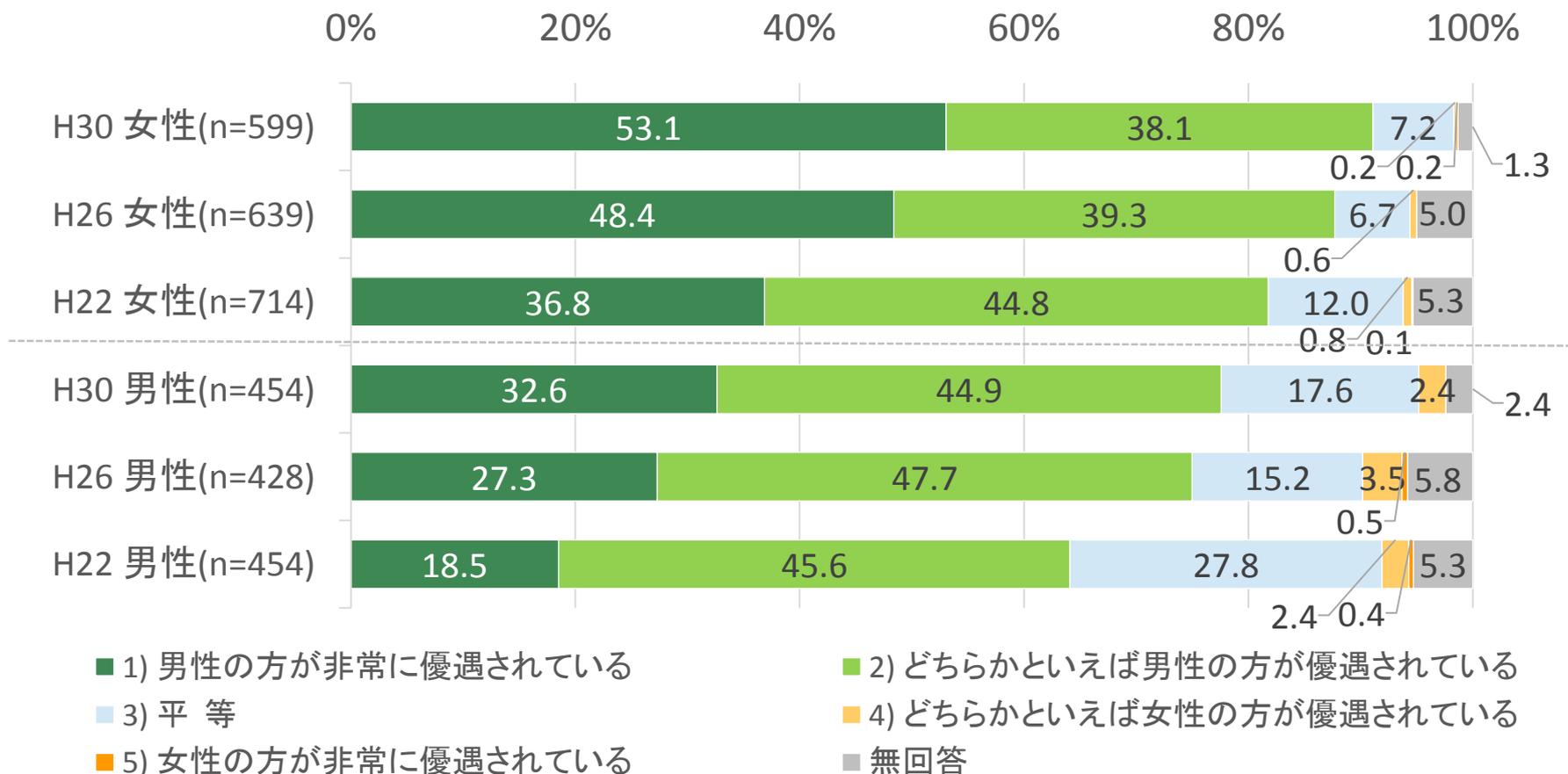
男女の地位の平等感(学校教育の場)

- 学校教育の場は、他分野よりも比較的に平等感がもたれていた分野だが、今回の調査では〈男性優遇〉が女性回答者の34.2%を占め、H26調査よりも9ポイント近く上昇した。
- 男性回答者でも〈男性優遇〉が年々微増し、19.4%となった。



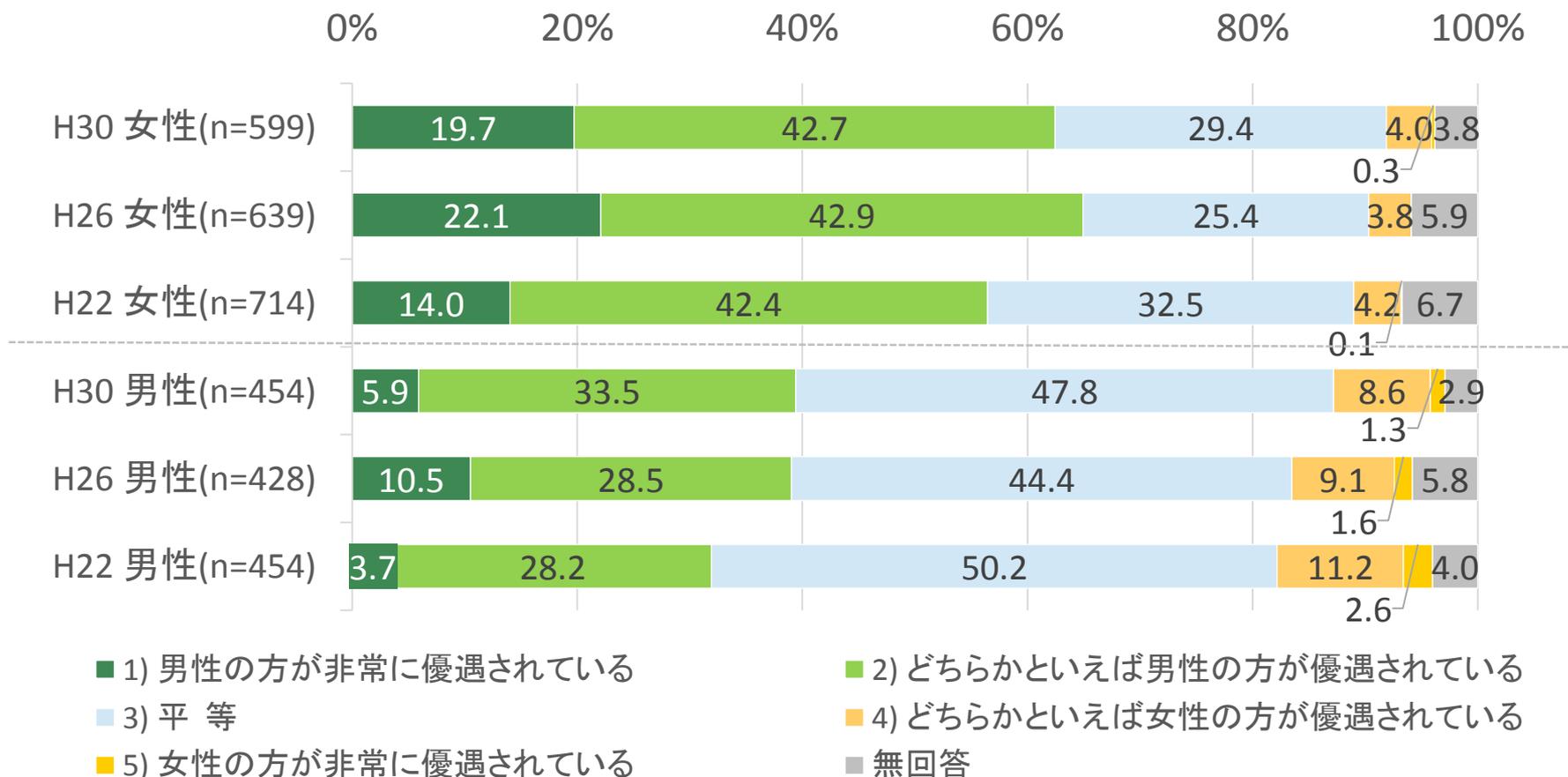
男女の地位の平等感（政治の場）

- 政治の場における平等感は、他分野よりも〈男性優遇〉の割合が高く、女性回答者では9割を超えた。「男性の方が非常に優遇されている」のみでも53.1%と、過半数を占めている。
- 男性回答者でも、8割近くが〈男性優遇〉と回答している。



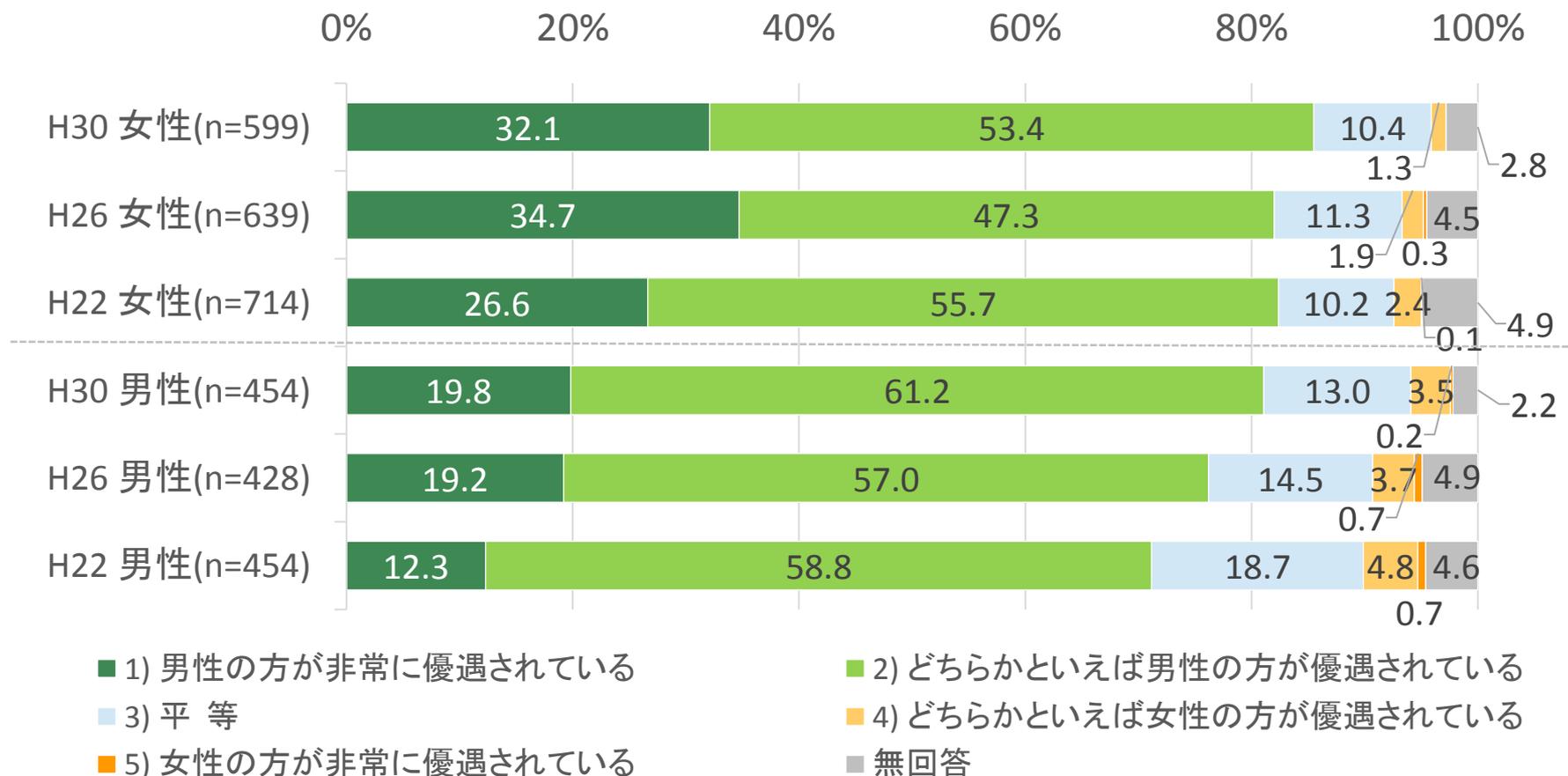
男女の地位の平等感(法律や制度の上)

- 法律や制度の上での平等感は、男女ともH26調査と同水準で、女性回答者の6割超、男性回答者の約4割が〈男性優遇〉と感じている。
- 男女間で平等感の差が大きく、〈男性優遇〉の割合には20ポイント以上の開きがある。



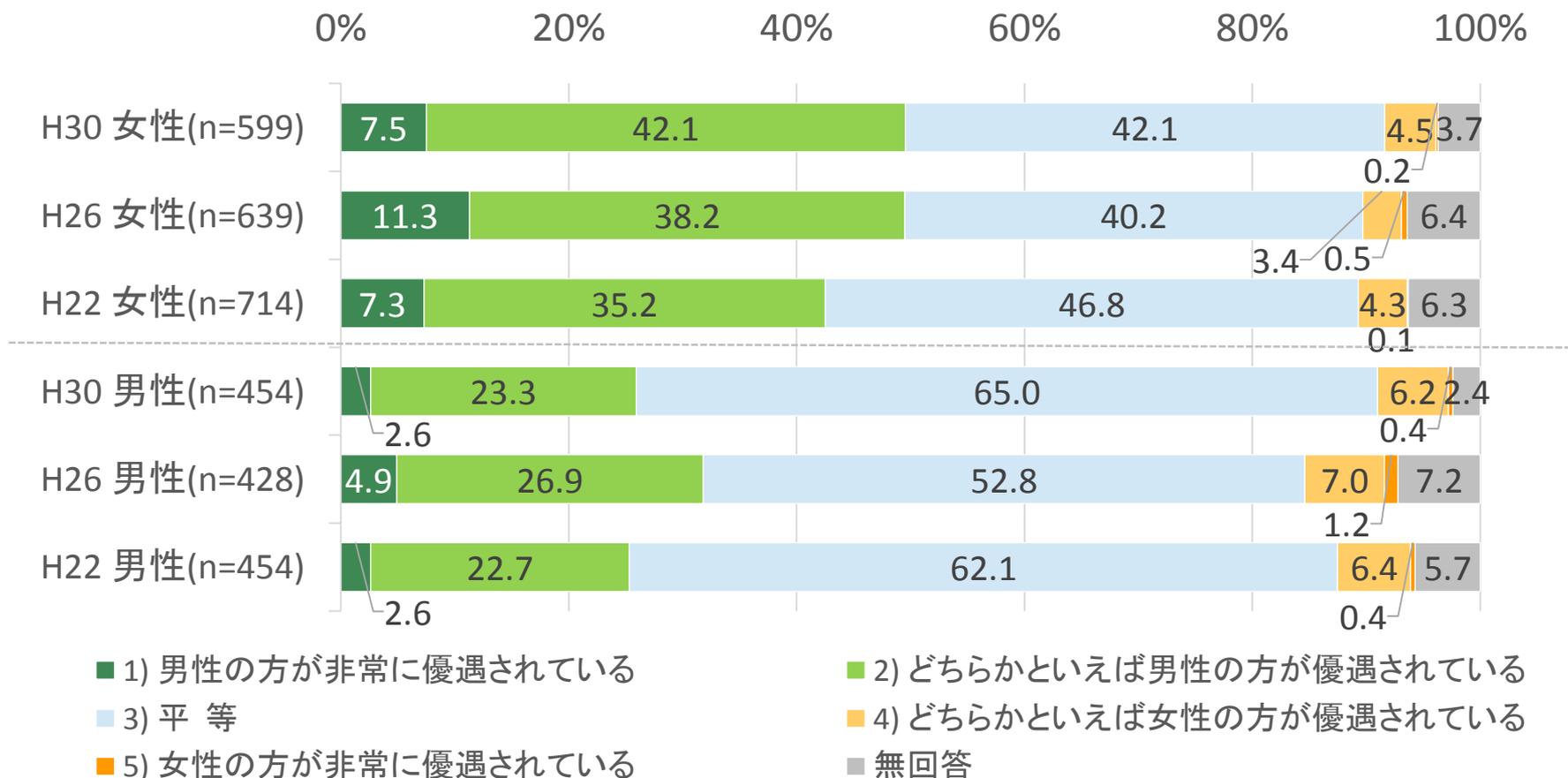
男女の地位の平等感(社会通念・慣習・しきたり)

- 社会通念・慣習・しきたりについては〈男性優遇〉の割合が高めで、女性回答者では8割台半ばとなっている。
- 男性回答者でも〈男性優遇〉の割合は高く、8割以上を占めた。



男女の地位の平等感(自治会やNPOなど地域活動の場)

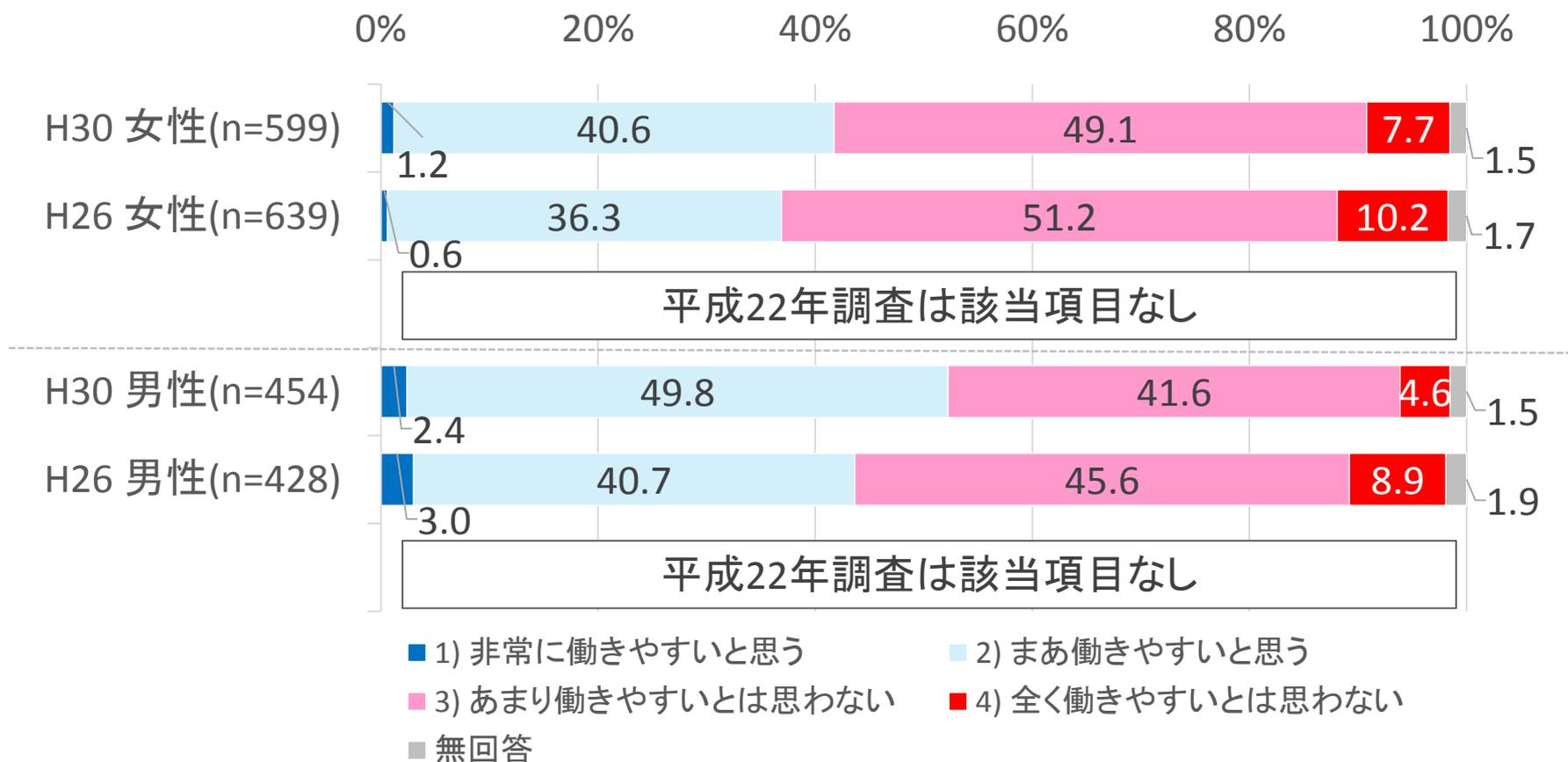
- 自治会やNPOなど地域活動の場については、女性回答者は前回と同水準で約半数が〈男性優遇〉と感じている。
- 男性回答者はH26調査より〈男性優遇〉が5ポイントあまり減少し、26.0%であった。



2. 女性にとっての 働きやすさ

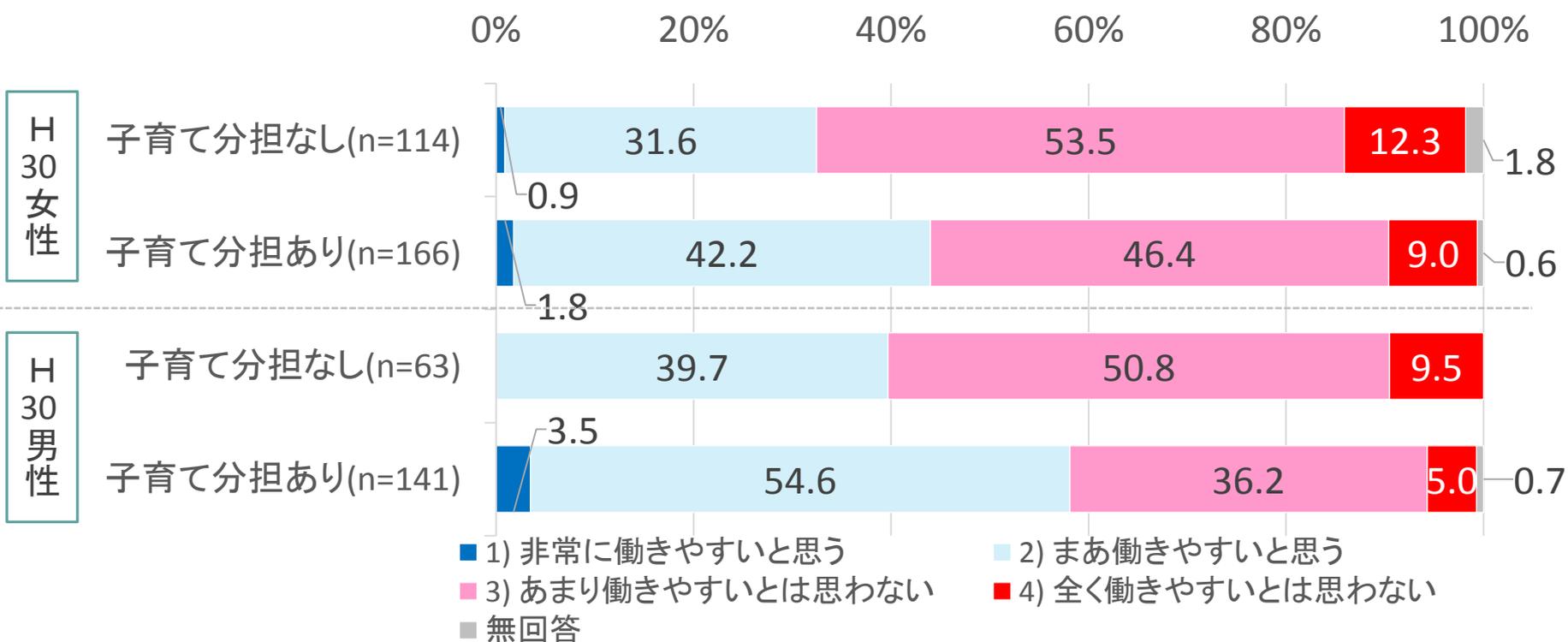
いまの社会は女性にとって働きやすいか

- 女性回答者では、「非常に働きやすい」または「まあ働きやすい」が約4割に留まり、「全く働きやすいとは思わない」または「あまり働きやすいとは思わない」との回答が6割近くで過半数を占めた。
- 男性では、「非常に働きやすい」または「まあ働きやすい」が合わせて約5割、「全く働きやすいとは思わない」または「あまり働きやすいとは思わない」が4割台半ばで、拮抗している。



いまの社会は女性にとって働きやすいか

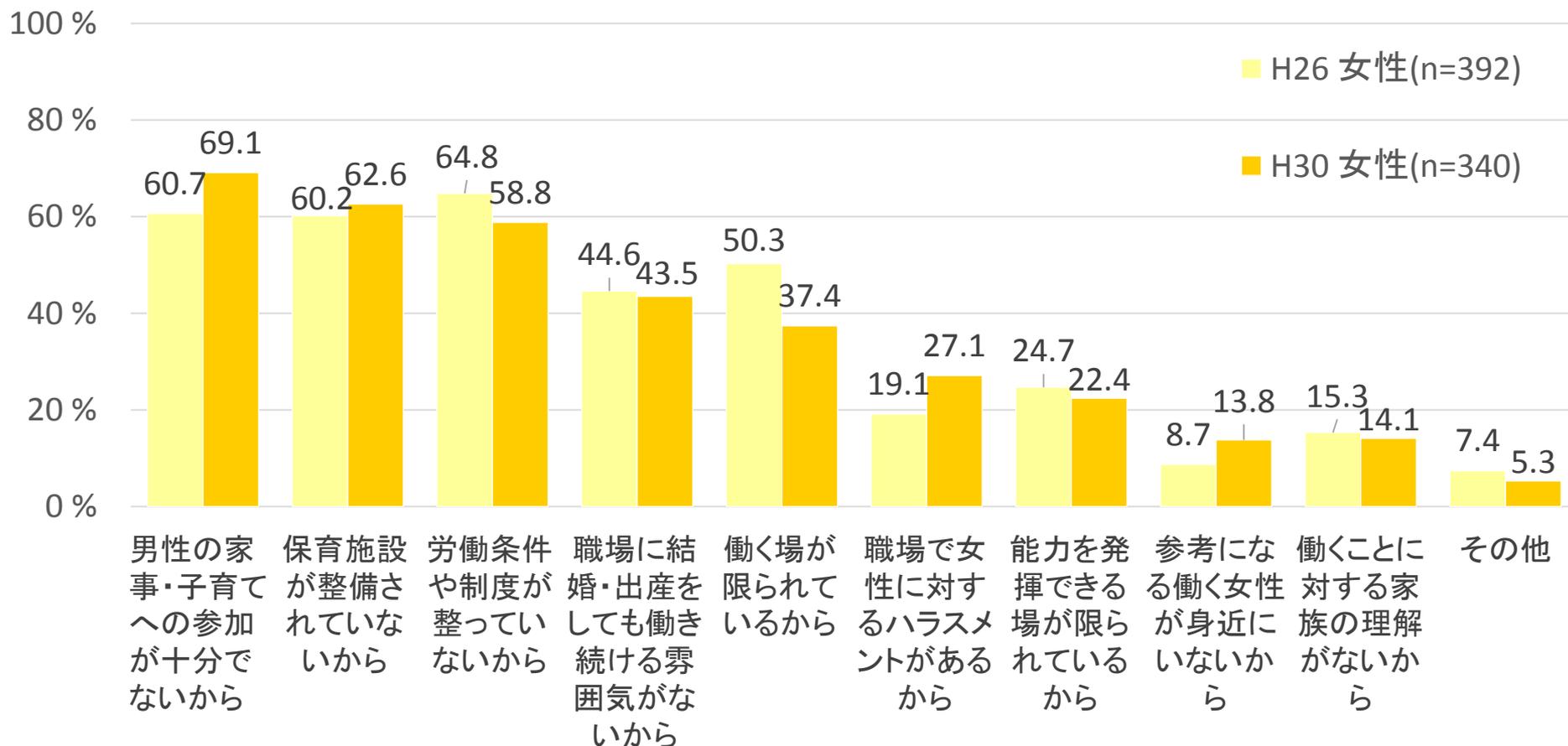
- 配偶者またはパートナーと子育てについて分担しているかどうかで見ると、子育て分担ありの男性の「働きやすい」との回答割合が統計的に有意に高い結果となった。(女性の子育て分担有無では統計的な有意差はない。)



子育て分担あり=子育て分担状況に関する質問で「どちらかといえば自分が中心」「どちらかといえば配偶者またはパートナーが中心」のいずれかを回答した人
 子育て分担なし=同じ質問で「自分が中心」(女性)または「配偶者またはパートナーが中心」(男性)と回答した人

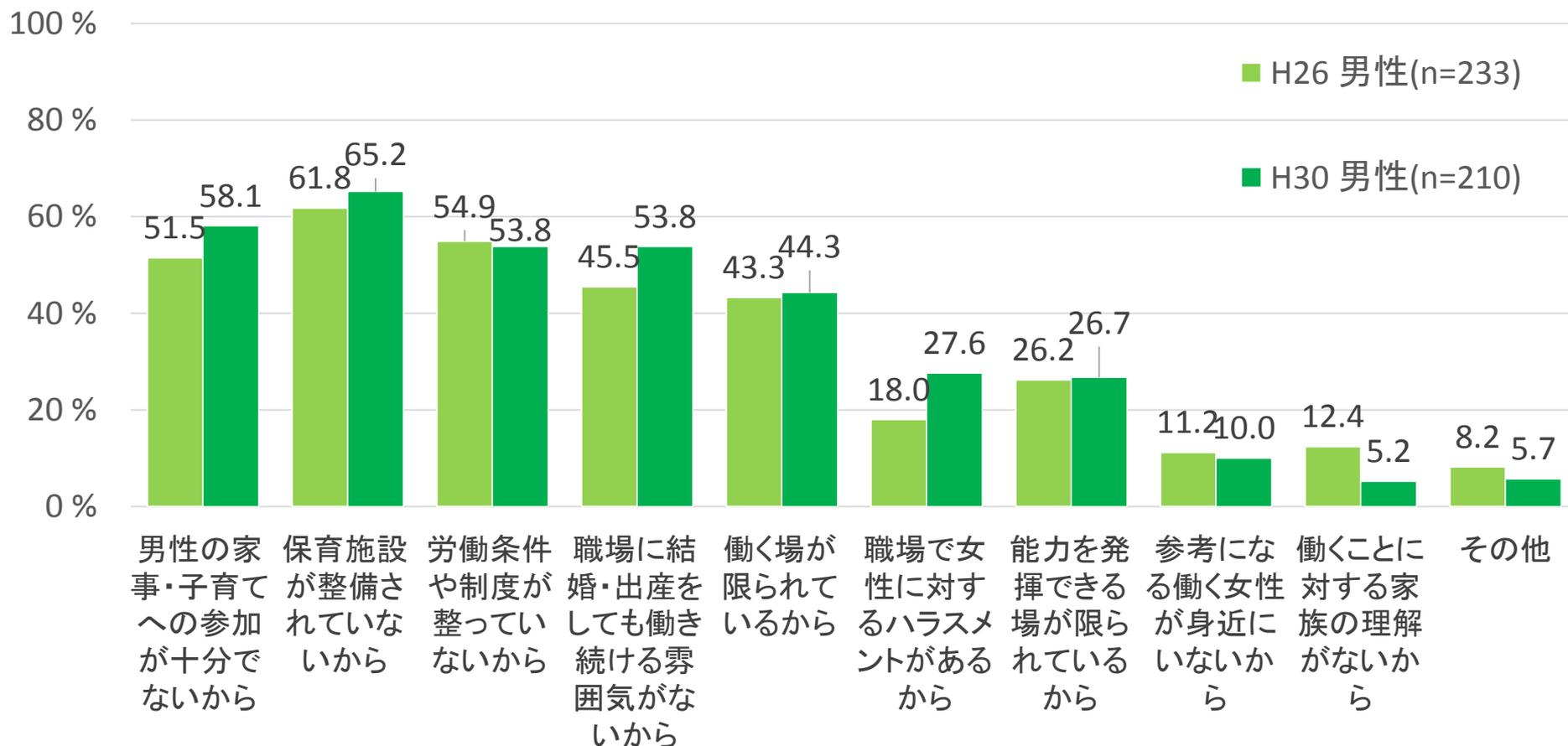
女性にとって働きやすいと思わない理由(女性、複数回答)

- 前問で「全く働きやすいとは思わない」または「あまり働きやすいとは思わない」と回答した人に、その理由を尋ねた。
- 女性回答者では、回答傾向はH26調査と変わらず、「男性の家事・子育てへの参加が十分でない」、「保育施設が整備されていない」、「労働条件や制度が整っていない」が上位3項目となった。



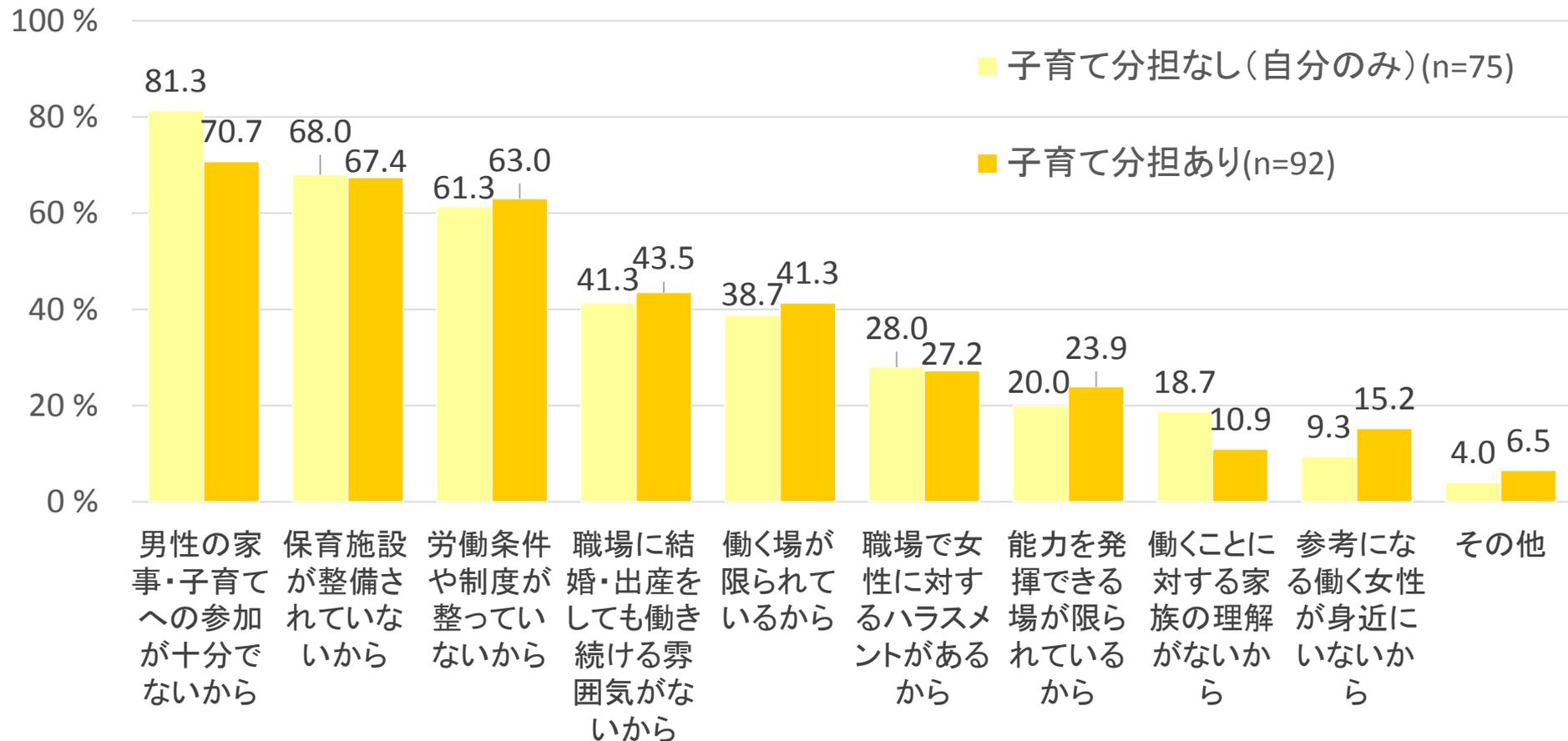
女性にとって働きやすいと思わない理由(男性、複数回答)

- 男性回答者が挙げた理由も女性回答者と大きな違いはないが、「職場に結婚・出産をしても働き続ける雰囲気がない」も過半数となっている。
- 最も多く挙げたのは「保育施設が整備されていない」で、65.2%。「男性の家事・子育て参加が十分でない」は、女性が回答した69.1%より約10ポイント低い58.1%であった。



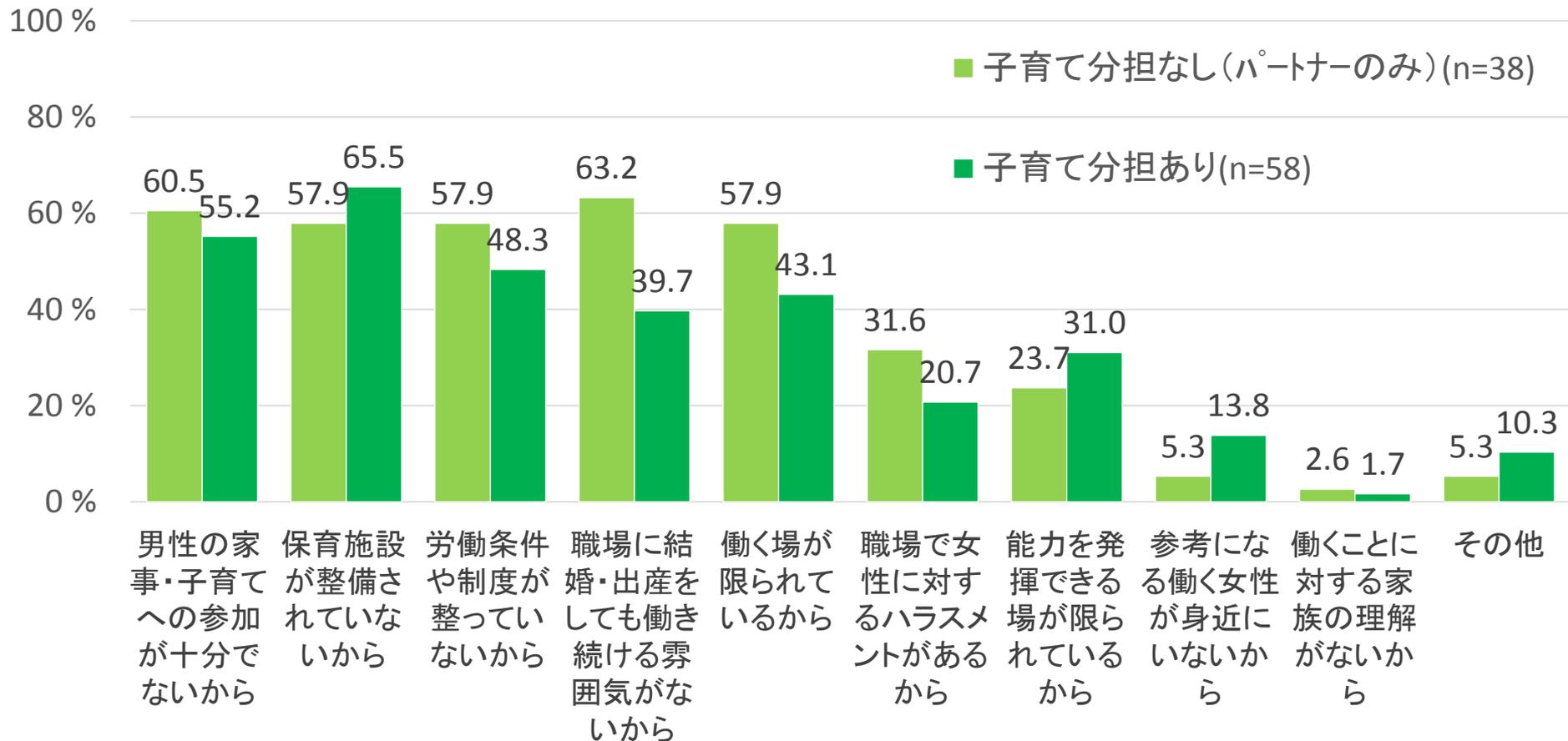
女性にとって働きやすいと思わない理由 (女性・子育て分担有無別、複数回答)

- 女性回答者において、子育て分担の有無による違いはあまり見られず、「男性の家事・子育てへの参加が十分でない」、「保育施設が整備されていない」、「労働条件や制度が整っていない」がいずれも過半数となり、上位3項目となった。



女性にとって働きやすいと思わない理由 (男性・子育て分担有無別、複数回答)

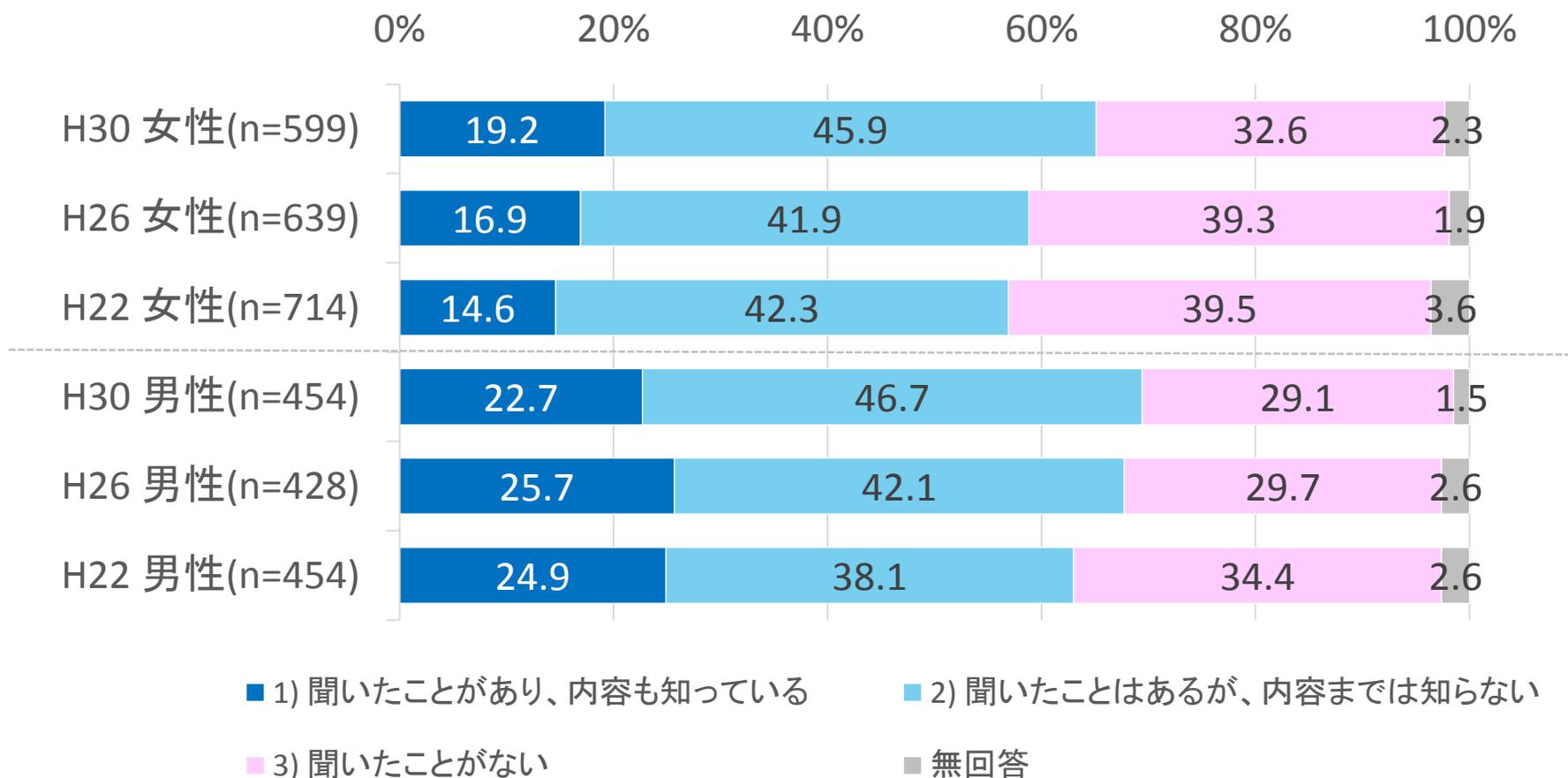
- 男性回答者においては、「職場に結婚・出産をしても働き続ける雰囲気がない」、「働く場が限られている」、「職場で女性に対するハラスメントがある」の項目について、子育て分担ありの層は分担なしの層より10ポイント以上低くなっている。



3. 用語や制度の認知

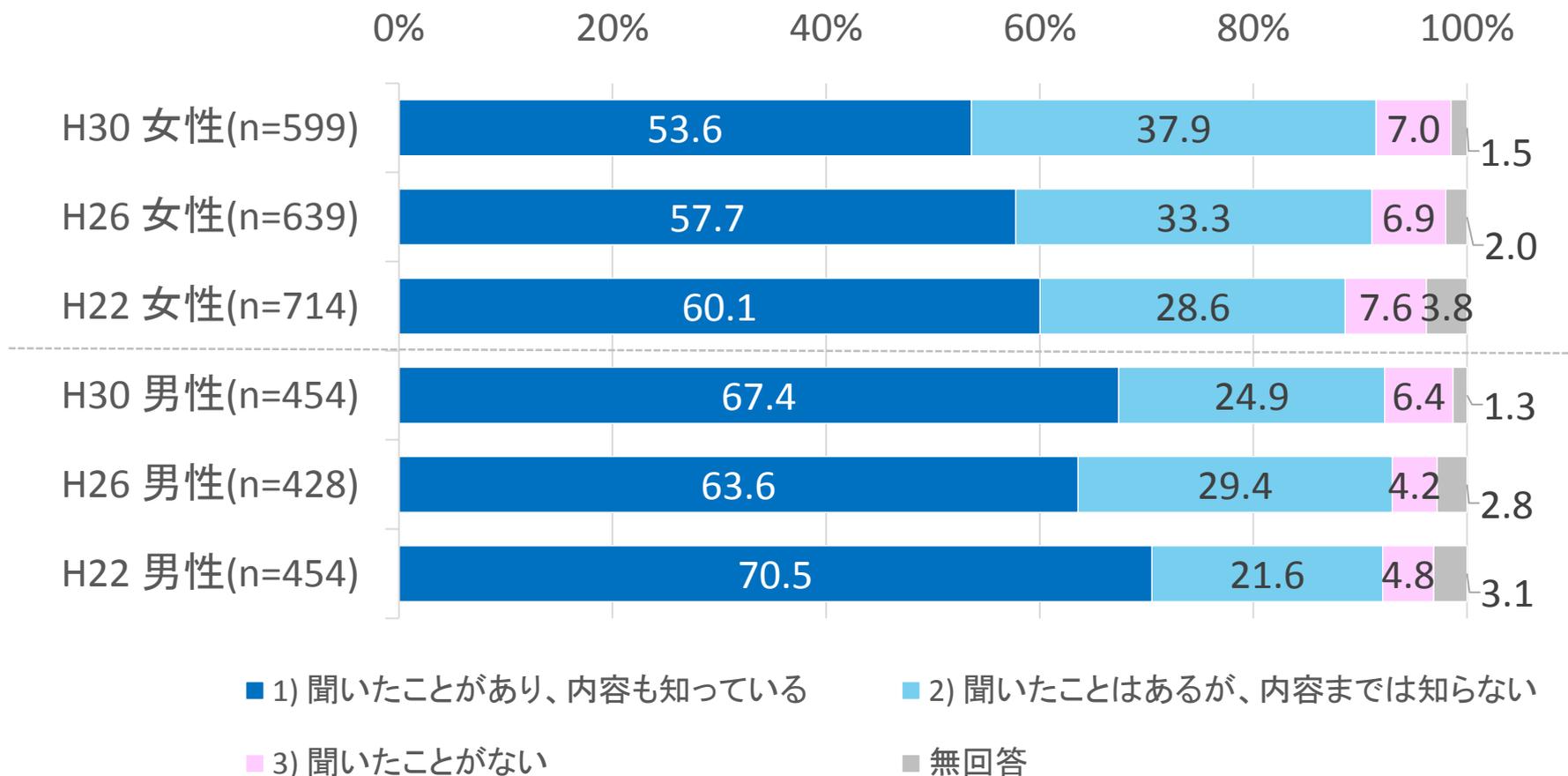
用語や制度の認知:「男女共同参画社会」

- 「男女共同参画社会」については、女性回答者の65.1%、男性回答者の69.4%が「聞いたことがある」と回答した。
- 「聞いたことがあり、内容も知っている」は女性は2割弱、男性は2割超であった。



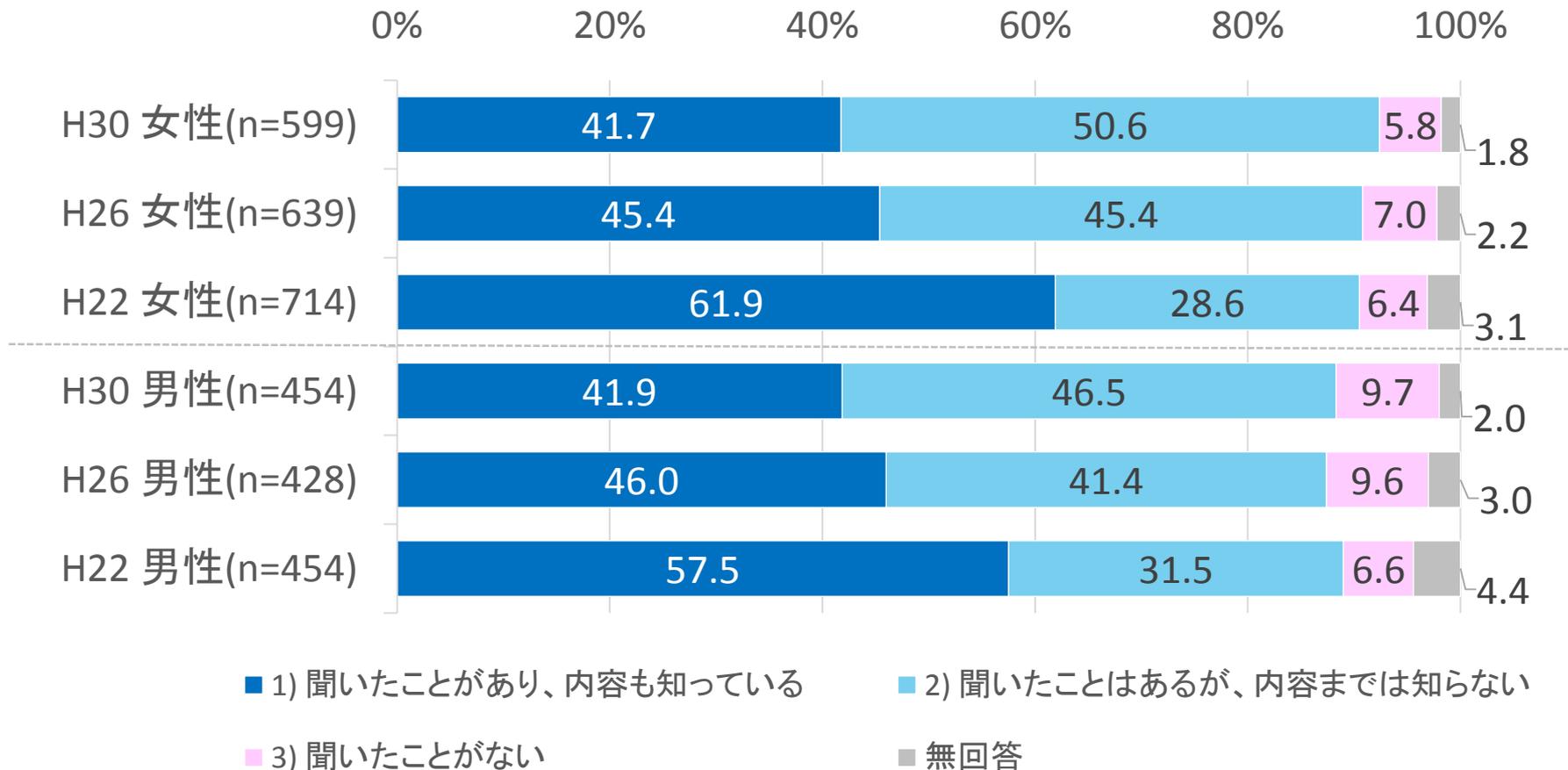
用語や制度の認知:「男女雇用機会均等法」

- 「男女雇用機会均等法」は、男女とも「聞いたことがある」人が9割以上を占めている。
- 「聞いたことがあり、内容も知っている」は、女性回答者では53.6%、男性回答者では67.4%であった。



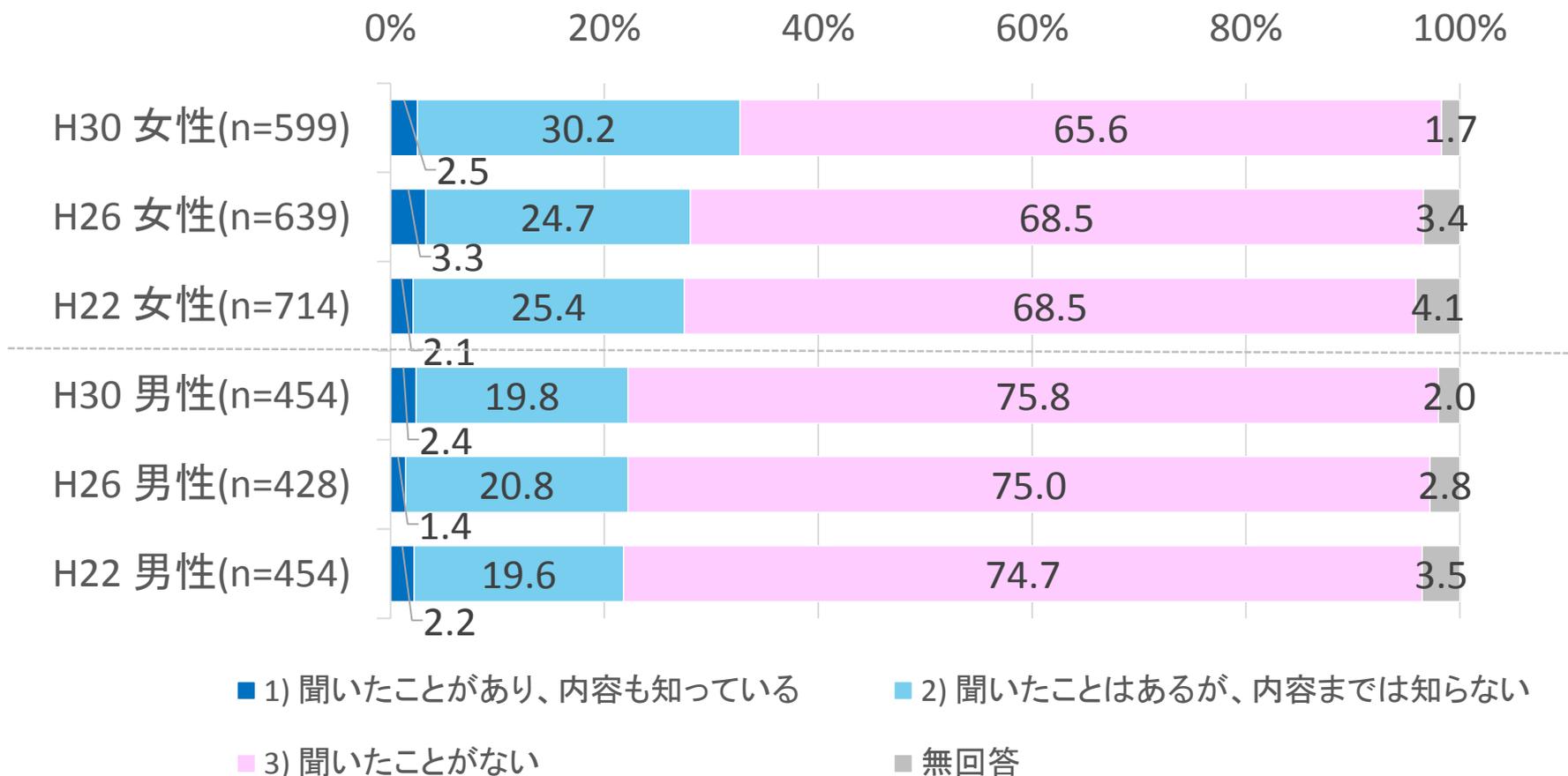
用語や制度の認知:「DV防止法」

- 「DV防止法」については、女性回答者の9割超、男性回答者の9割弱が「聞いたことがある」と回答している。
- 「内容も知っている」は、男女とも4割超となっている。



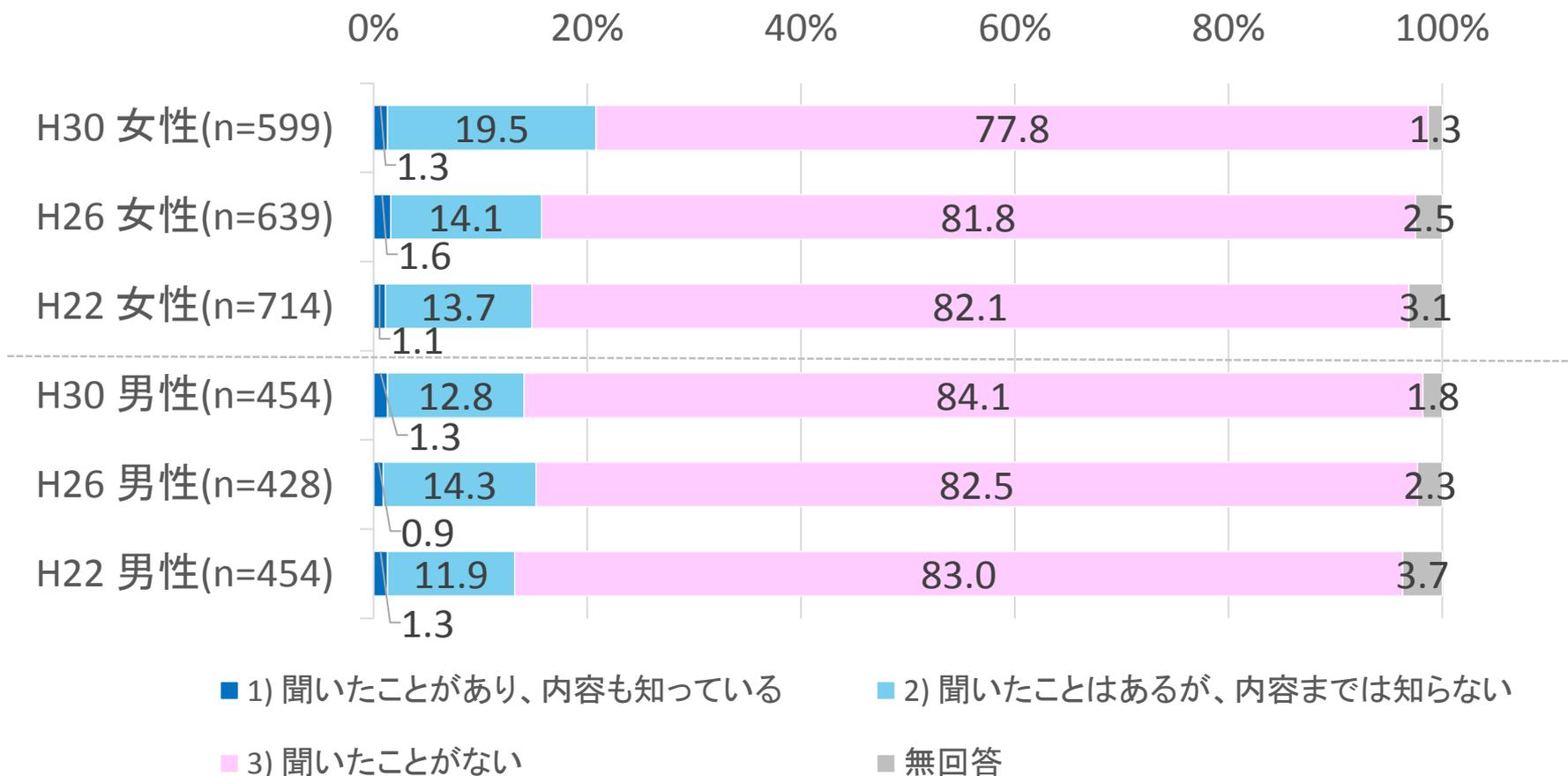
用語や制度の認知:「男女平等かわさき条例」

- 「男女平等かわさき条例」を知っている人は、女性回答者は若干増加し、3割強。男性回答者は横ばいで、約2割に留まっている。
- 「内容も知っている」人は男女とも2%台に留まっている。



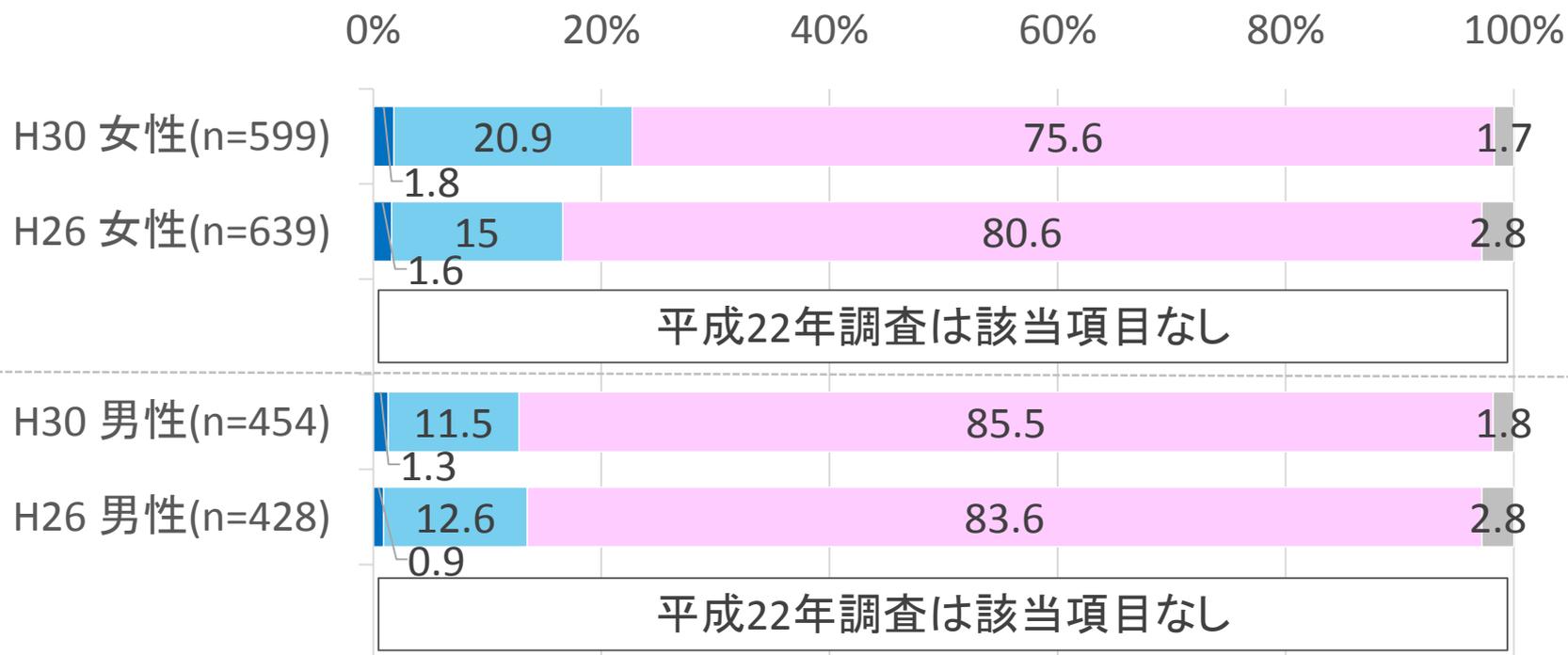
用語や制度の認知:「川崎市男女平等推進行動計画」

- 「川崎市男女平等推進行動計画」については、聞いたことがある人の割合が女性回答者で約2割、男性回答者では1割強であった。
- 内容まで知っている人は、男女とも1.3%と僅かであった。



用語や制度の認知:「川崎市DV防止・被害者支援基本計画」

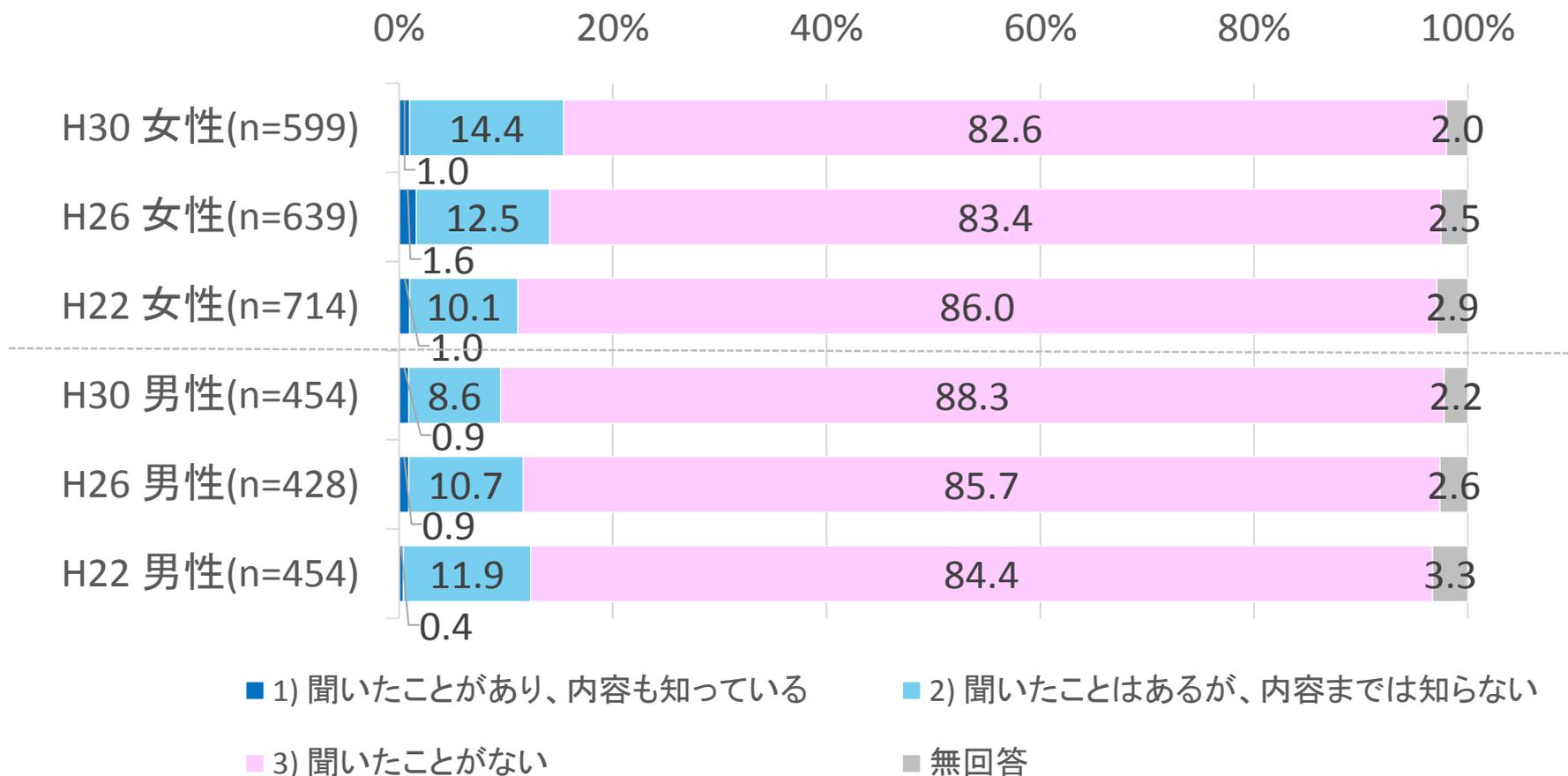
- 「川崎市DV防止・被害者支援基本計画」は、女性回答者は2割強、男性回答者は1割強が聞いたことがあると回答していた。
- 内容まで知っている人の割合は、男女ともに1%台であった。



- 1) 聞いたことがあり、内容も知っている
- 2) 聞いたことはあるが、内容までは知らない
- 3) 聞いたことがない
- 4) 無回答

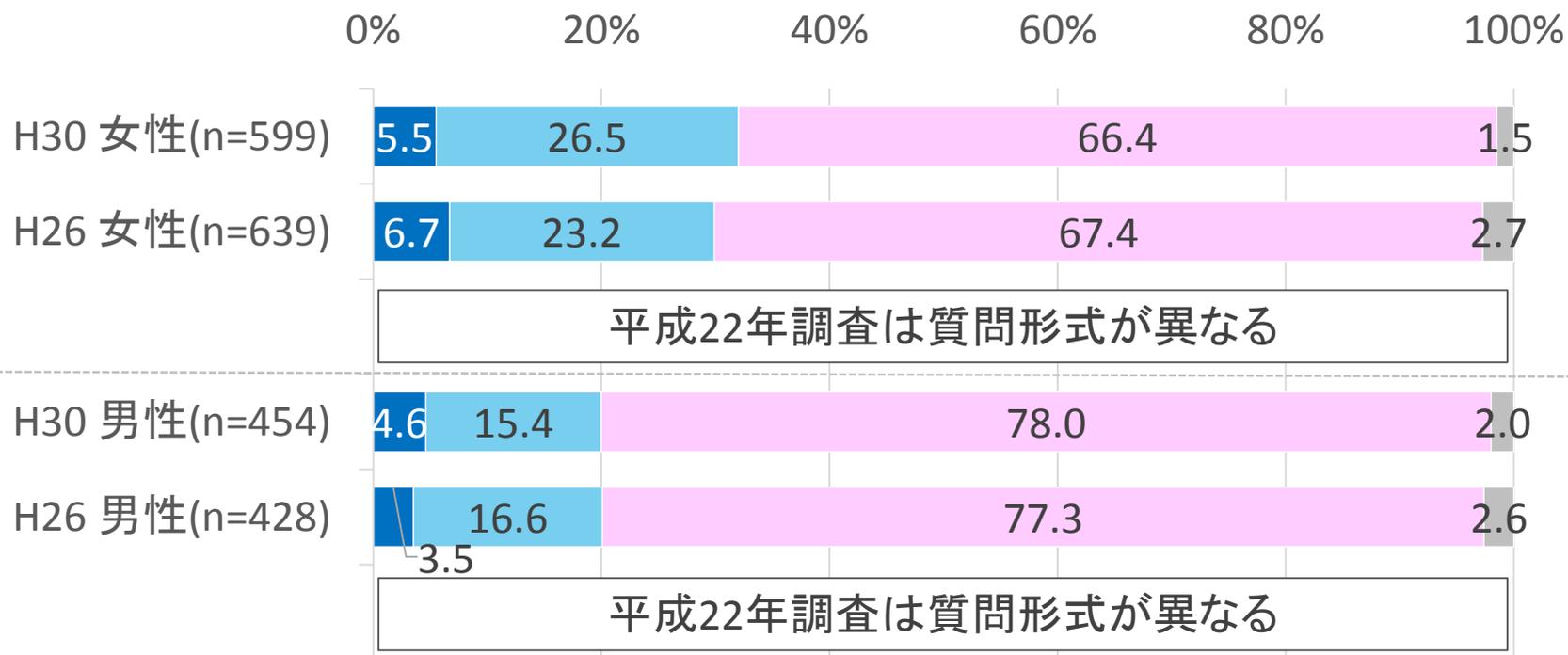
用語や制度の認知:「川崎市男女平等推進週間」

- 「川崎市男女平等推進週間」の認知は、女性回答者では若干ではあるが増加傾向にあり、1割台半ばであった。
- 男性回答者では、聞いたことがある人が1割未満に留まっている。



用語や制度の認知：「川崎市男女共同参画センター」

- 「川崎市男女共同参画センター」について、聞いたことがある人は女性回答者では3割超、男性回答者では2割となっている。

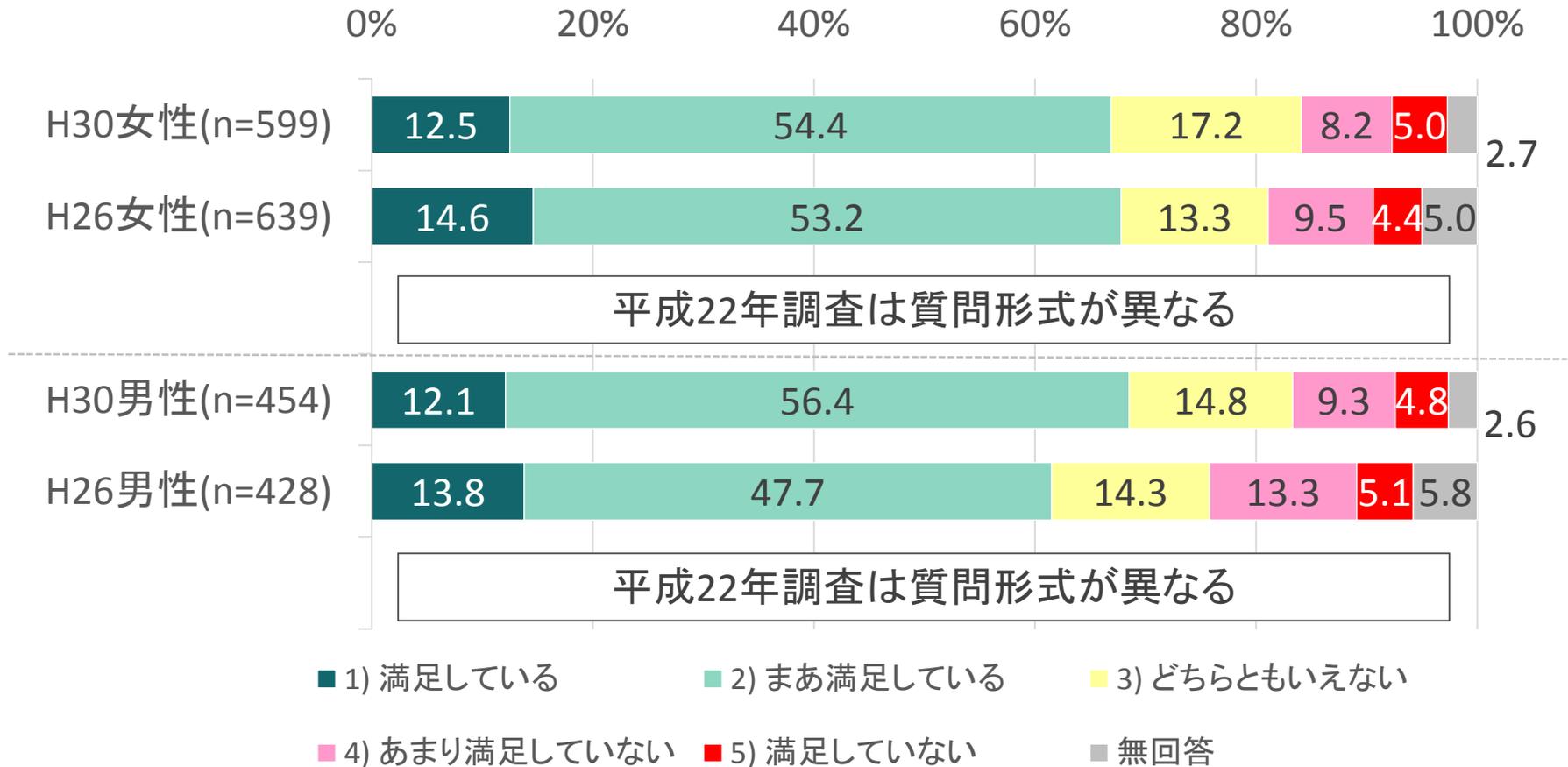


- 1) 聞いたことがあり、内容も知っている
- 2) 聞いたことはあるが、内容までは知らない
- 3) 聞いたことがない
- 無回答

4. 生活満足度

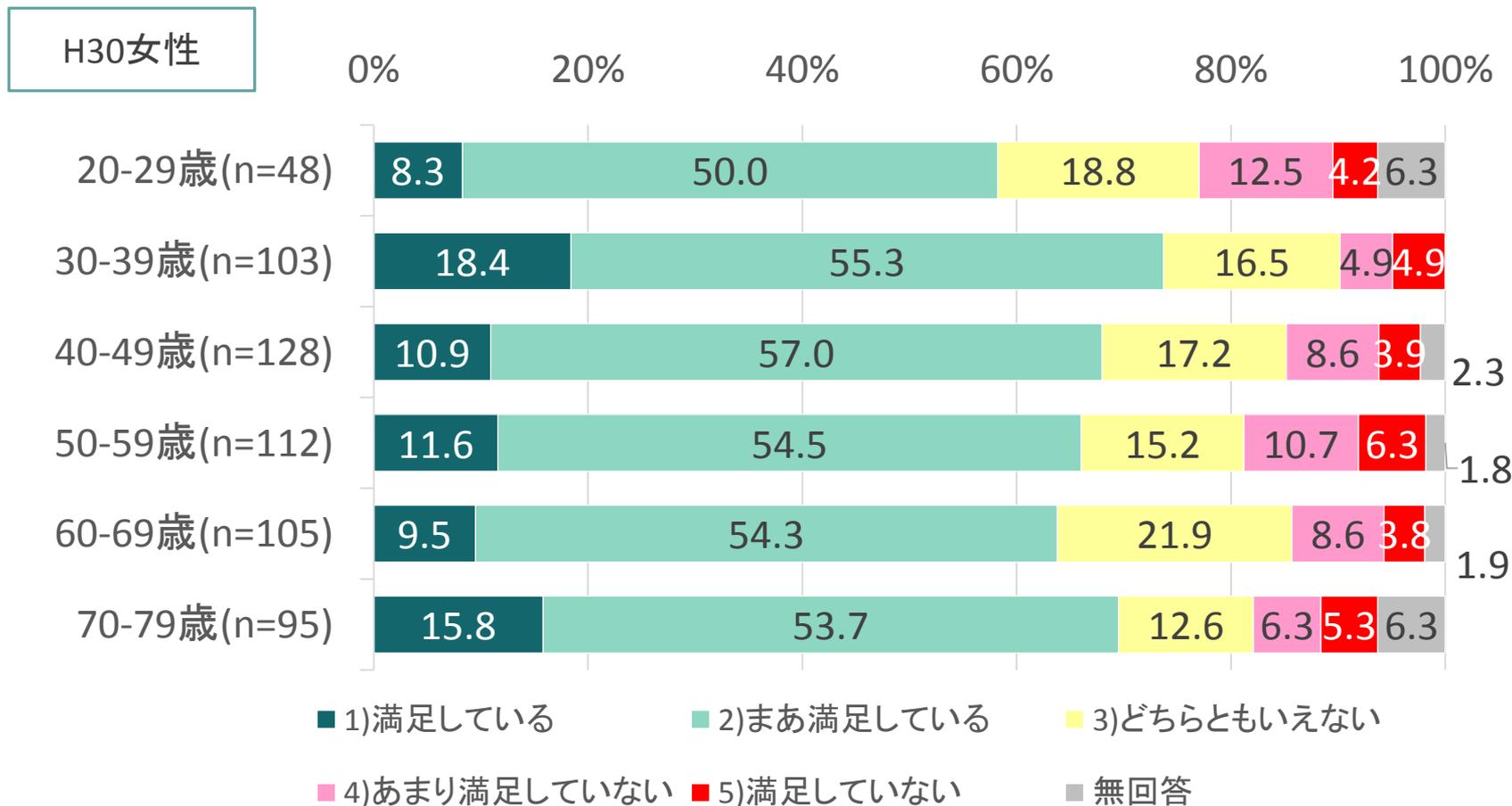
生活満足度

- 現在の生活状況について、男女ともに7割弱が「満足している」または「まあ満足している」と回答している。
- 「満足している」のみを見ると、男女とも12%台となっている。



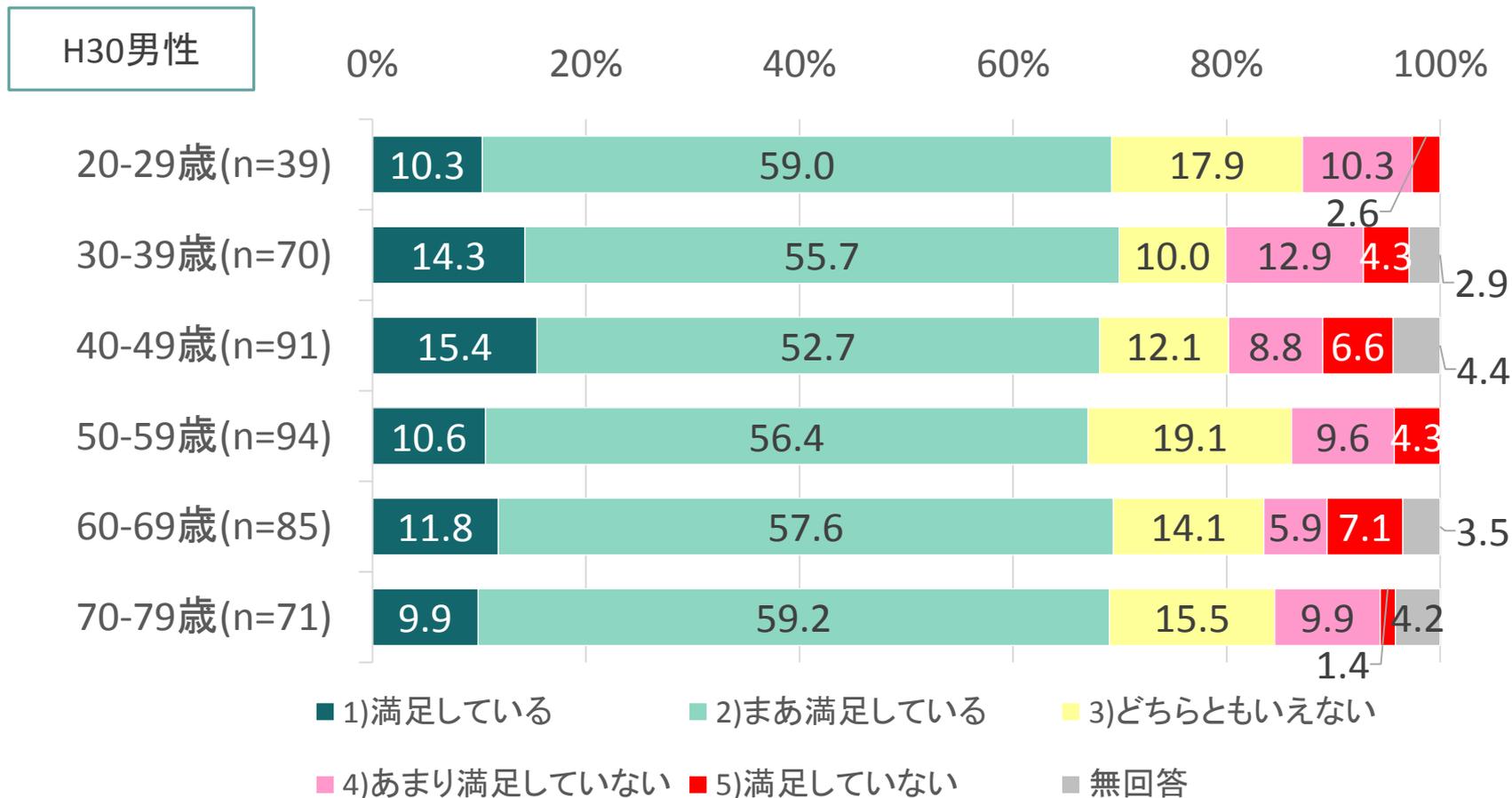
生活満足度(女性、年代別)

- 女性回答者においては、30代が最も満足派(「満足している」+「まあ満足している」)が多く、60代にかけて満足派がやや少なくなる傾向が見られる。
- 20代は、6割弱が満足派となっているが、各年代のなかでは相対的に少ない。



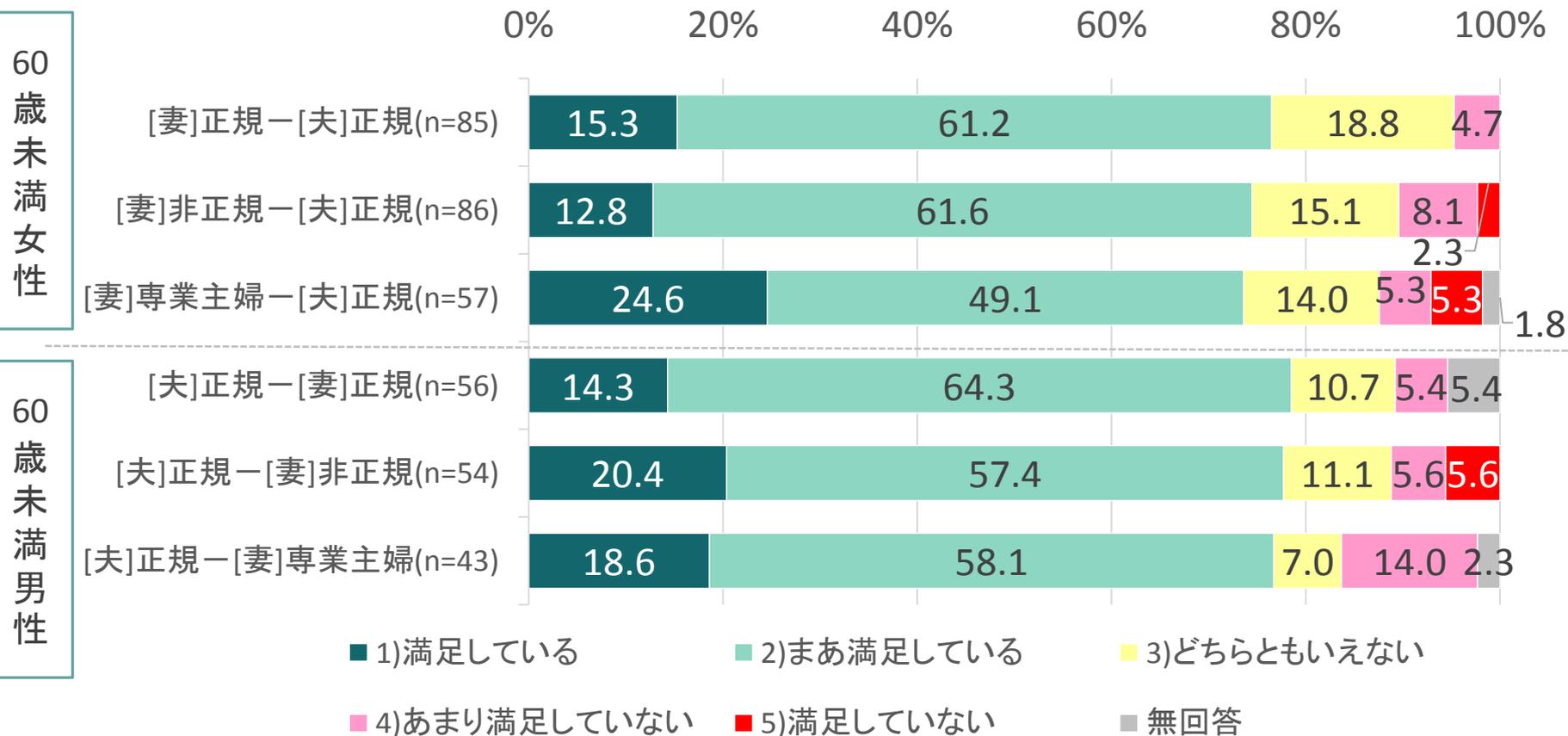
生活満足度(男性、年代別)

- 男性回答者では、生活満足度について年代による差はあまり見られない。



生活満足度(夫婦就業形態別)

- 夫婦の就業形態別では、満足派の割合にはあまり差はない。
- <妻専業-夫正規>の女性回答者の約4分の1が「満足している」と回答している一方で、「満足していない」も他の形態よりも相対的に高く5.3%いた。



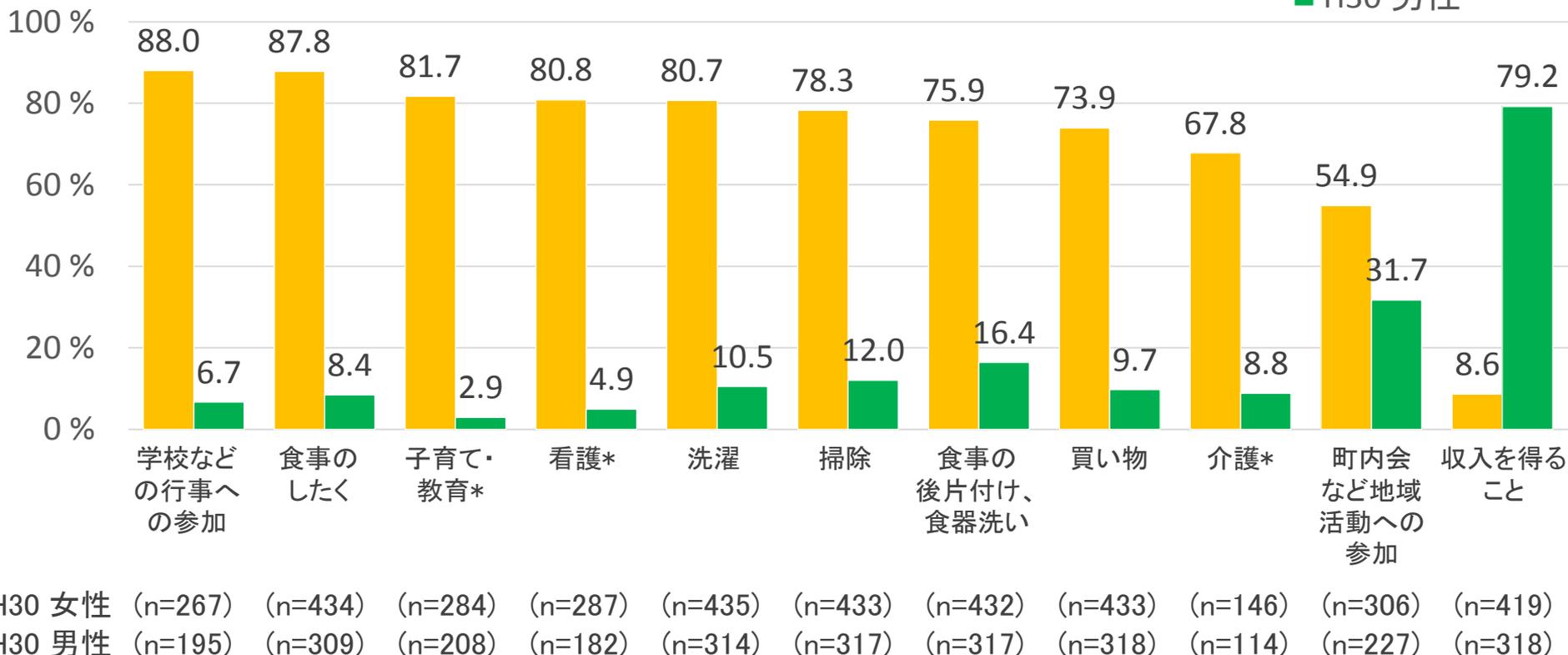
5. 家庭内での分担状況

家庭内での分担状況:「自分が中心」サマリー

- 家庭内での家事や子育て等の分担状況について、女性回答者は家事、子育て等の項目全てで「主に自分が中心」または「どちらかといえば自分が中心」と回答している人が過半数～9割近くを占めている。
- 男性回答者は「収入を得ること」のみ、「主に自分が中心」または「どちらかといえば自分が中心」が女性回答者を大きく上回っている。

「主に自分が中心」+「どちらかといえば自分が中心」

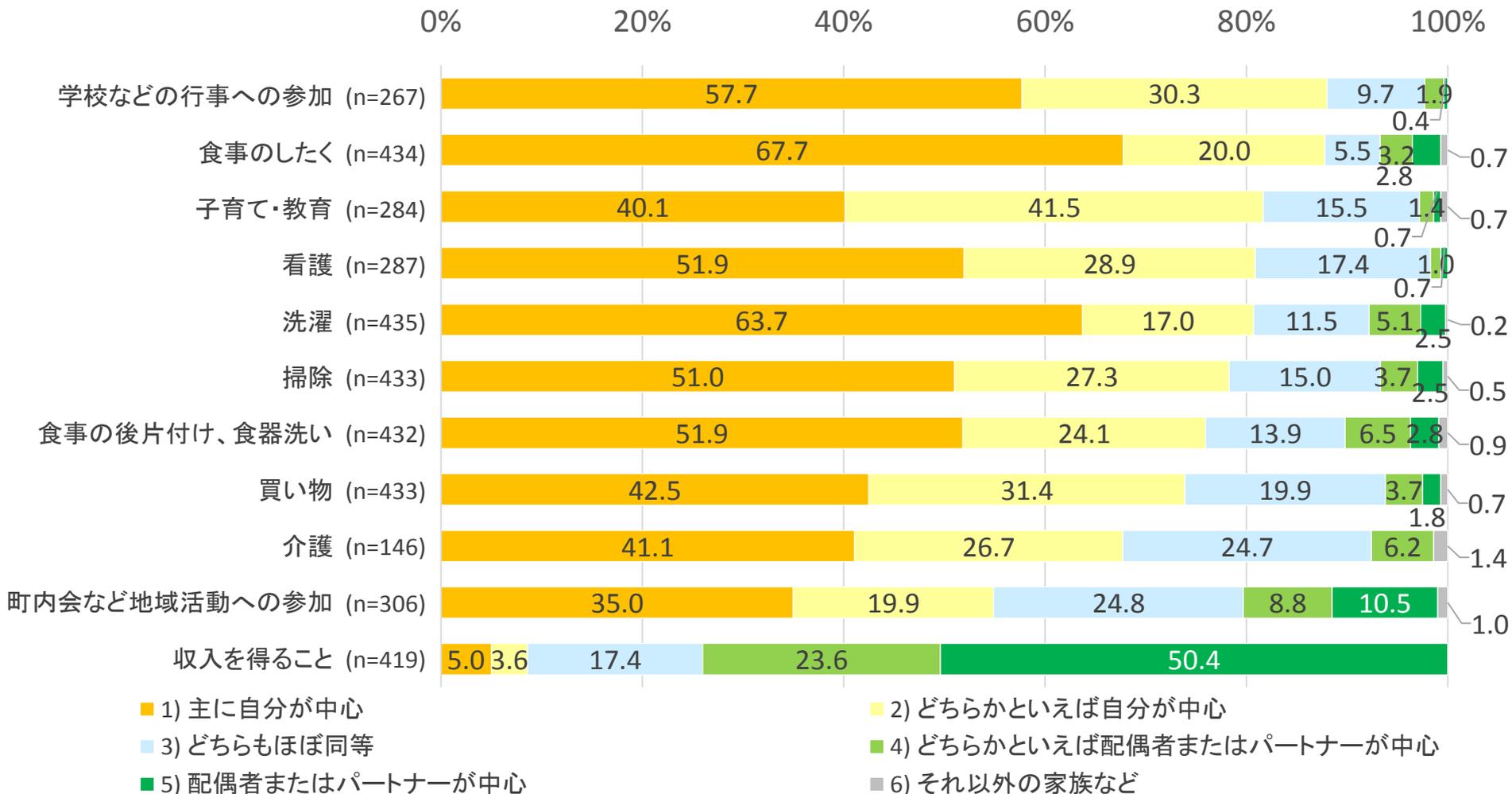
■ H30 女性
■ H30 男性



* 設問内での表記は、〈子育て・教育〉は「子育て・教育(入浴・おむつ交換・遊び相手・家庭学習の世話など)」、〈看護〉は「看護(家族の病気・怪我など)」、同じく〈介護〉は「介護(高齢の親等の長期にわたる介助)」。

家庭内での分担状況(女性)

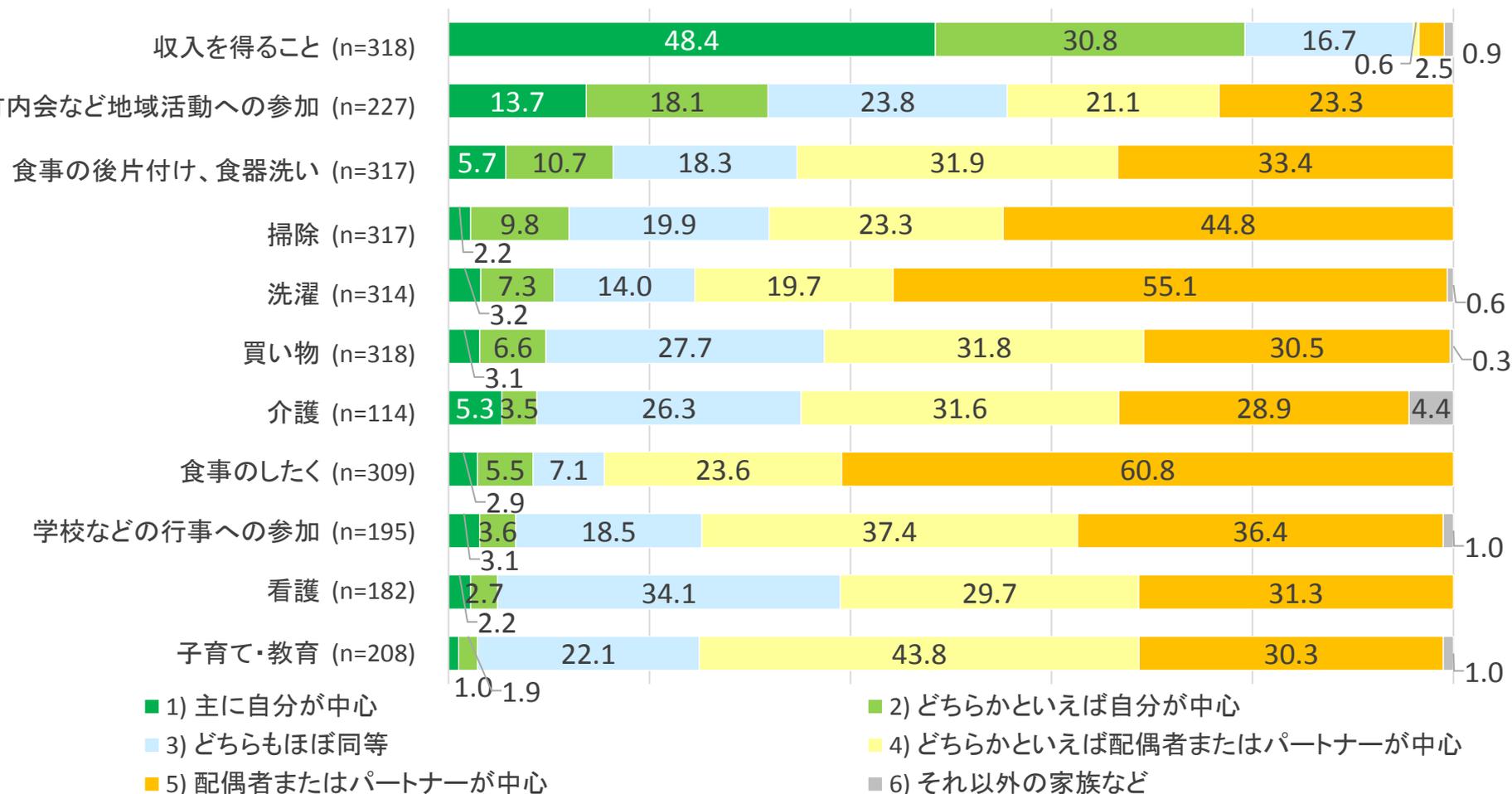
- 家庭内での分担状況詳細を見ると、〈食事のしたく〉と〈洗濯〉では「主に自分が中心」が女性回答者の6割以上を占めた。
- 〈介護〉と〈町内会など地域活動への参加〉では、「自分が中心」または「どちらかといえば自分が中心」が過半数を占めているものの、「どちらもほぼ同等」が約4分の1で、相対的に多めとなっている。



家庭内での分担状況（男性）

- 男性回答者では、配偶者・パートナーと「どちらもほぼ同等」と回答する割合が女性回答者よりもやや多い傾向にある。同回答が2割以上となっている項目は、女性回答者が2つであるのに対し、男性回答者では5つとなっている。

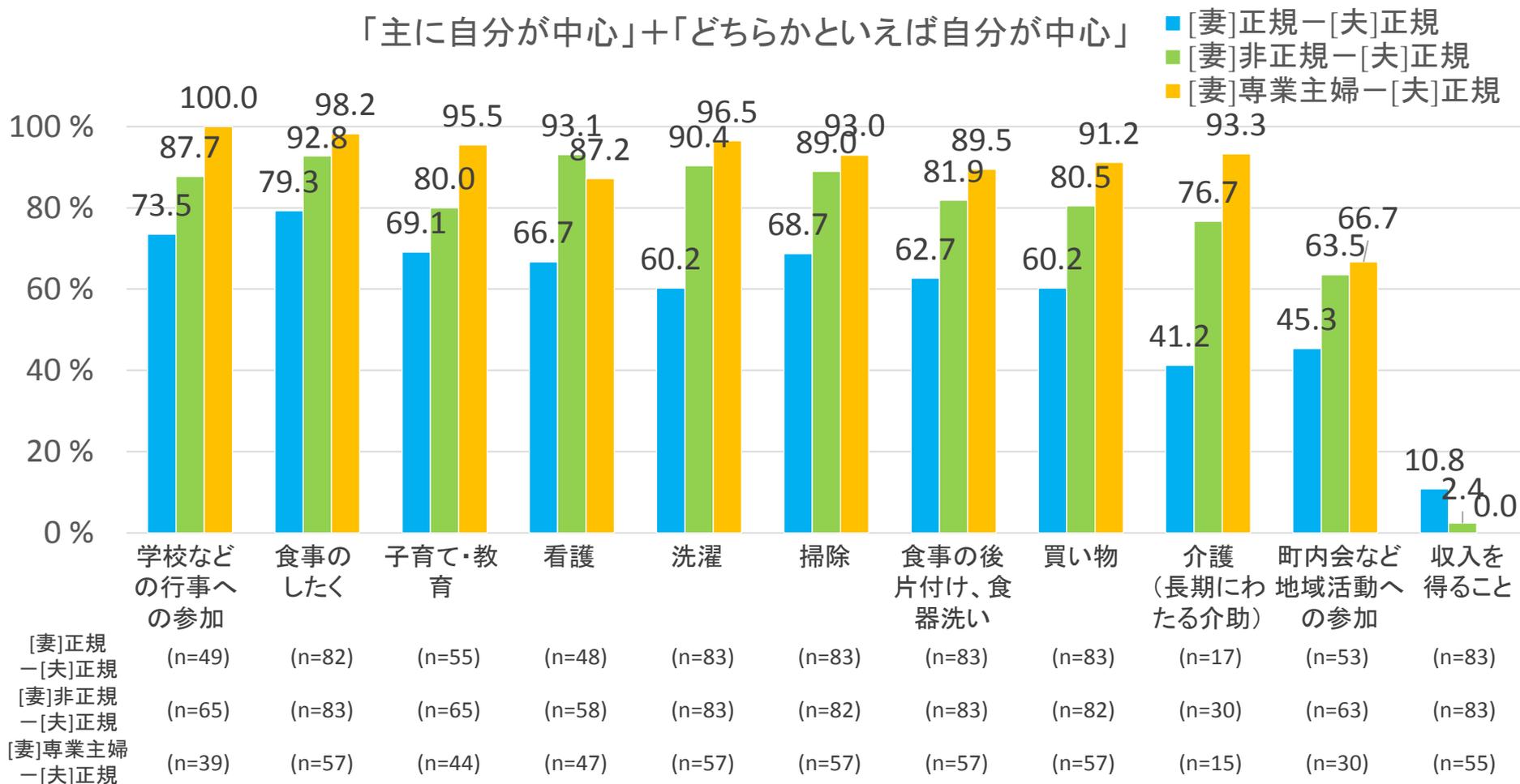
0% 20% 40% 60% 80% 100%



家庭内での分担状況(女性、夫婦就業形態別)

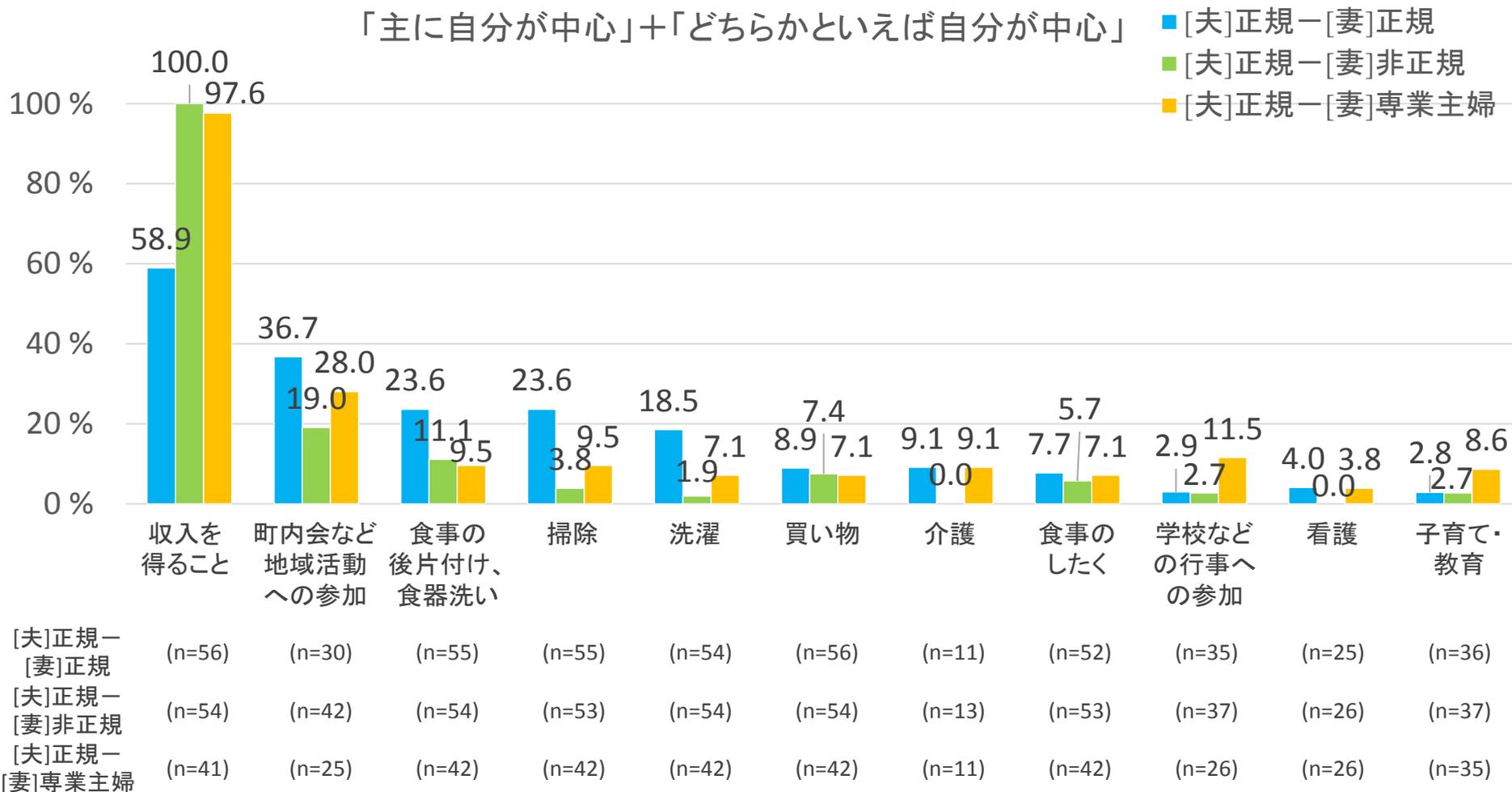
- 夫婦の就業形態別に見ると、正規職どうしの夫婦形態でも11項目中8項目で、女性回答者の6割以上が「主に自分が中心」または「どちらかといえば自分が中心」としていた。

「主に自分が中心」+「どちらかといえば自分が中心」



家庭内での分担状況(男性、夫婦就業形態別)

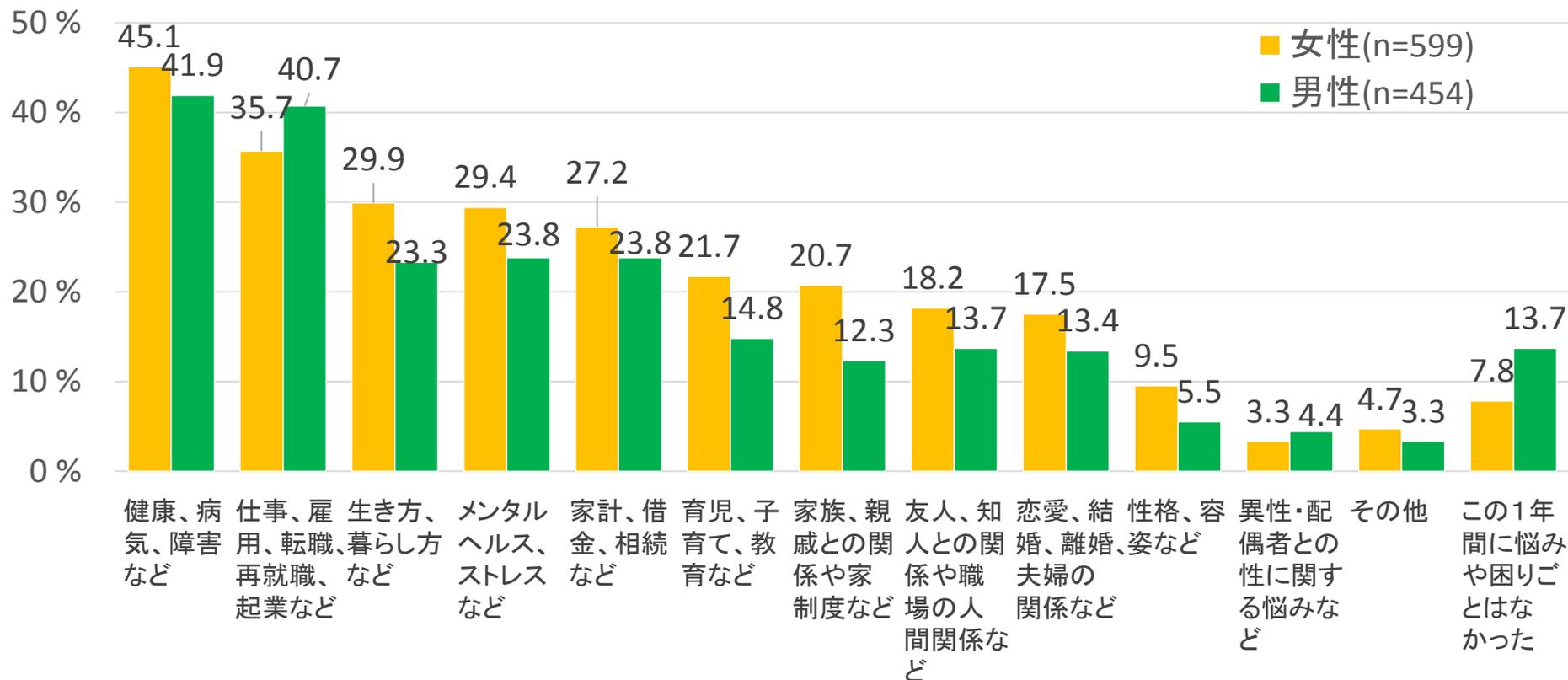
● 男性回答者では、〈収入を得ること〉を除き、夫婦の就業形態による差はそれほど大きくはない。



6. この1年間の 悩みごと、困りごと

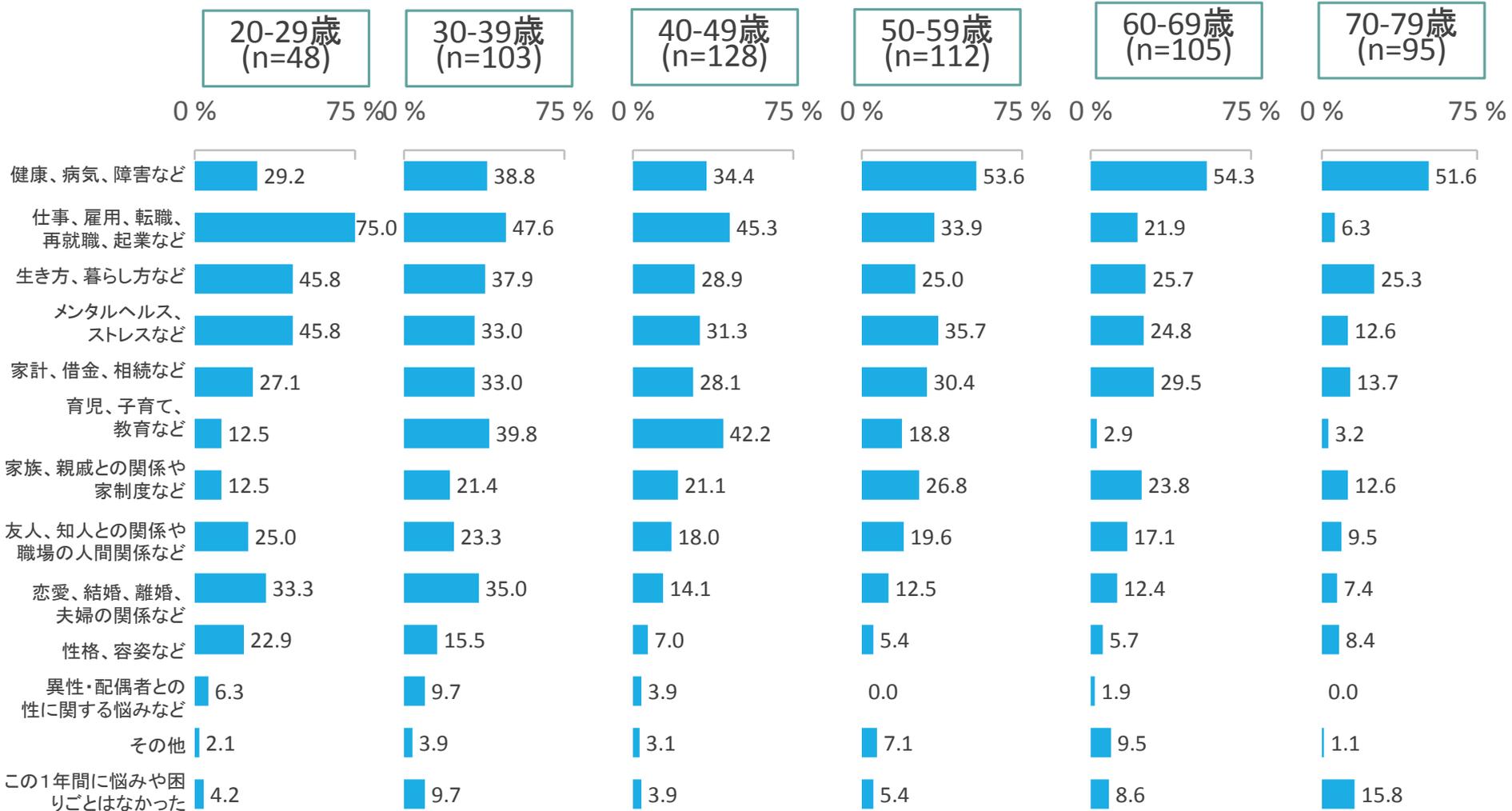
この1年間の悩みごと、困りごと

- この1年間の悩みごと、困りごととして、最も多く挙げられたのは男女とも「健康、病気、障害など」で4割超。次いで、「仕事、雇用、転職、再就職、起業など」で女性回答者の35.7%、男性回答者の40.7%であった。
- 「この1年間に悩みや困りごとはなかった」の割合は男性では1割を超えている。



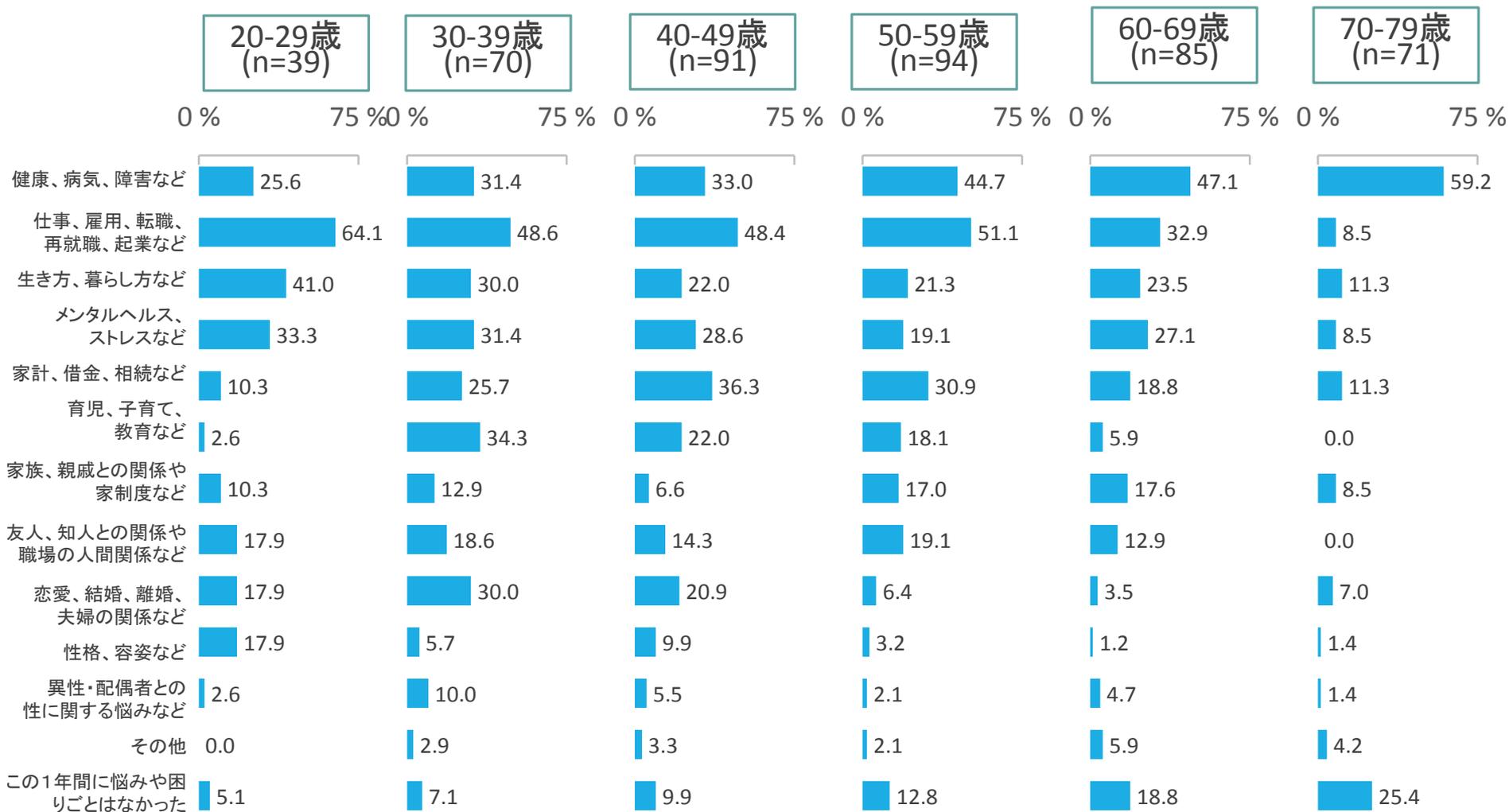
この1年間の悩みごと、困りごと(女性、年代別)

- 当然ながら、年代によって悩みごとや困りごとには違いがあり、20代では「仕事、雇用、転職、再就職、起業など」が7割以上を占め、30～40代では「育児、子育て、教育など」が4割前後を占める。50代以上では、「健康、病気、障害など」が過半数を占めるようになる。



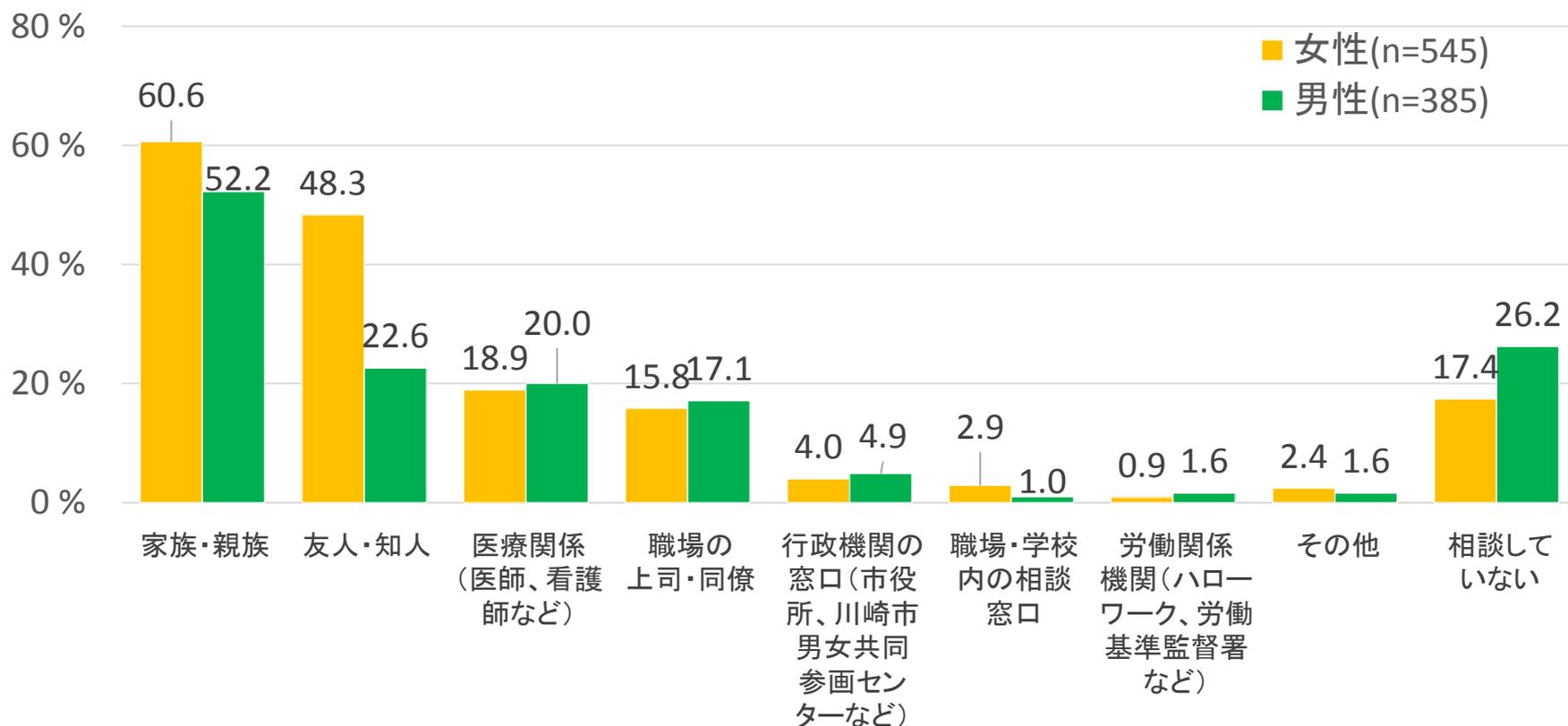
この1年間の悩みごと、困りごと(男性、年代別)

- 男性では、50代まで「仕事、雇用、転職、再就職、起業など」の悩みや困りごとが最も高くなっており、女性ほど年代による悩みや困りごとの移り変わりが大きくないようだ。



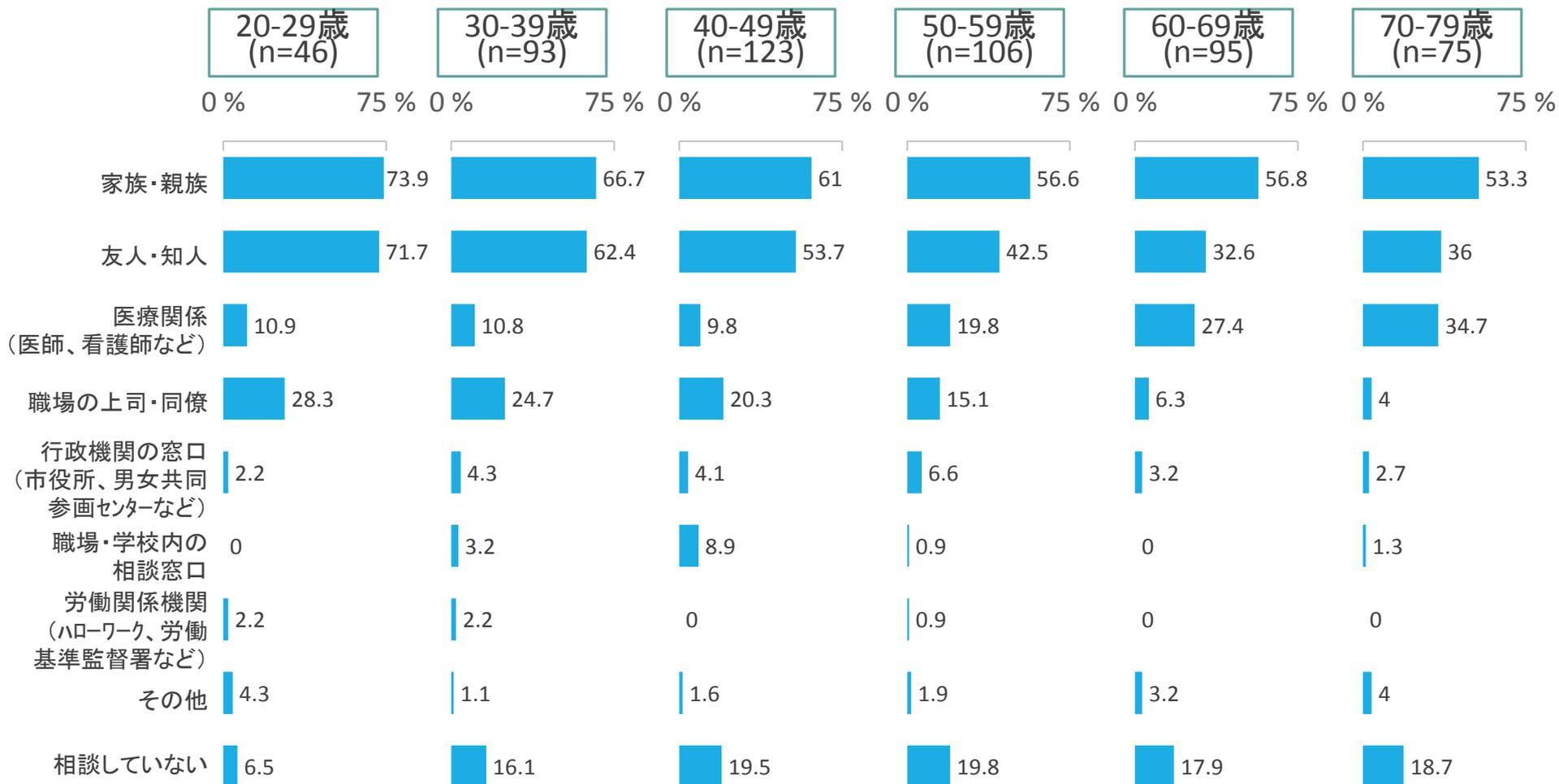
悩みや困りごとの相談先（複数回答）

- 悩みや困りごとの相談先として、「家族・親族」が男女とも過半数を占めて最も高くなっている。
- 「友人・知人」が、女性48.3%に対し、男性では22.6%に留まっている。他方で、「相談していない」は男性は女性よりも8.8ポイント高く、約4分の1となっている。



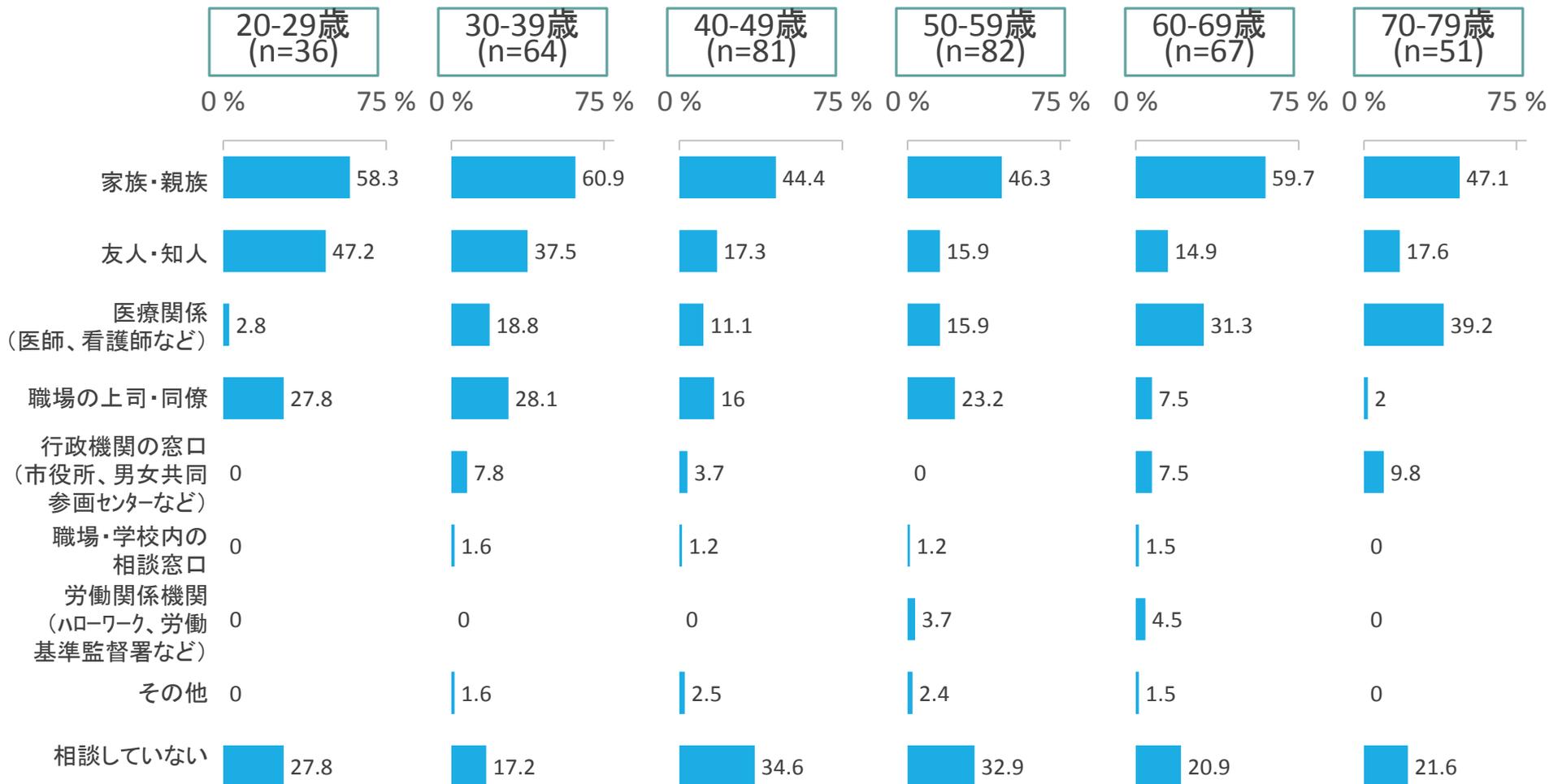
悩みや困りごとの相談先(女性、年代別)

- 相談先として、女性回答者では「家族・親族」が年代にかかわらず最も高い。
- 「友人・知人」は年代が上がるにつれて減少傾向にある。また、30代以上で「相談していない」が10%台後半となっている。



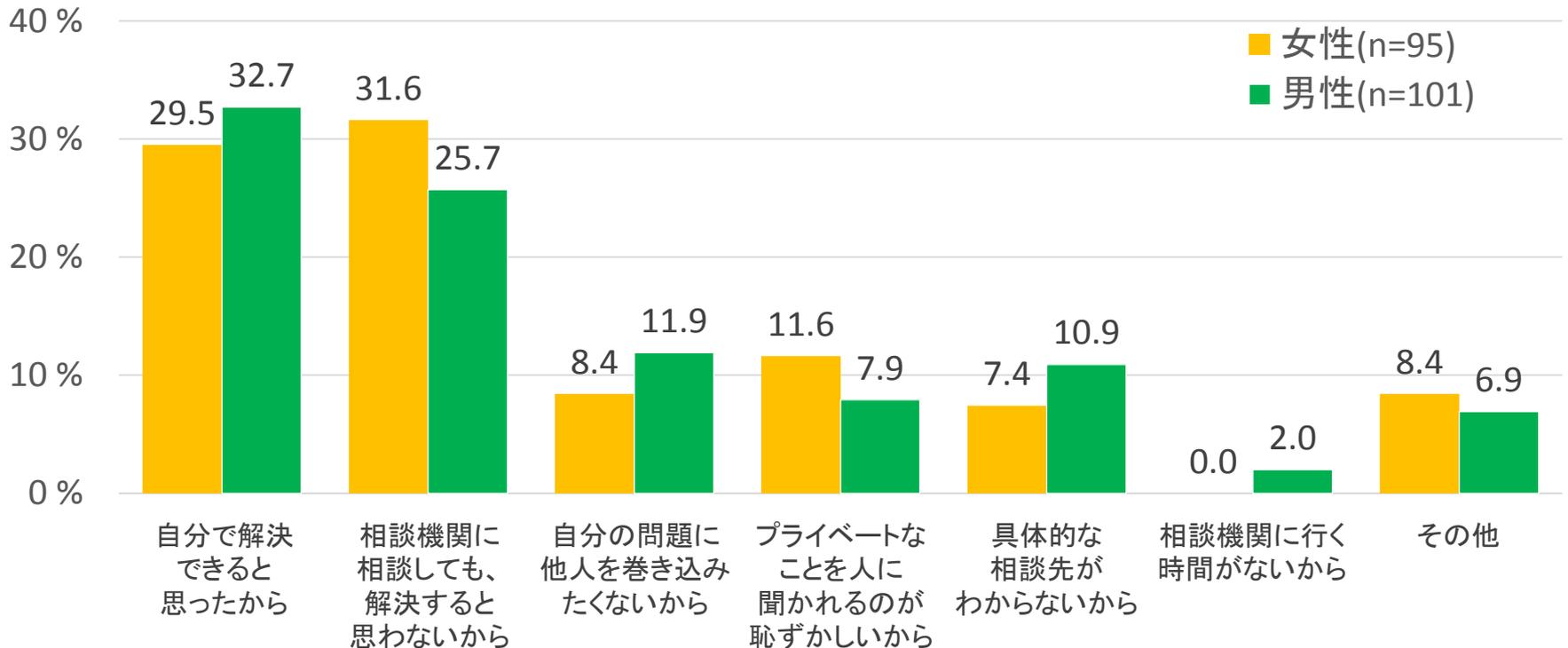
悩みや困りごとの相談先(男性、年代別)

- 男性回答者でも、相談先として「家族・親族」が最も高い。
- 「友人・知人」は40代以降では2割未満に留まる。「相談していない」は、40～50代で3割以上となっている。



相談しなかった理由

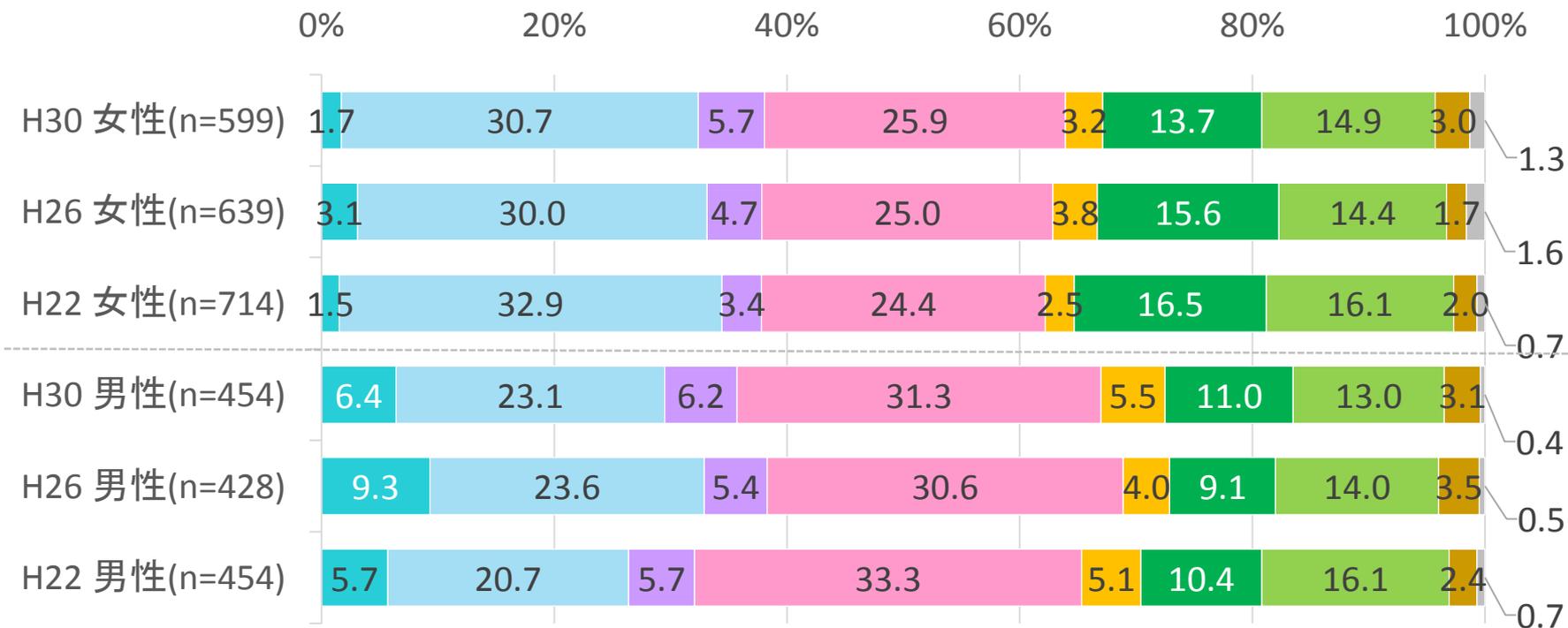
- 相談しなかった理由は、「自分で解決できると思ったから」が3割前後、「相談機関に相談しても解決すると思わないから」が女性回答者では3割超、男性回答者では2割台であった。



7. 生活優先度の 〈希望〉と〈現実〉

生活優先度の〈希望〉

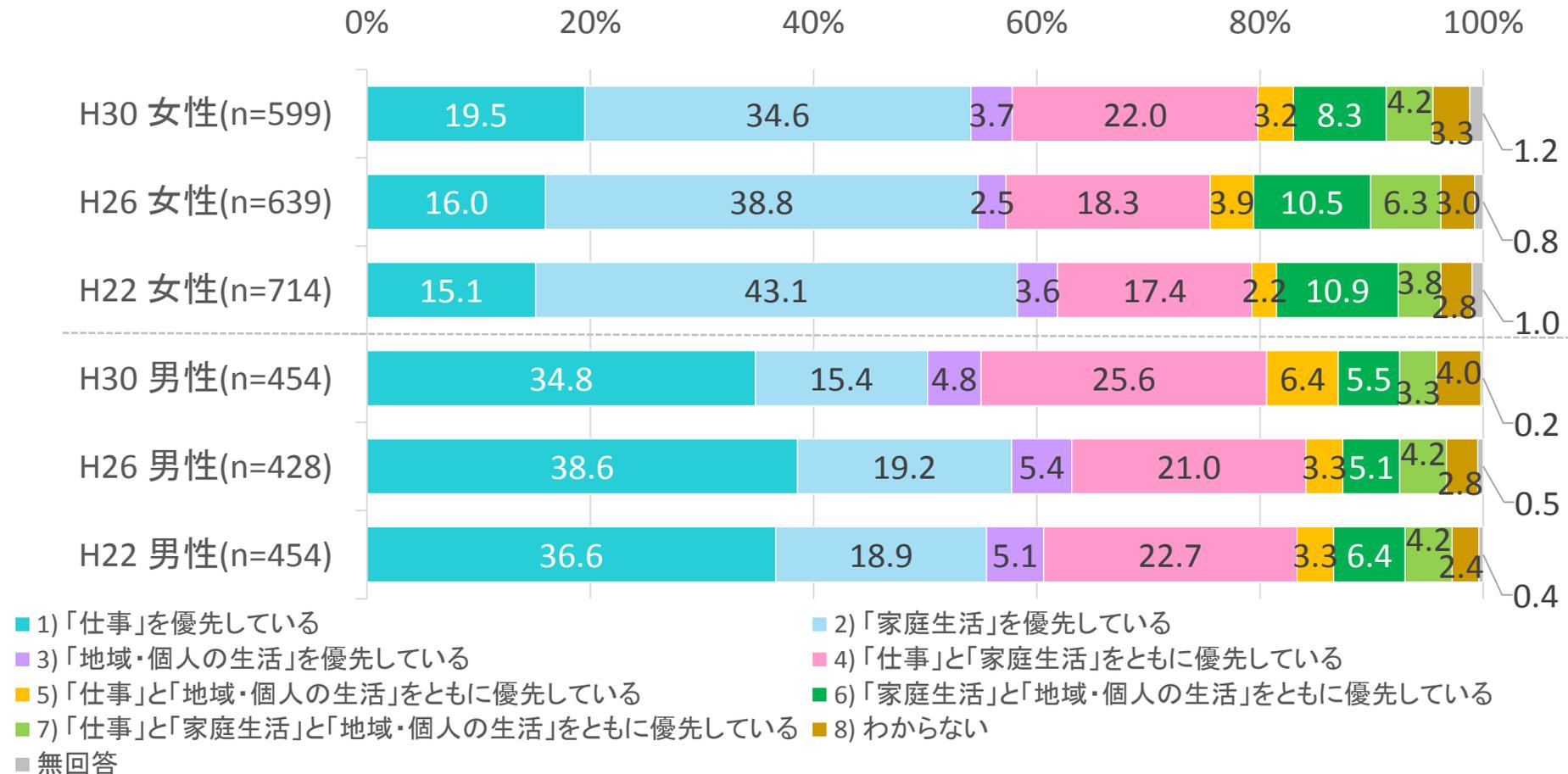
- 生活優先度の〈希望〉としては、女性回答者では「家庭生活」が約3割と最も多く、「仕事と家庭生活」が25.9%で続いた。男性回答者では「仕事と家庭生活」が3割超で最も多くなっており、次いで「家庭生活」の23.1%となっている。
- H22調査、H26調査から大きな変化はみられなかった。



- 1)「仕事」を優先したい
- 2)「家庭生活」を優先したい
- 3)「地域・個人の生活」を優先したい
- 4)「仕事」と「家庭生活」をともに優先したい
- 5)「仕事」と「地域・個人の生活」をともに優先したい
- 6)「家庭生活」と「地域・個人の生活」をともに優先したい
- 7)「仕事」と「家庭生活」と「地域・個人の生活」をともに優先したい
- 8)わからない
- 無回答

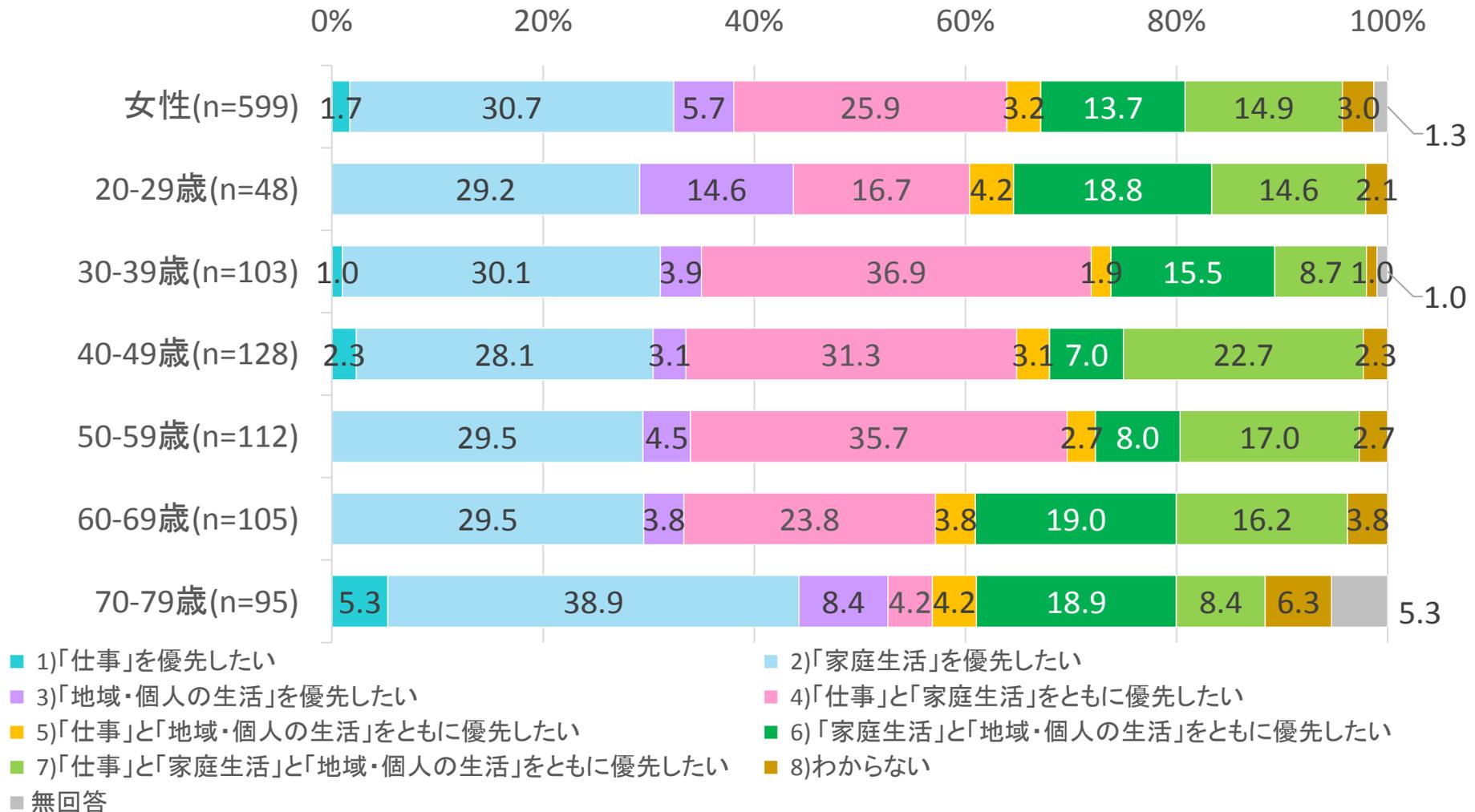
生活優先度の〈現実〉

- 生活優先度の〈現実〉としては、女性回答者は「家庭生活」が〈希望〉より約4ポイント高く、さらに「仕事」も2割近くを占めている。「仕事」、「仕事と家庭生活」は、H22調査から4ポイント以上増加した。
- 男性回答者は「仕事」優先が34.8%を占め、最も多い。他方で、「家庭生活」は8ポイント近く、「仕事と家庭生活」も6ポイント近く、〈希望〉を下回っている。



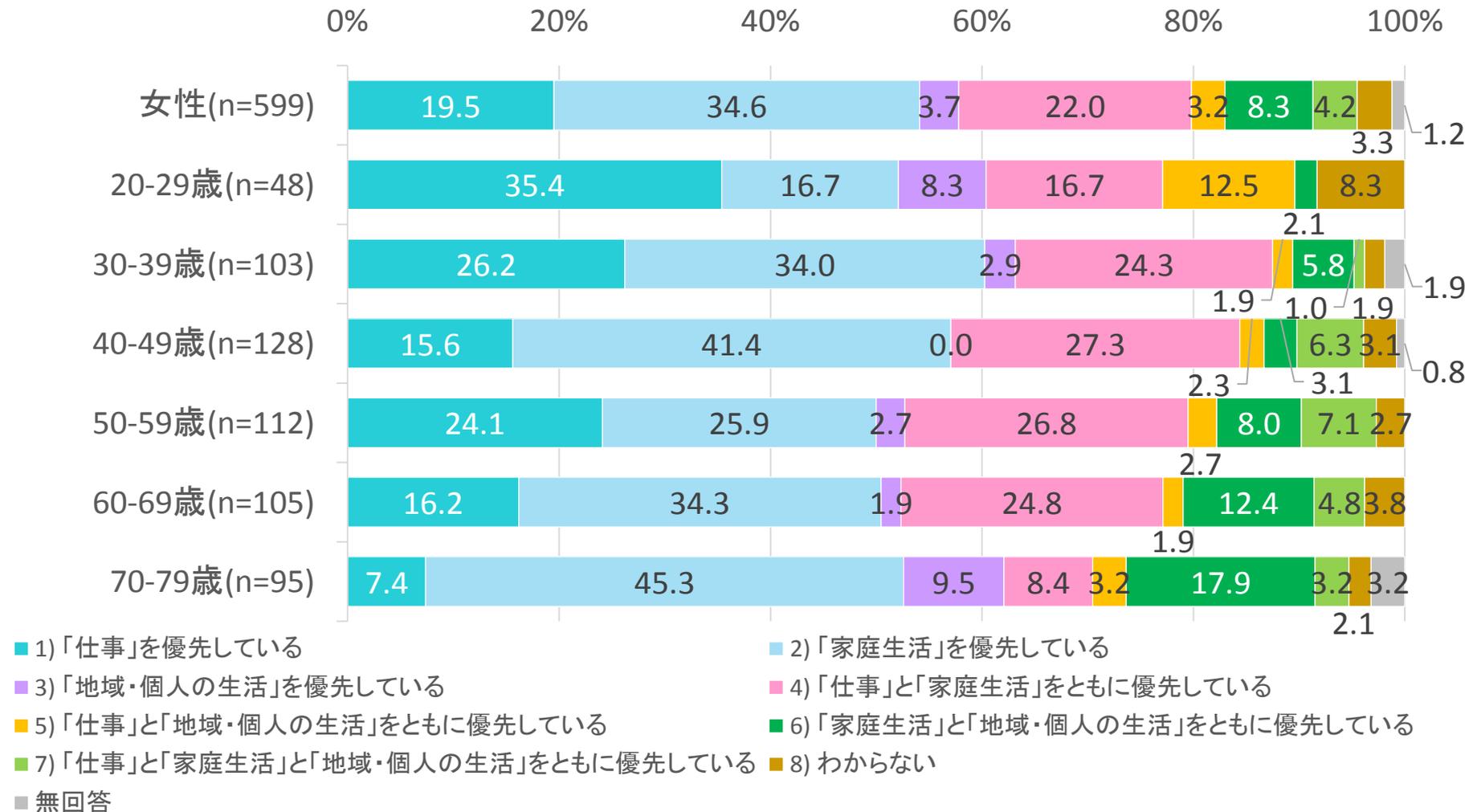
生活優先度の〈希望〉(女性、年代別)

- 女性の年代別に生活優先度の〈希望〉をみると、30～50代で「仕事と家庭生活」が3割を超えた。
- 40代では「仕事と家庭と地域・個人の生活」も2割以上となった。



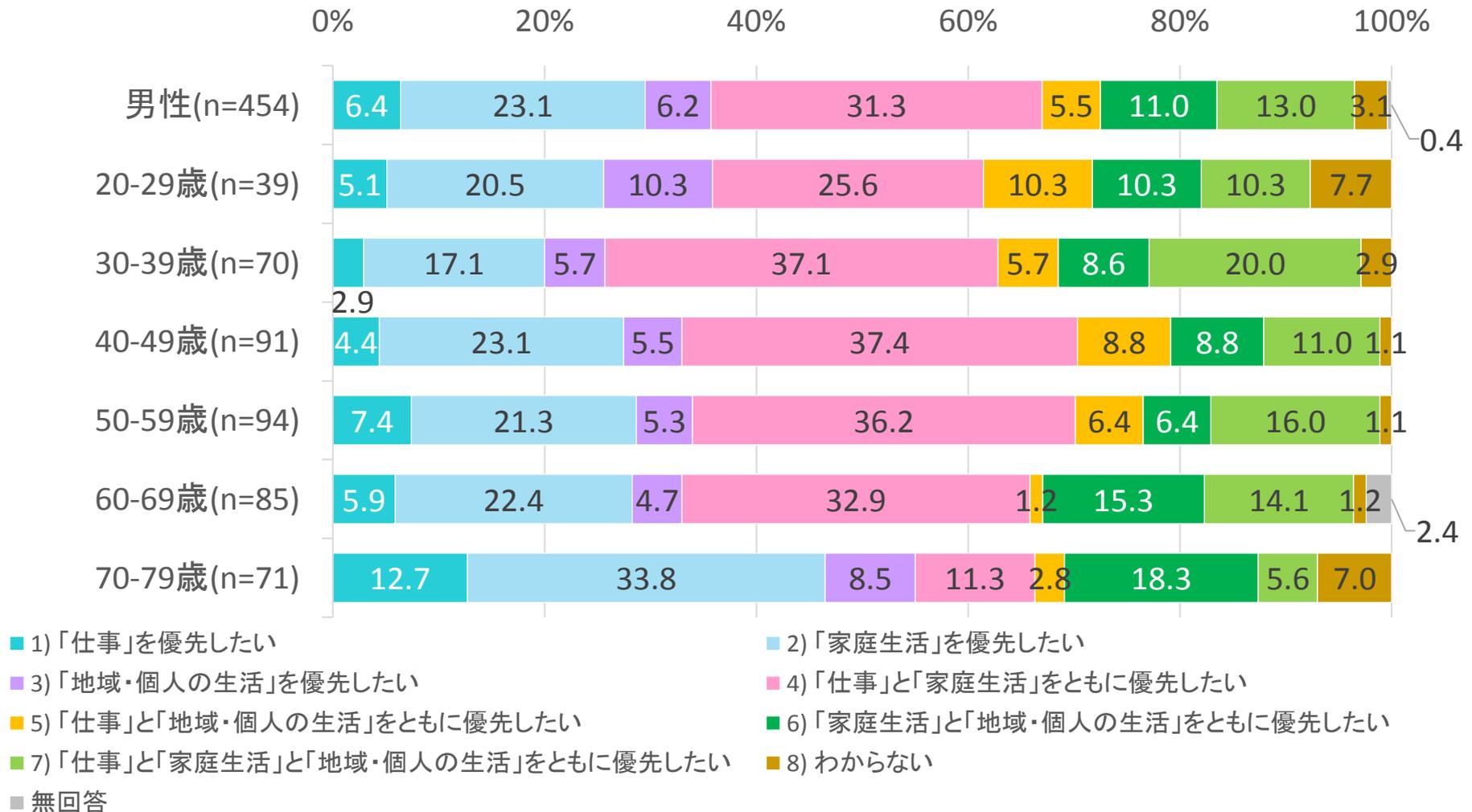
生活優先度の〈現実〉(女性、年代別)

- 同じく女性の年代別で〈現実〉を見ると、30代以降では「家庭生活」優先、または「仕事と家庭生活」をともに優先が、過半数を占めている。



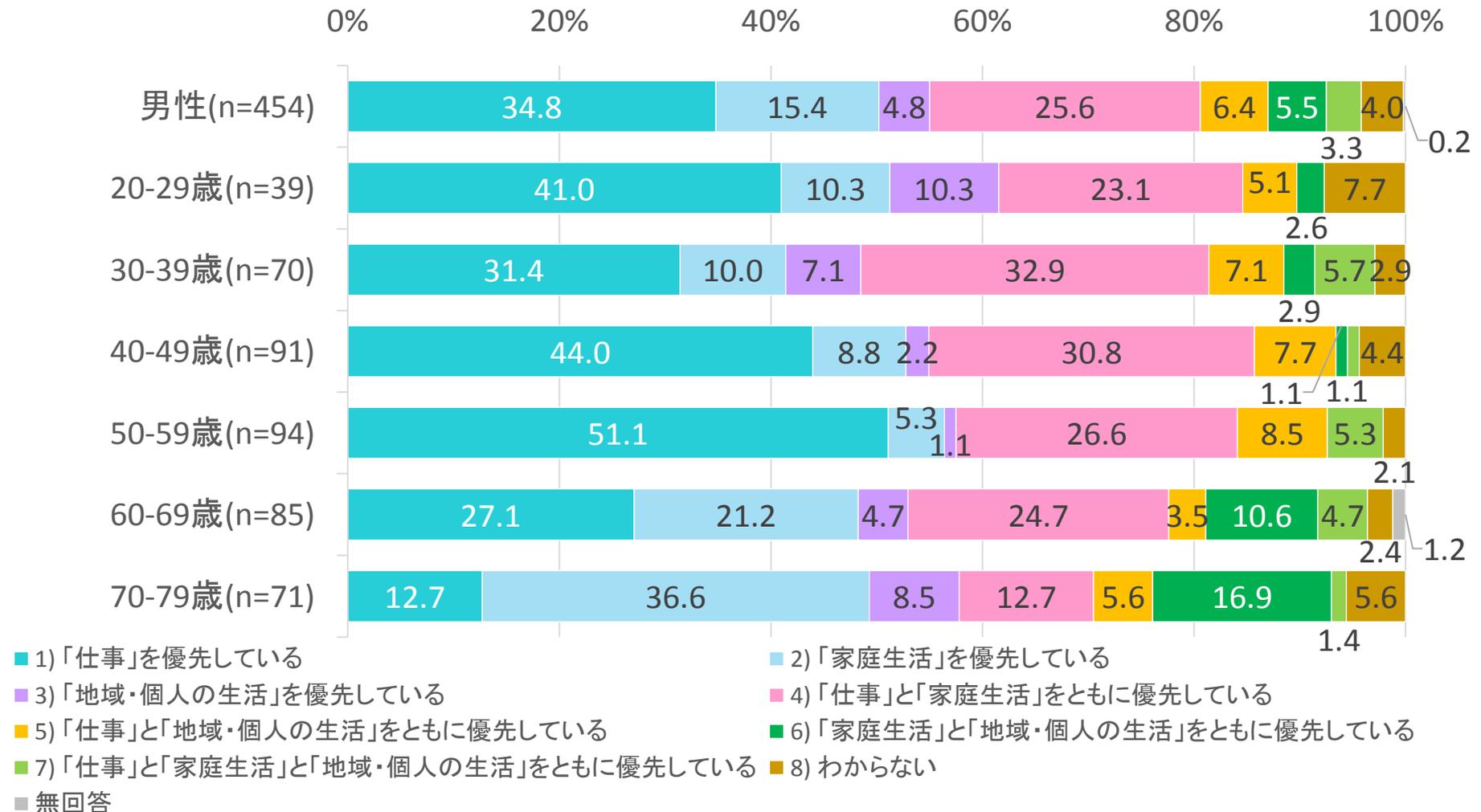
生活優先度の〈希望〉(男性、年代別)

- 男性回答者を年代別に見ると、〈希望〉については女性年代別の分布と同様に、30代以上で「仕事と家庭生活」優先が3割以上を占めた。男性でも、70代では「家庭生活」優先希望が3割を超えている。



生活優先度の〈現実〉(男性、年代別)

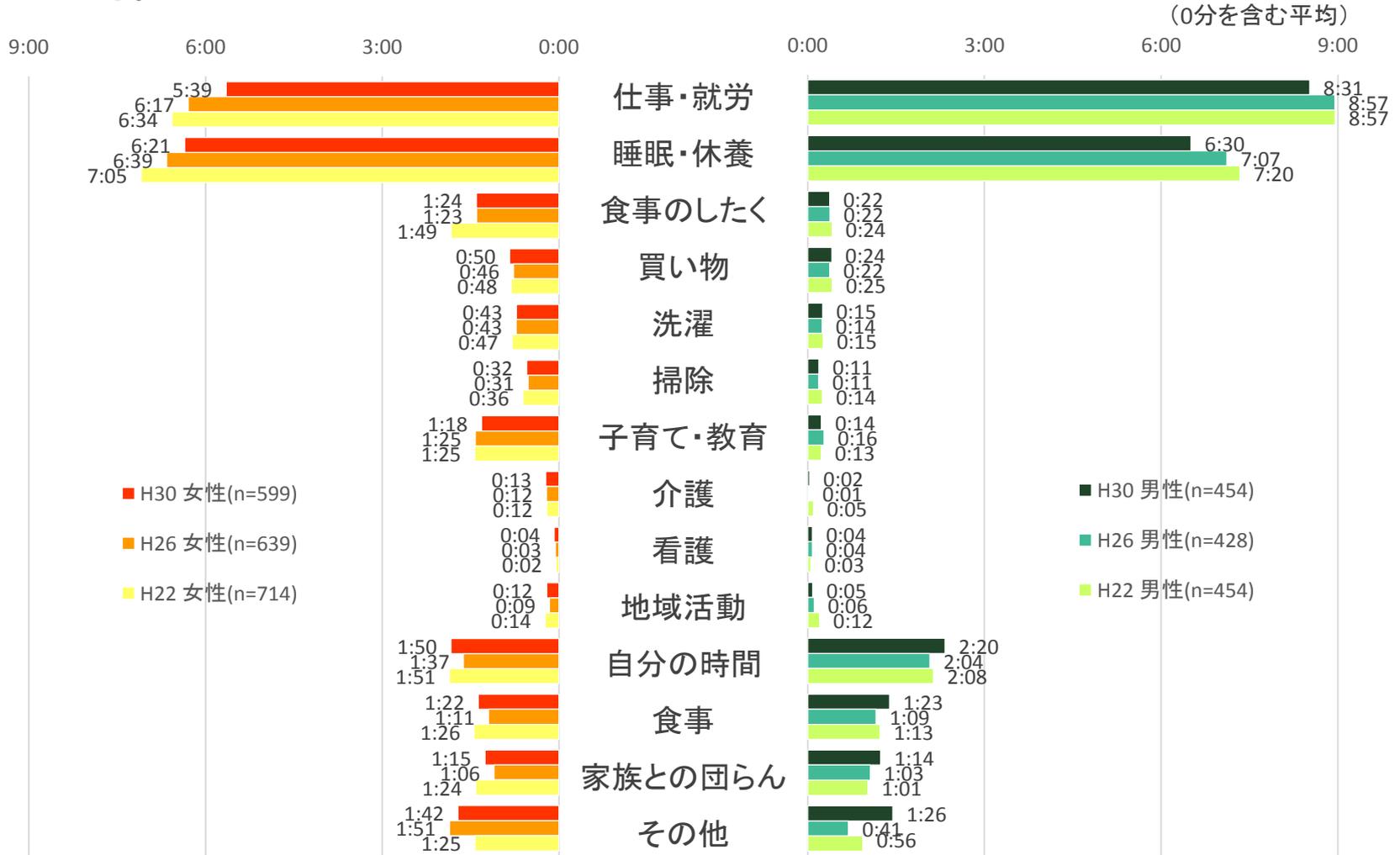
- 男性回答者の〈現実〉としては、20代、40代、50代で「仕事」優先が約4～5割を占めた。30代では、「仕事と家庭」優先が3割を超えているが、「仕事」優先も同程度いた。



8. 生活時間

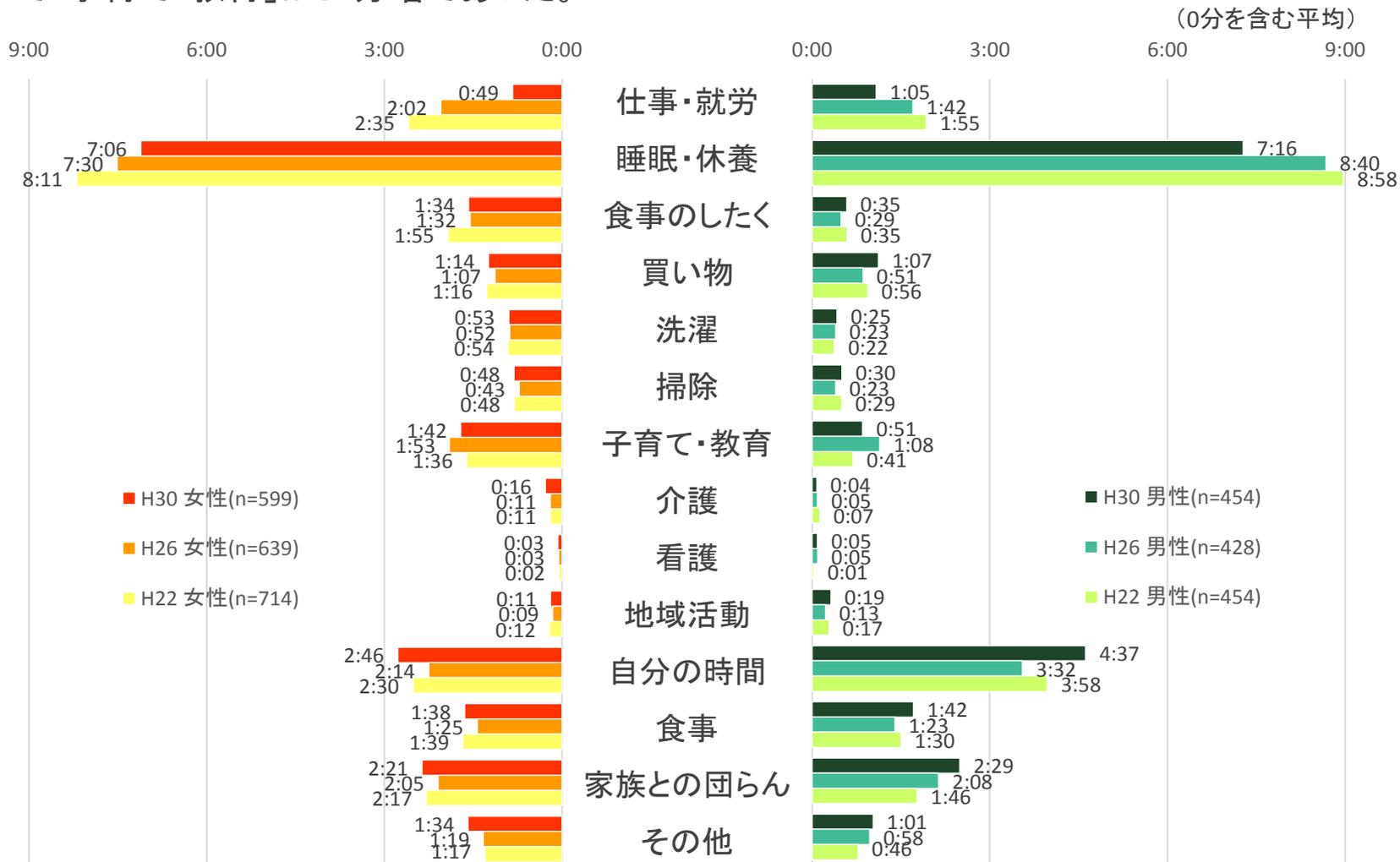
生活時間(平日)

- 平日の生活時間を見ると、男女ともH26調査時点よりも「仕事・就労」が約30～40分減少しているが、男女で3時間弱の差がある点は同様である。
- 家事・子育て関連項目にH26調査からの大きな変化はなく、「自分の時間」「食事」「家族との団らん」は若干増加している。



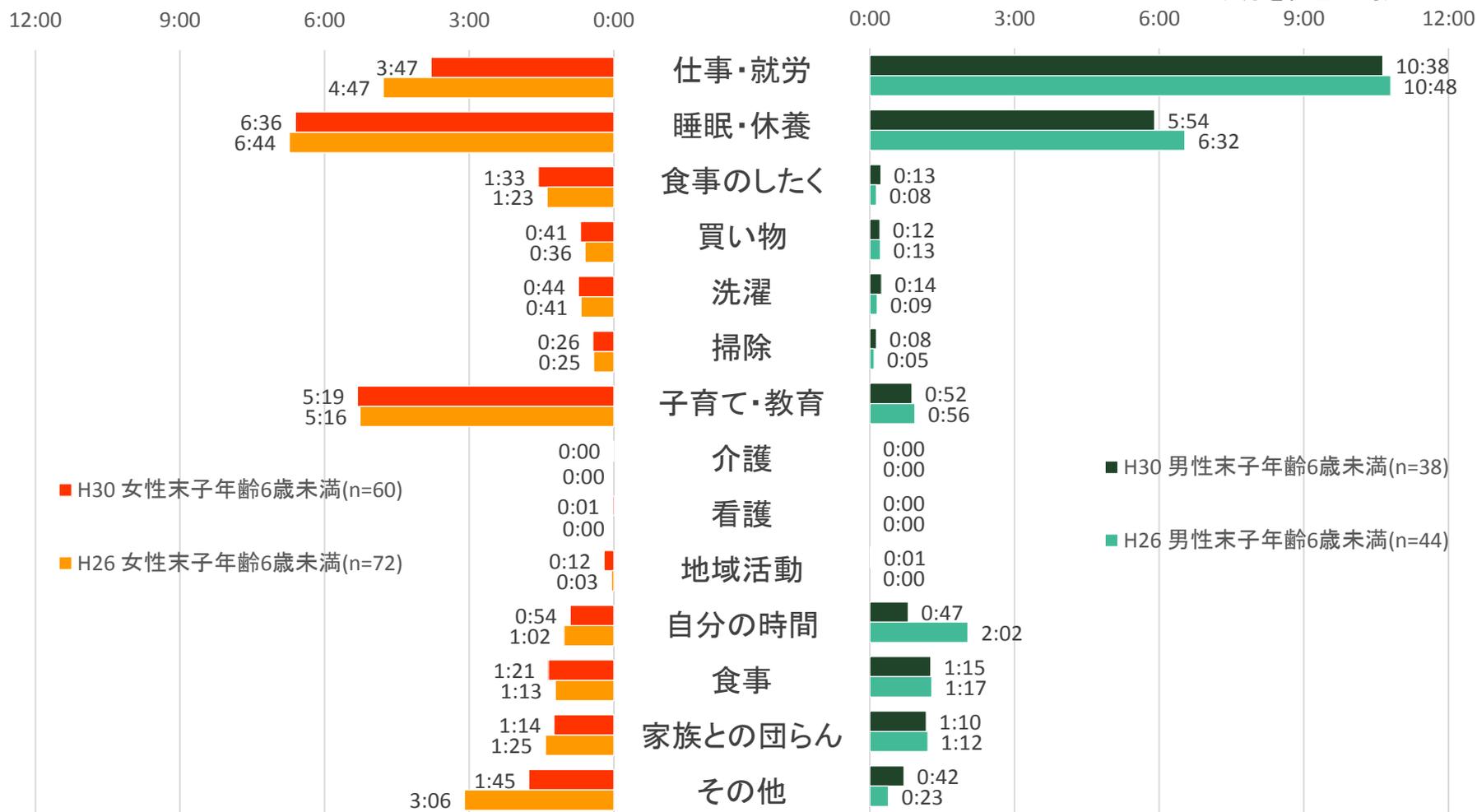
生活時間(休日)

- 休日の「仕事・就労」時間は平日より大幅に減少している。
- 「睡眠・休養」を除き、男性回答者で平日より最も増加しているのは「自分の時間」の2時間17分増、次いで「子育て・教育」が37分増であった。



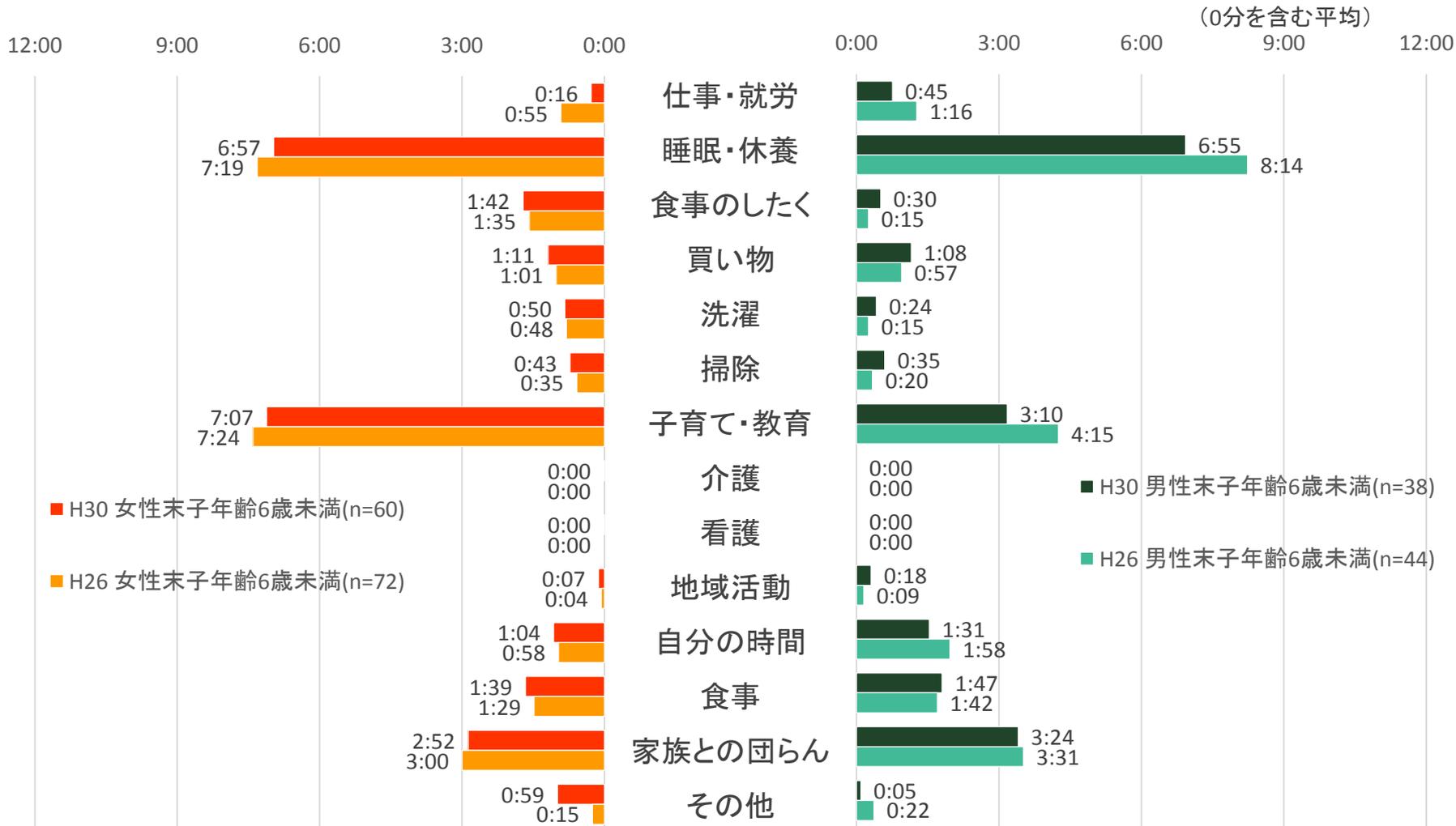
生活時間(平日 末子6歳未満)

- 末子が6歳未満の回答者のみでは男女差がより大きく、女性回答者は「仕事・就労」が4時間弱に大幅に減少し、「子育て・教育」が5時間以上を占めている。男性回答者では「仕事・就労」時間が平均で10時間を超えており、家事関連は10分前後、「子育て・教育」は1時間弱に留まっている。
- (0分を含む平均)



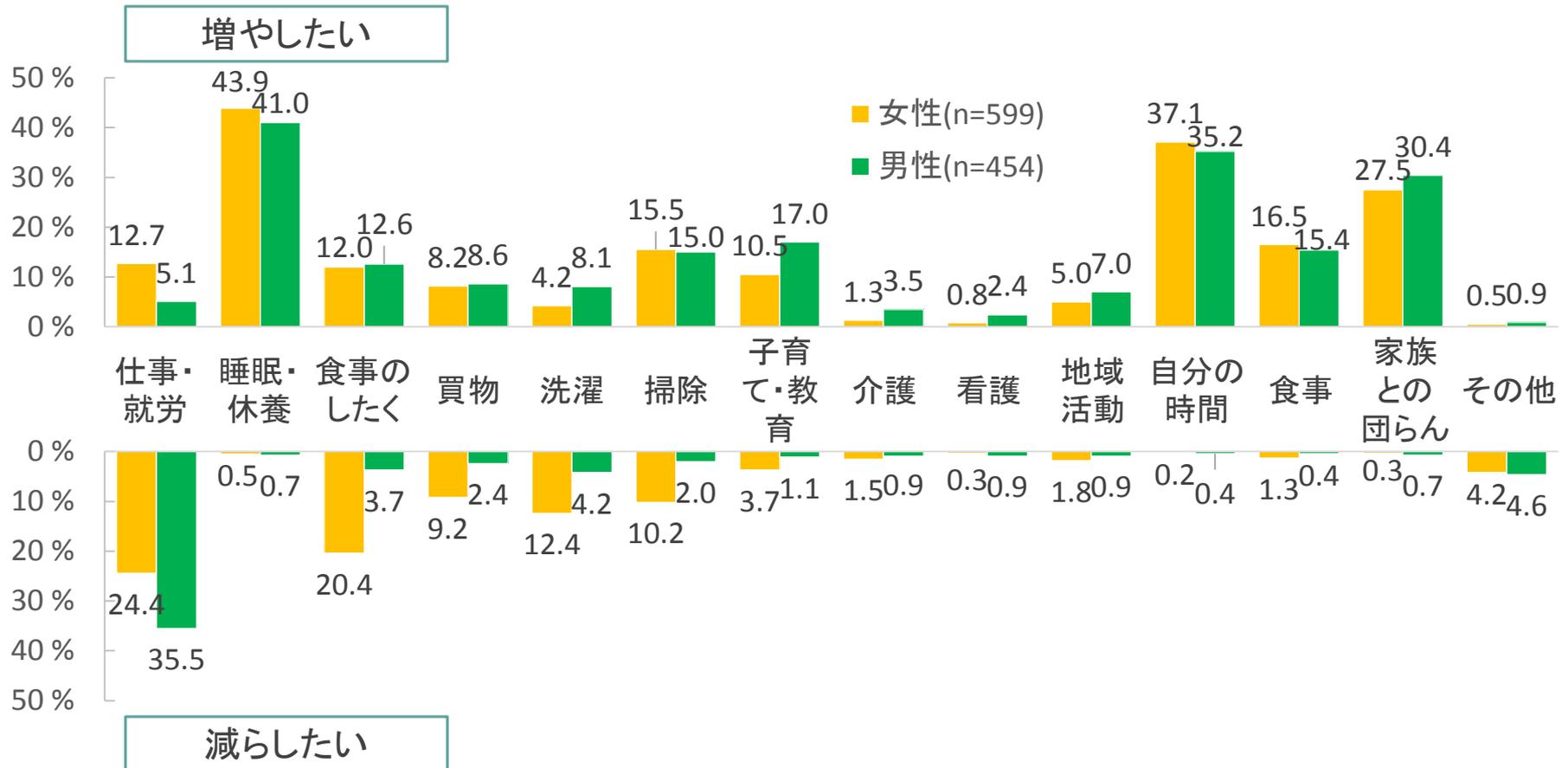
生活時間(休日 末子6歳未満)

- 同様に、末子6歳未満の休日を見ると、男性回答者では「子育て・教育」が3時間10分で、平日に比べると増加しているが、女性回答者でも「子育て・教育」の時間は増加しており、7時間7分であった。
- 「自分の時間」は、休日でも女性回答者では1時間程度、男性回答者では1時間半程度となっている。



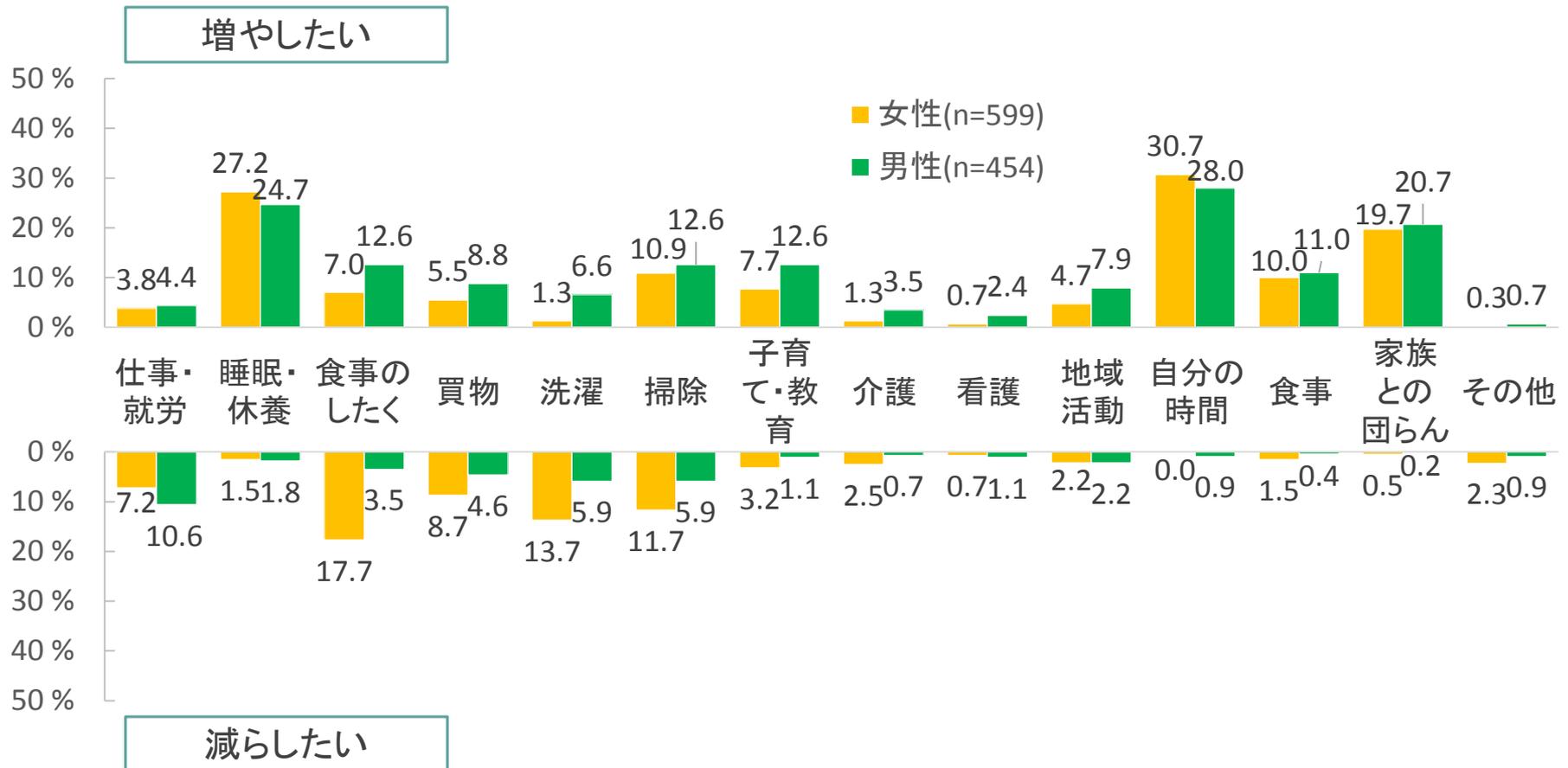
生活時間の満足度：平日

- 平日の各生活時間についての意向を「現状で満足」「増やしたい」「減らしたい」の3項目で尋ねた。
- 最も「増やしたい」との回答が多かったのは「睡眠・休養」で、男女ともに4割超。次いで、3割台後半で「自分の時間」が続いた。反対に「減らしたい」ものとしては、男女とも「仕事・就労」が2～3割台であった。
- 女性回答者では「仕事・就労」時間を増やしたいが男性より7ポイントあまり、男性回答者では「子育て・教育」が女性より7ポイント近く高くなっている。



生活時間の満足度：休日

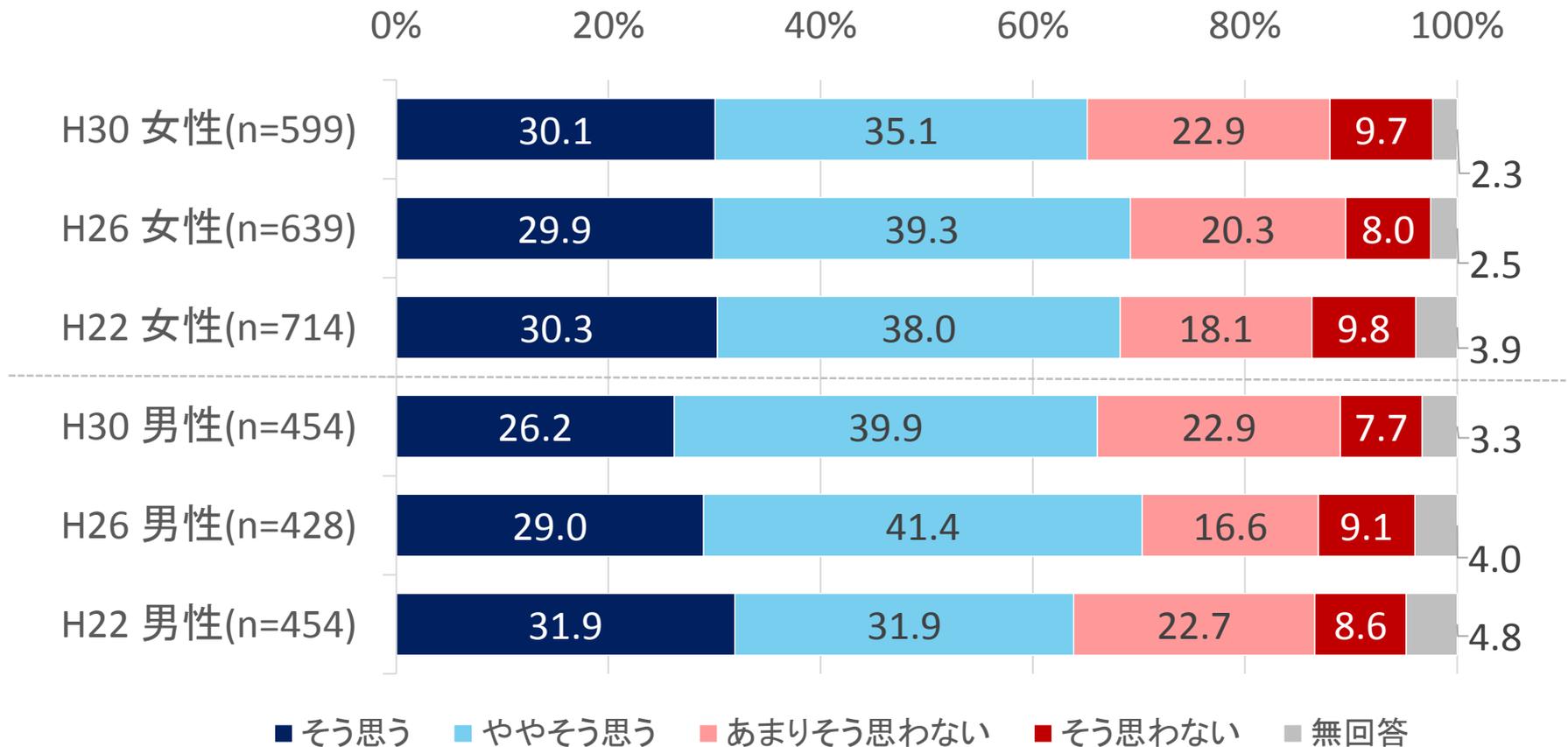
- 休日については、男女とも「自分の時間」が3割前後で最も多く、「睡眠・休養」が2割台で続いた。
- 休日について、女性回答者では「食事のしたく」「買い物」「洗濯」「掃除」を「減らしたい」とする人が、「増やしたい」とする人を上回っている。



9. ジェンダー規範

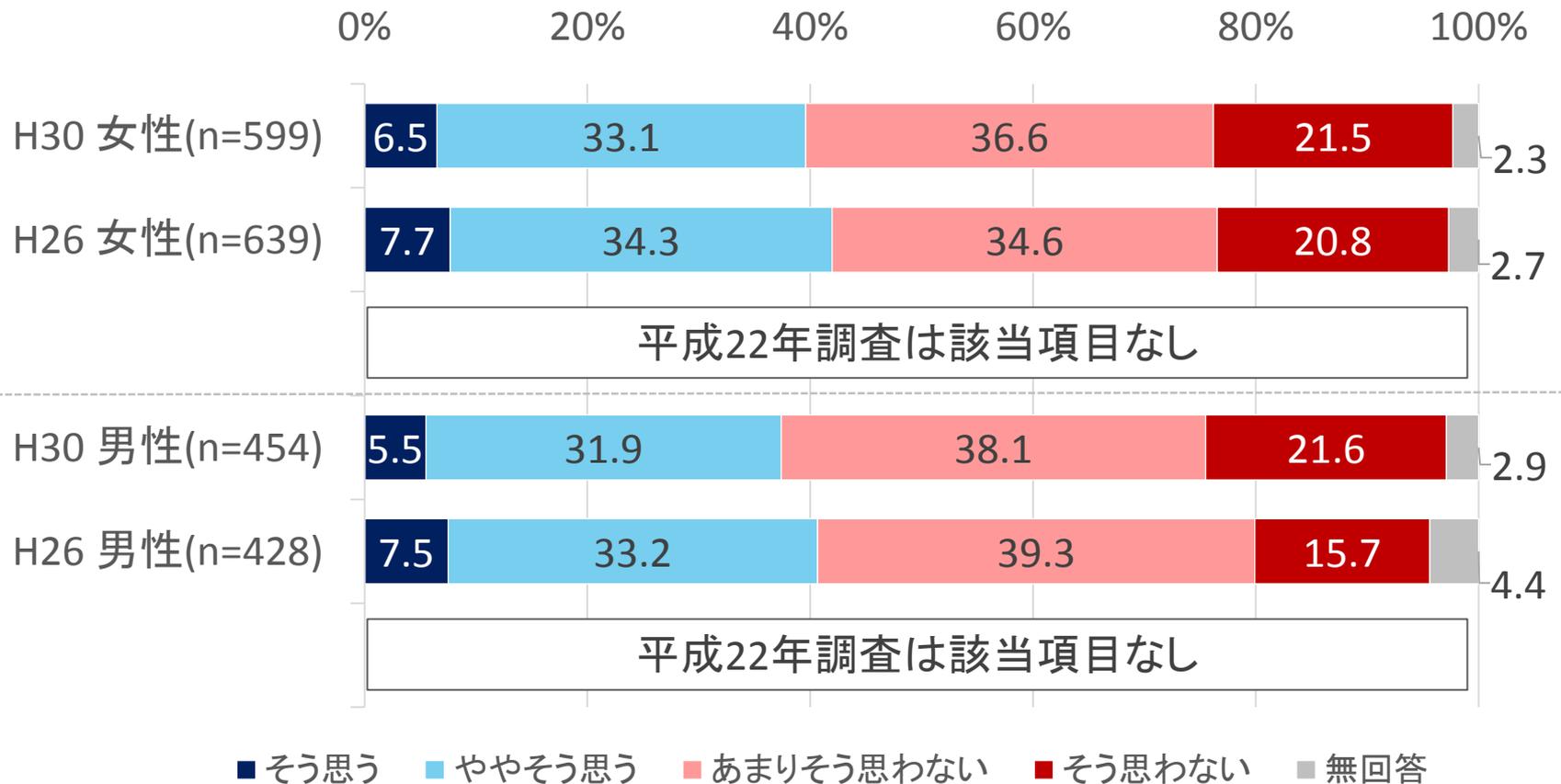
「女性の仕事は、収入が少なくても、勤務時間を選べる仕事が望ましい」

- 「女性の仕事は、収入が少なくても、勤務時間を選べる仕事が望ましい」という考え方について、H22調査、H26調査から大きな変化はなく男女とも、賛同派が6割以上を占めた。
- 男性では「そう思う」との回答は、H22調査と比較すると、5ポイントあまり減少している。



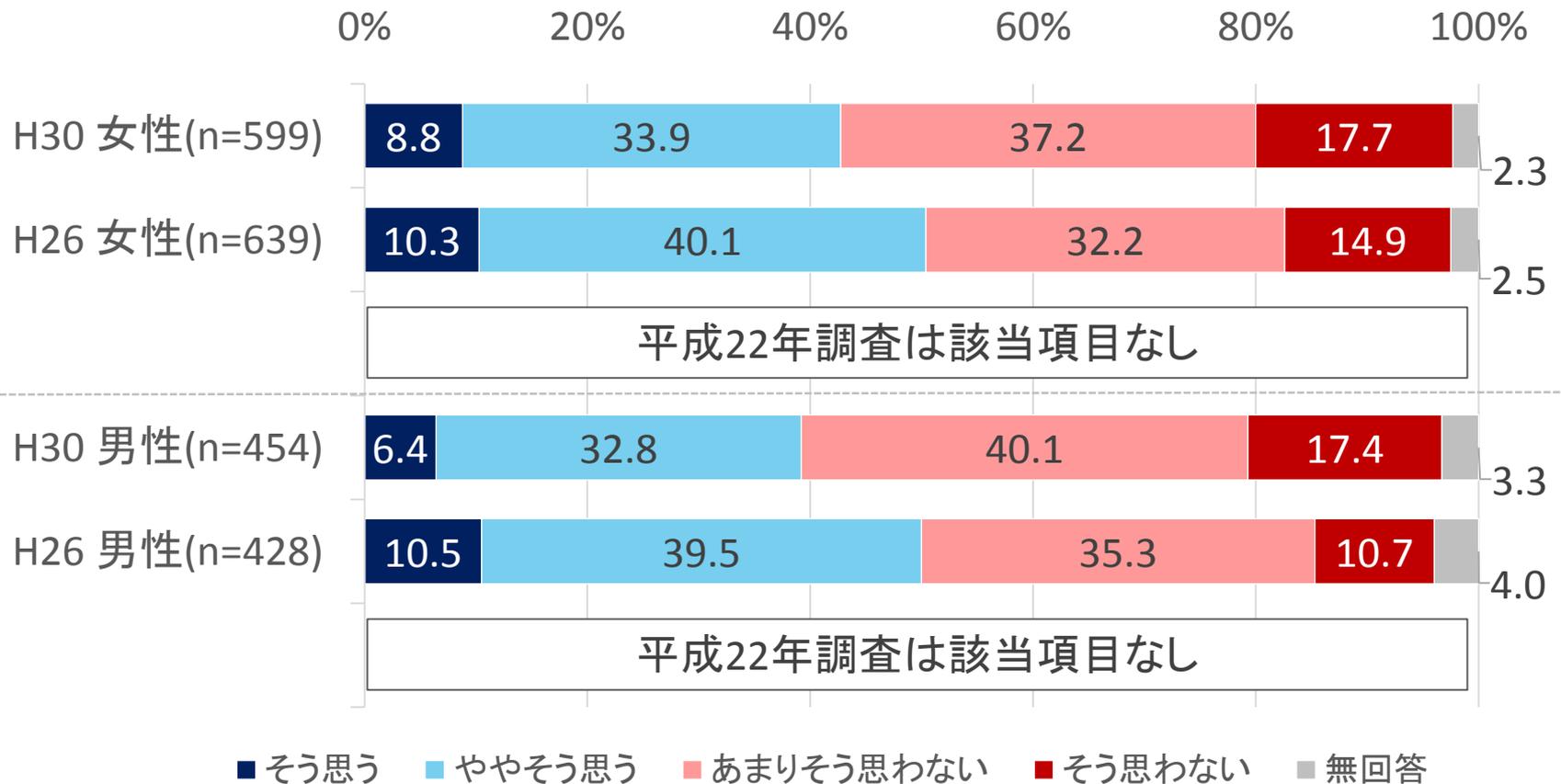
「女性は、結婚したら自分自身よりも夫や子どもなど家族を中心に考えて生活すべきである」

- 「女性は、結婚したら自分自身よりも夫や子どもなど家族を中心に考えて生活すべきである」との考えについては、否定派が6割弱を占めた。



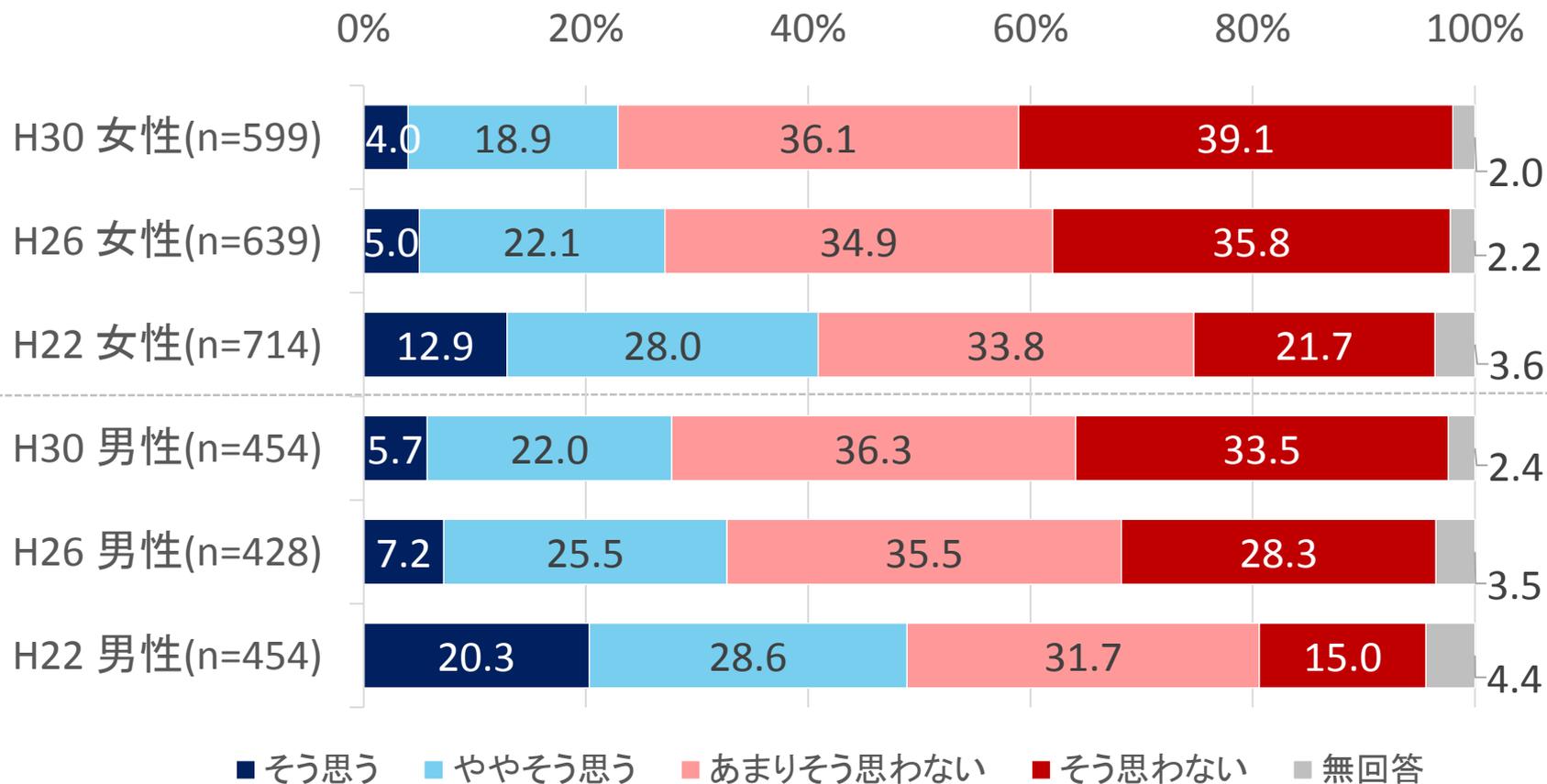
「女性は、仕事をもっても家事・育児もきちんとすべきである」

- 次に、「女性は、仕事をもっても家事・育児もきちんとすべきである」との考えについてみると、男女とも過半数が「あまりそう思わない」「そう思わない」と回答している。
- H26調査と比較すると、男女とも肯定派が10ポイント前後減少している。



「男は外で働き、女は家庭を守るのが望ましい」

- 「男は外で働き、女は家庭を守るのが望ましい」という考えについては、さらに否定派が増加しており、女性回答者では賛同派22.9%／反対派75.1%、男性回答者では賛同派27.8%／反対派70.8%となった。

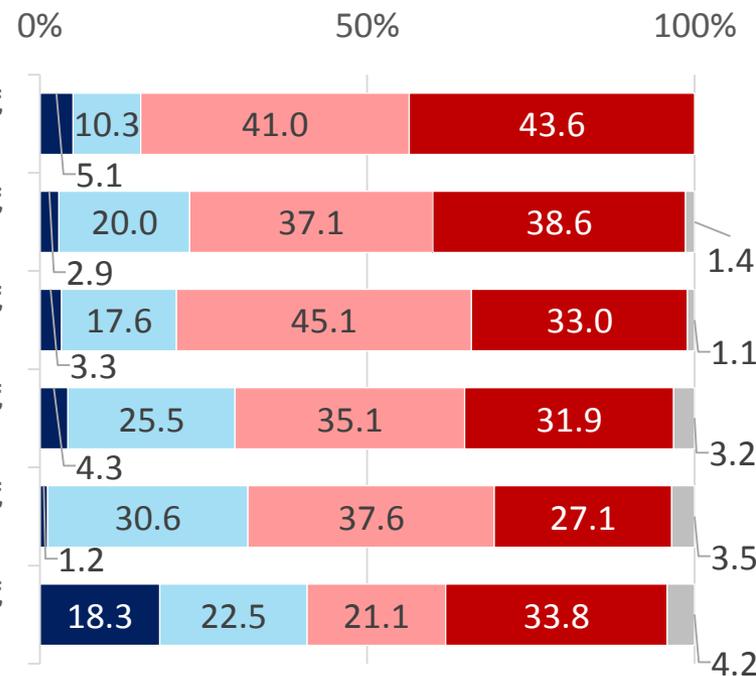
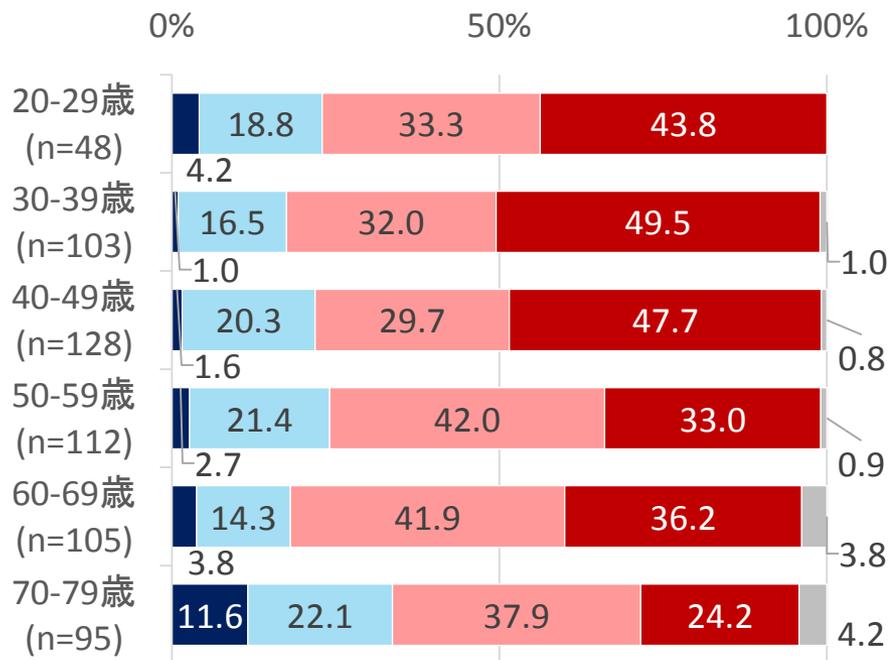


「男は外で働き、女は家庭を守るのが望ましい」(年代別)

- 年代ごとに見ると、女性回答者では60代以下で否定派が7割以上を占めている。
- 男性回答者は年代が下がるにつれて否定派が多くなる傾向にあり、20代では8割以上を占める。

H30女性

H30男性

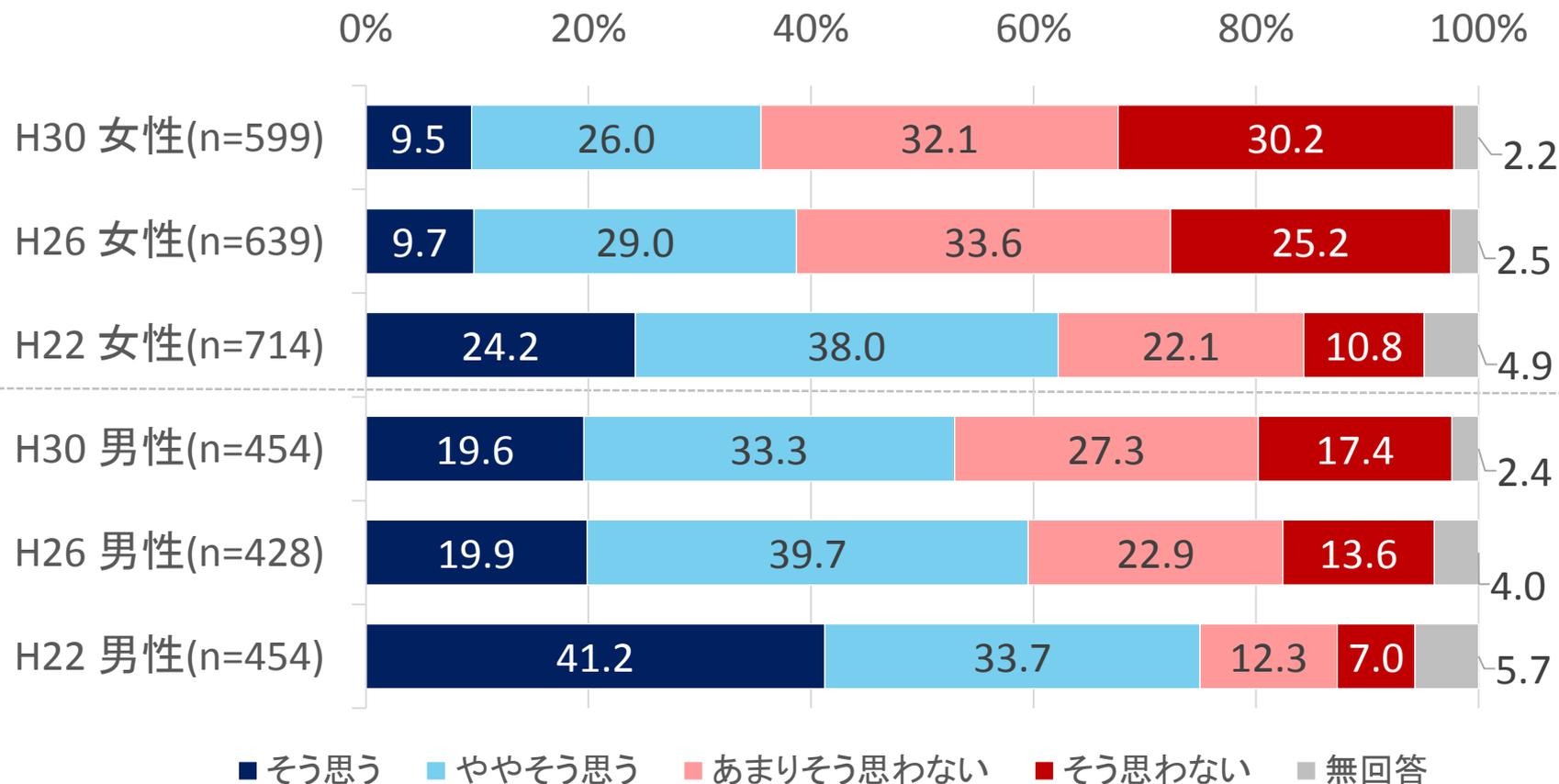


■ そう思う ■ ややそう思う
■ あまりそう思わない ■ そう思わない
■ 無回答

■ そう思う ■ ややそう思う
■ あまりそう思わない ■ そう思わない
■ 無回答

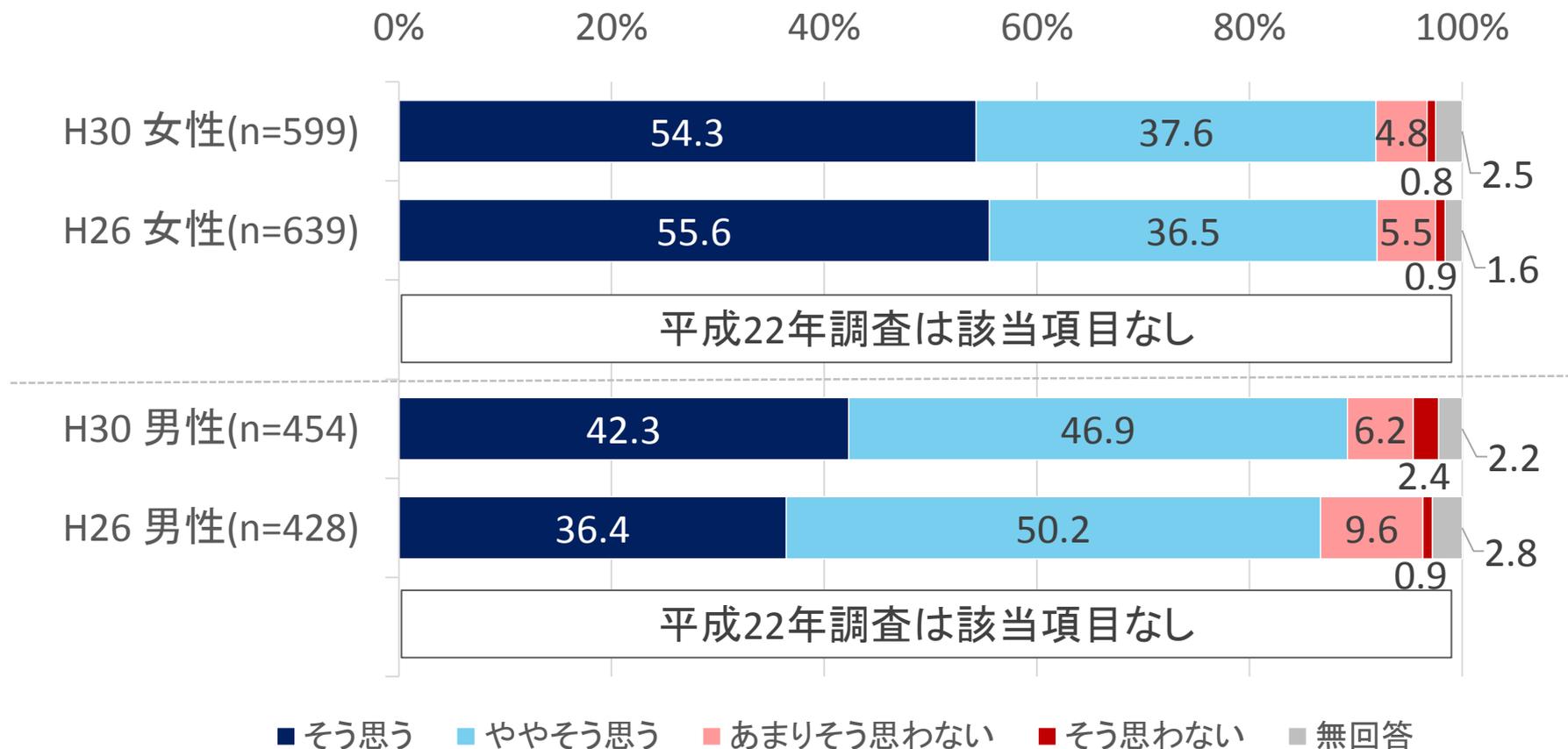
「家族を養うのは、もっぱら男の責任である」

- 「家族を養うのは、もっぱら男の責任である」とする規範について、女性は反対派が6割以上を占めているのに対し、男性では賛同派が過半数を占めており、統計的にも有意に高い。



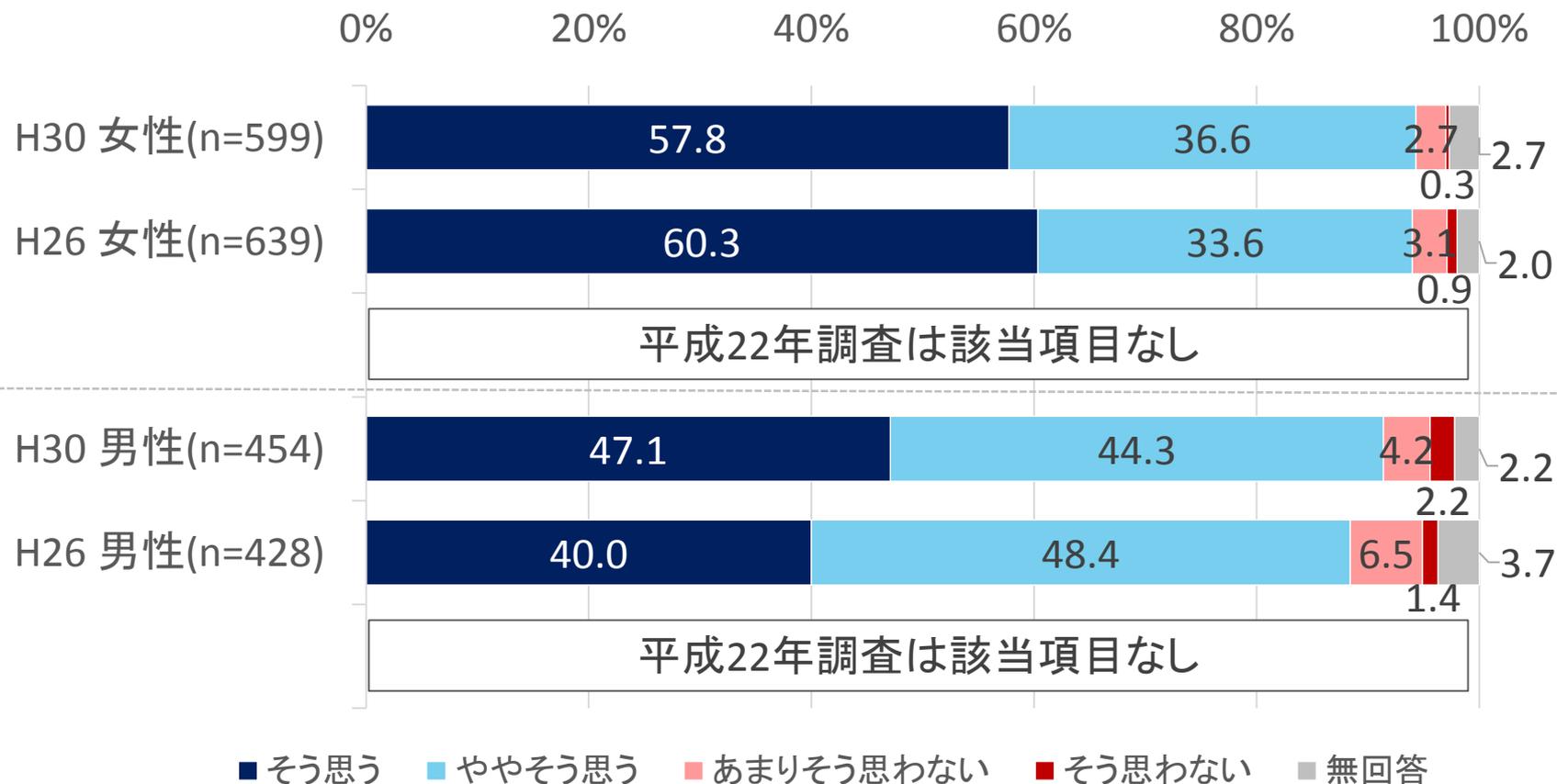
「男性も〈家事〉に積極的に参加すべきである」

- 「男性も〈家事〉に積極的に参加すべきである」については、男女とも9割前後という大多数が賛同している。
- 男性では「そう思う」との回答が前回より約6ポイント上昇し、42.3%となった。



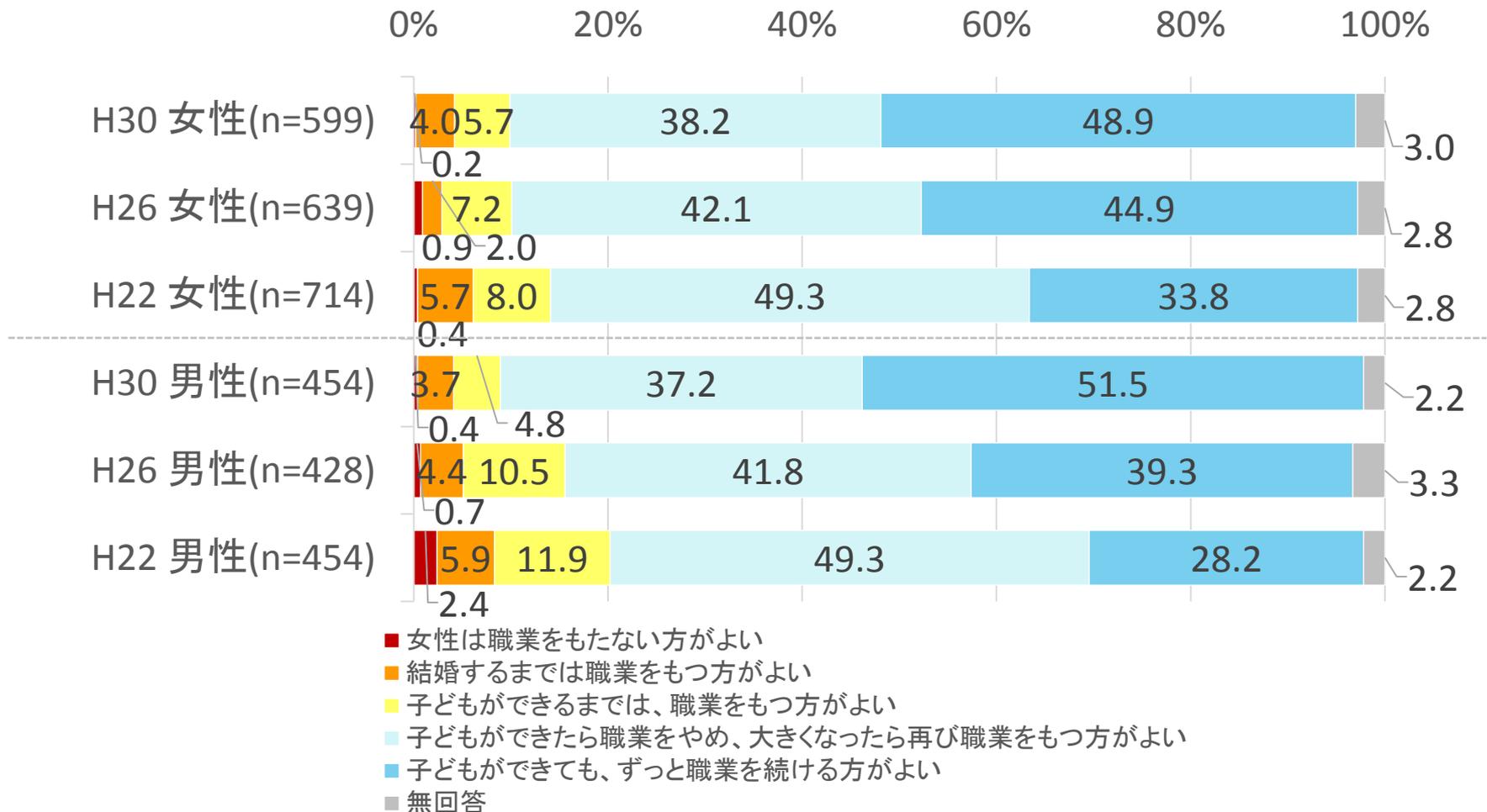
「男性も〈育児〉に積極的に参加すべきである」

- 「男性も〈育児〉に積極的に参加すべきである」との考えについては、男女とも9割以上が賛同していた。
- 女性回答者はH26調査とほぼ変化はなく、男性回答者は〈家事〉同様「そう思う」がやや増加していた。



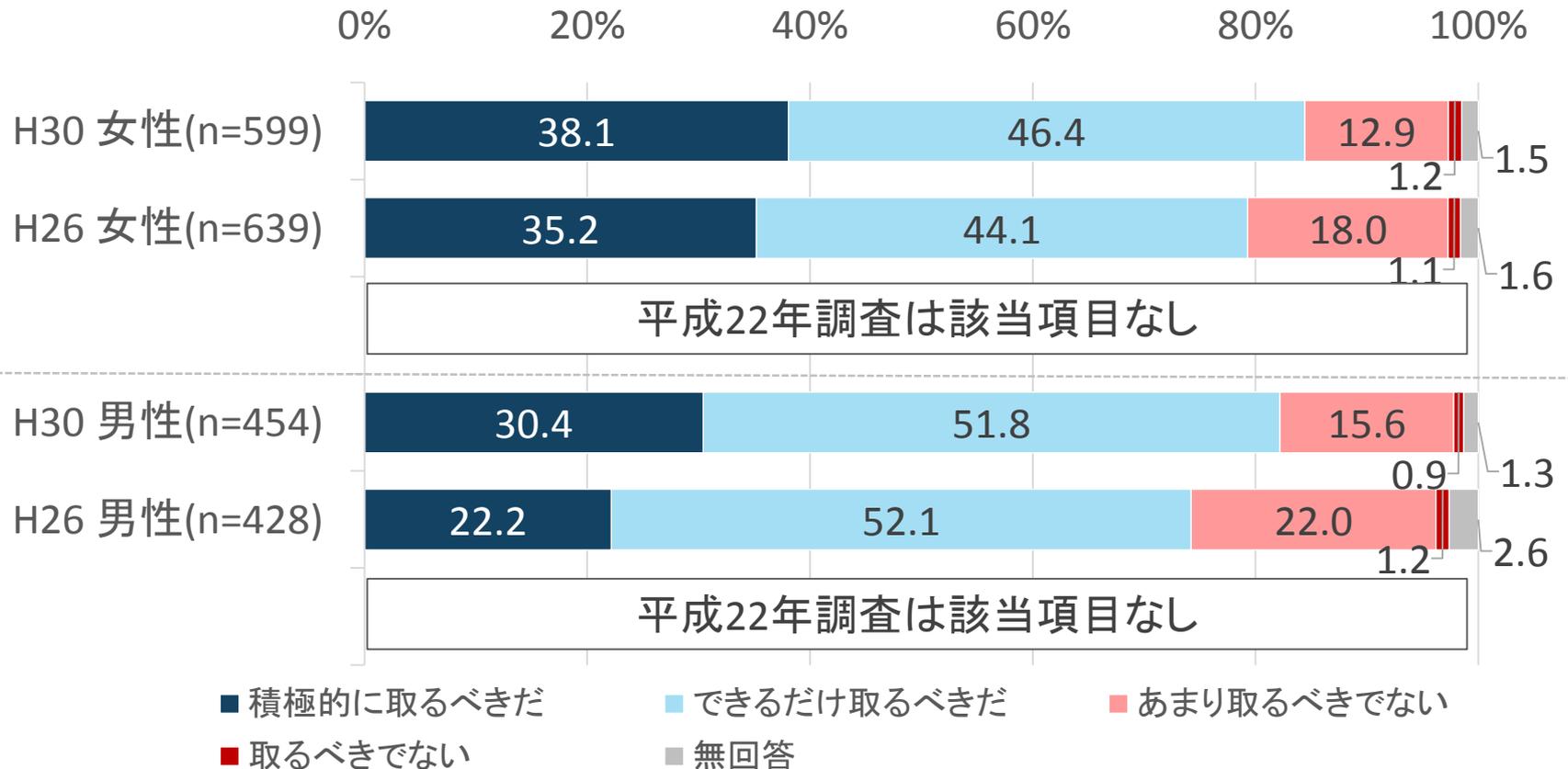
一般的に、女性が職業をもつことについて

- 一般論として(回答者自身のことではなく)、女性が職業をもつことについて結婚や子どもの有無にかかわらず「ずっと職業を続ける方がよい」とする人は、男女とも約5割を占めた。特に、男性ではH26調査よりも10ポイント以上増加している。



男性の育児休業取得について

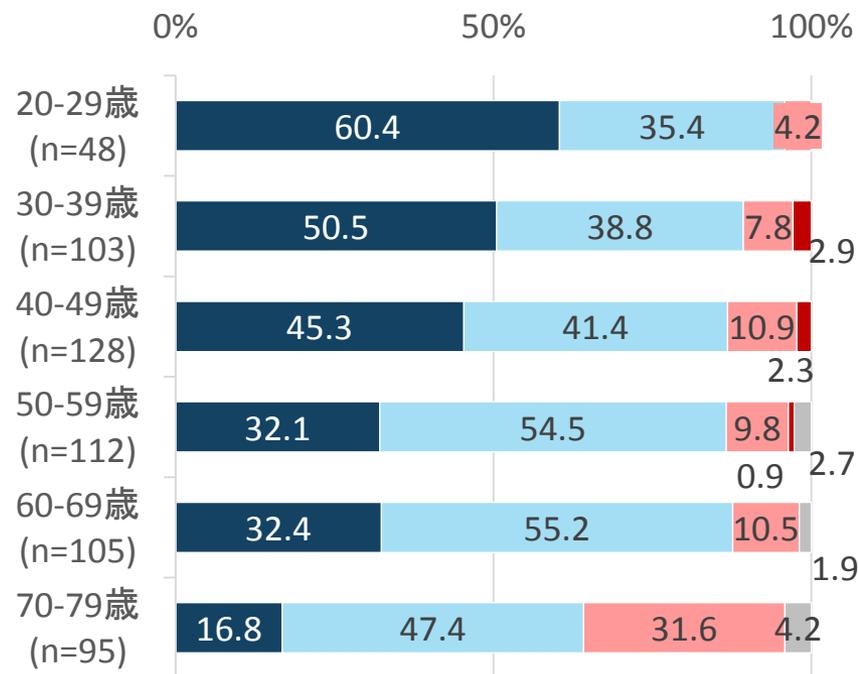
- 男性の育児休業取得については、男女ともに賛成派が8割を超えた。
- 「積極的にとるべきだ」のみを見ると、女性回答者のほうが男性回答者より8ポイント近く多く、38.1%となった。男性回答者は、H26調査よりも8ポイント以上増えている。



男性の育児休業取得について(年代別)

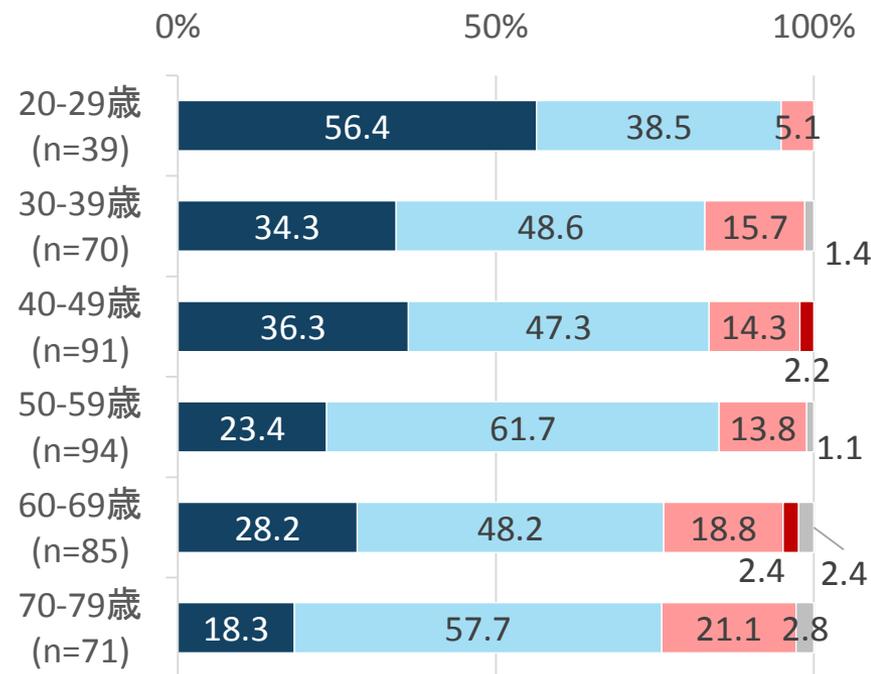
- 年代別にみると、男女ともいずれの年代でも賛成派が6割以上を占め、多数派になっている。
- 年代が上がると「積極的に取るべきだ」とする回答に減少傾向が見られ、70代の女性回答者では否定派が3割以上となっている。

H30 女性



- 積極的に取るべきだ
- できるだけ取るべきだ
- あまり取るべきでない
- 取るべきでない
- 無回答

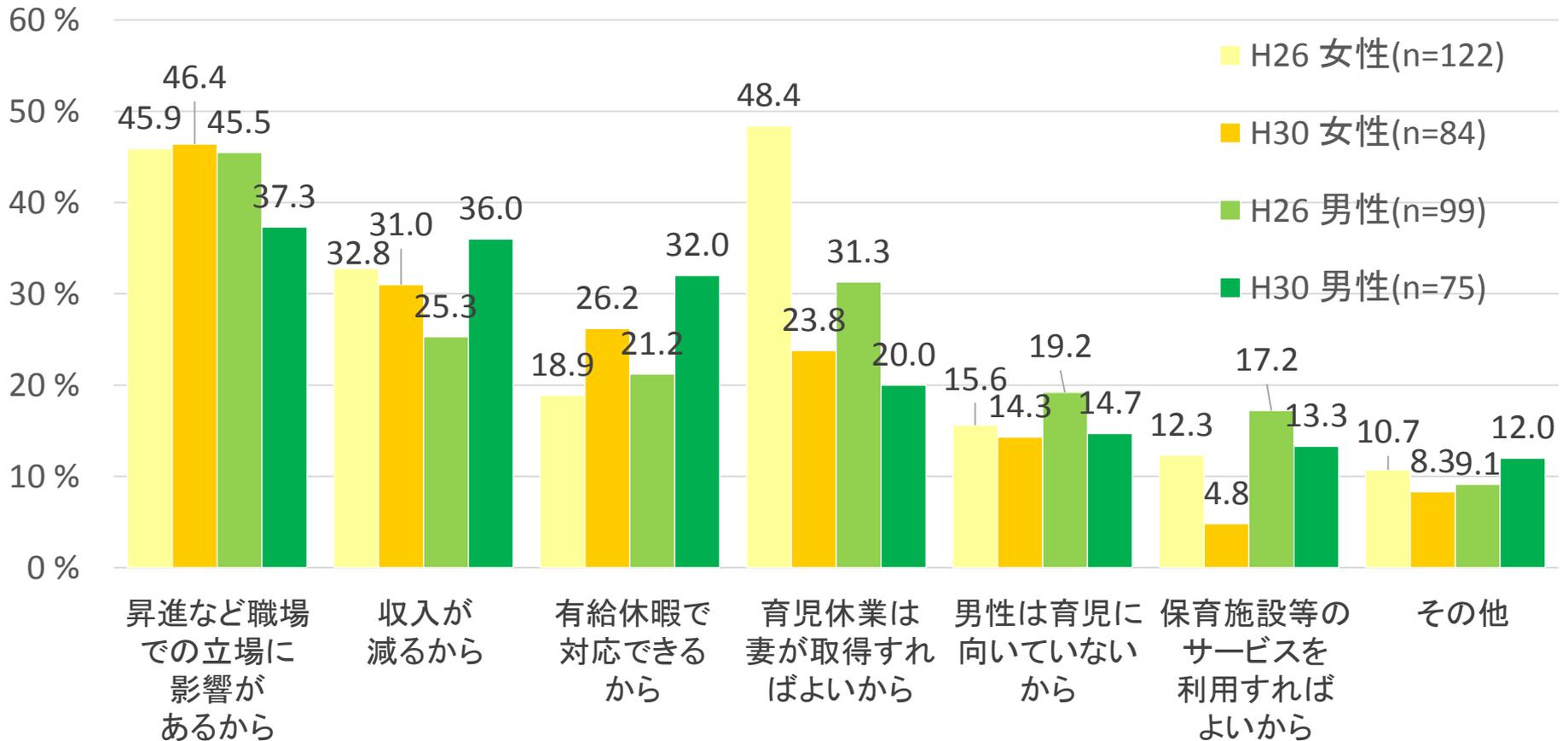
H30 男性



- 積極的に取るべきだ
- できるだけ取るべきだ
- あまり取るべきでない
- 取るべきでない
- 無回答

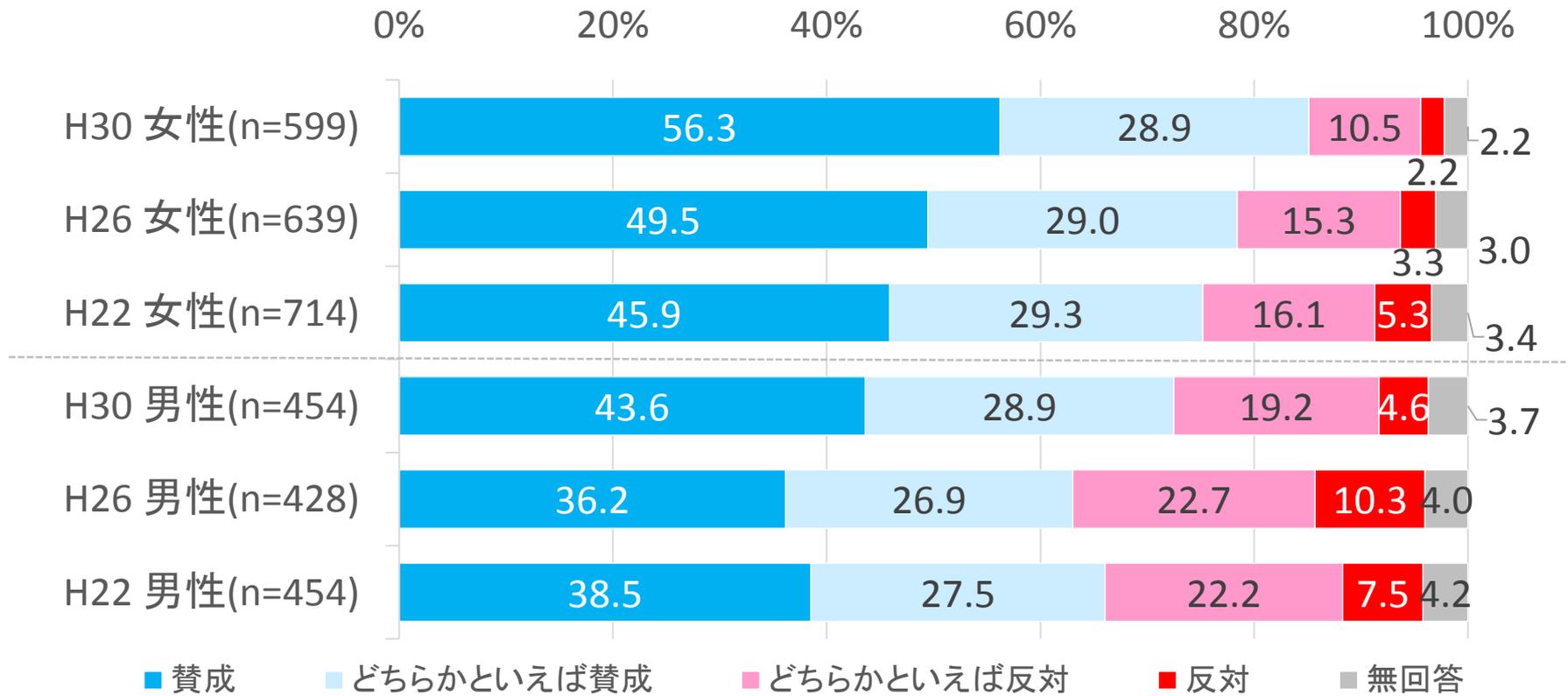
男性が育児休業を取得すべきでないと思う理由 (複数回答)

- 男性の育児休業に関する質問で「取るべきでない」「あまり取るべきでない」とした人に、その理由を尋ねた。最も多かったのは男女とも「昇進など職場での立場に影響があるから」で、女性回答者では45.5%、男性回答者では37.3%であった。
- 女性回答者では、H26調査で最も多く挙げた「育児休業は妻が取得すればよいから」との理由が24.6ポイント減少し、23.8%となった。



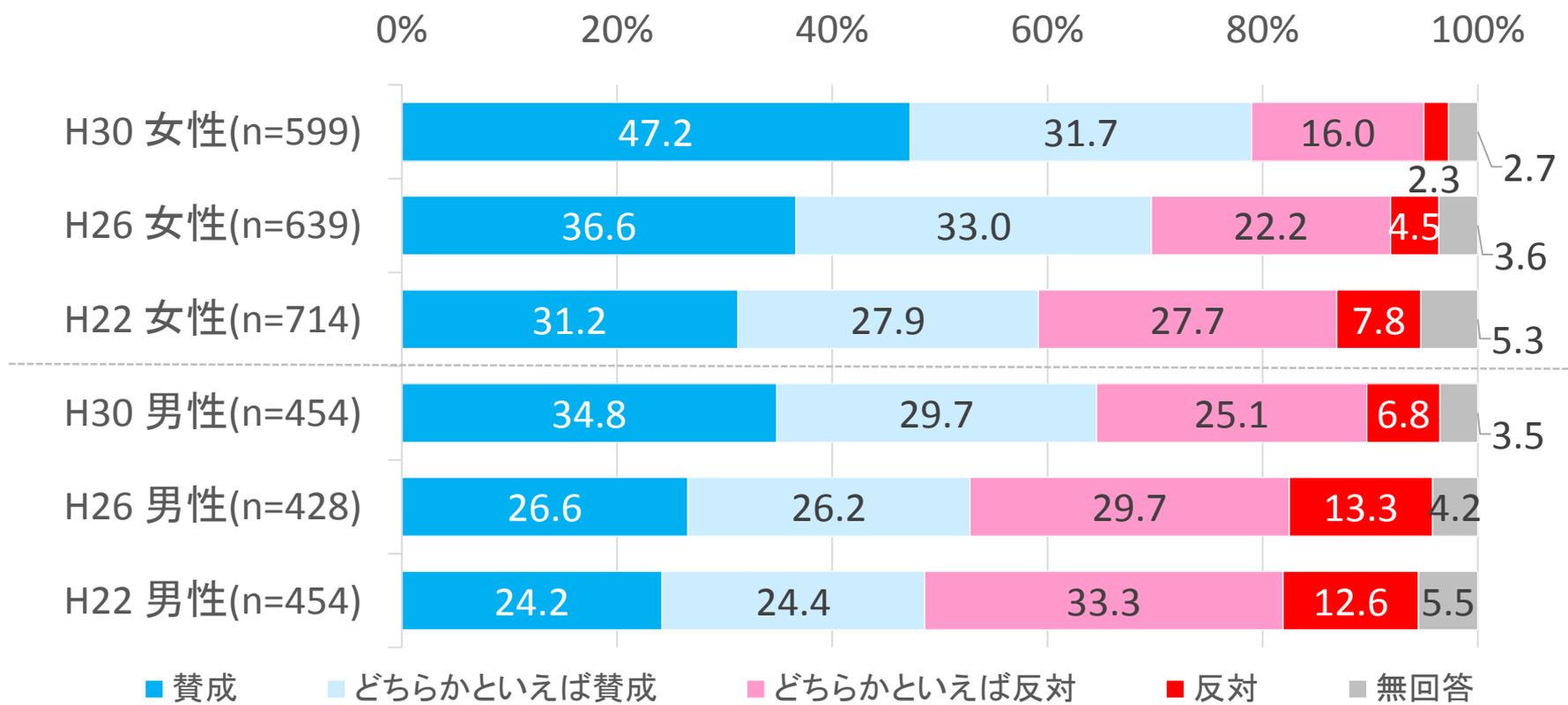
「結婚は個人の自由であるから、結婚してもしなくてもどちらでもよい」

- 「結婚は個人の自由であるから、結婚してもしなくてもどちらでもよい」との考えについては、H22調査、H26調査よりも上昇し、女性回答者では8割超、男性回答者でも7割超となった。賛成派は、女性回答者が男性よりも有意に高い結果となった。



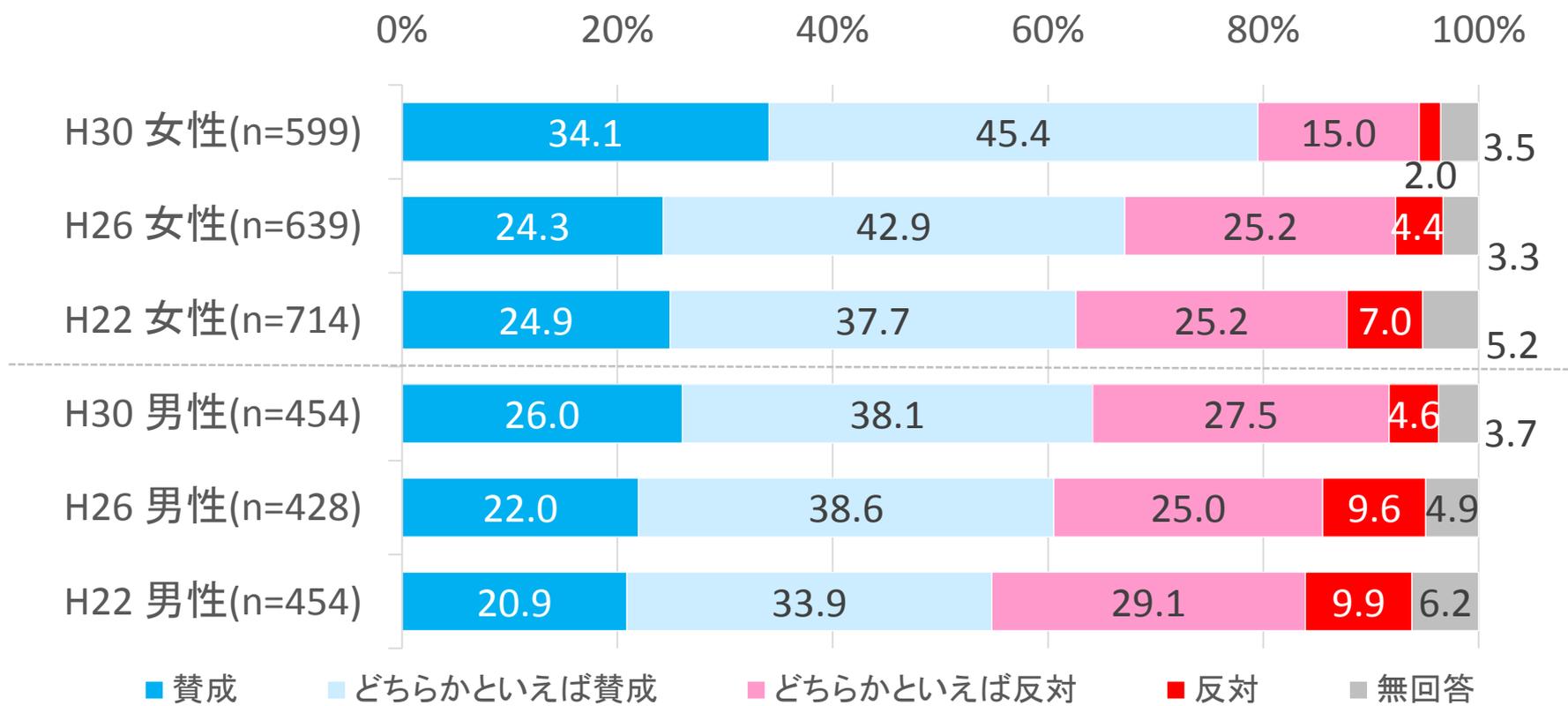
「結婚しても必ずしも子どもをもつ必要はない」

- 「結婚しても必ずしも子どもをもつ必要はない」との意見についても、H22調査、H26調査よりも賛成派が上昇した。女性回答者では賛成派が約8割、男性回答者では6割超で、女性回答者のほうが有意に高い。



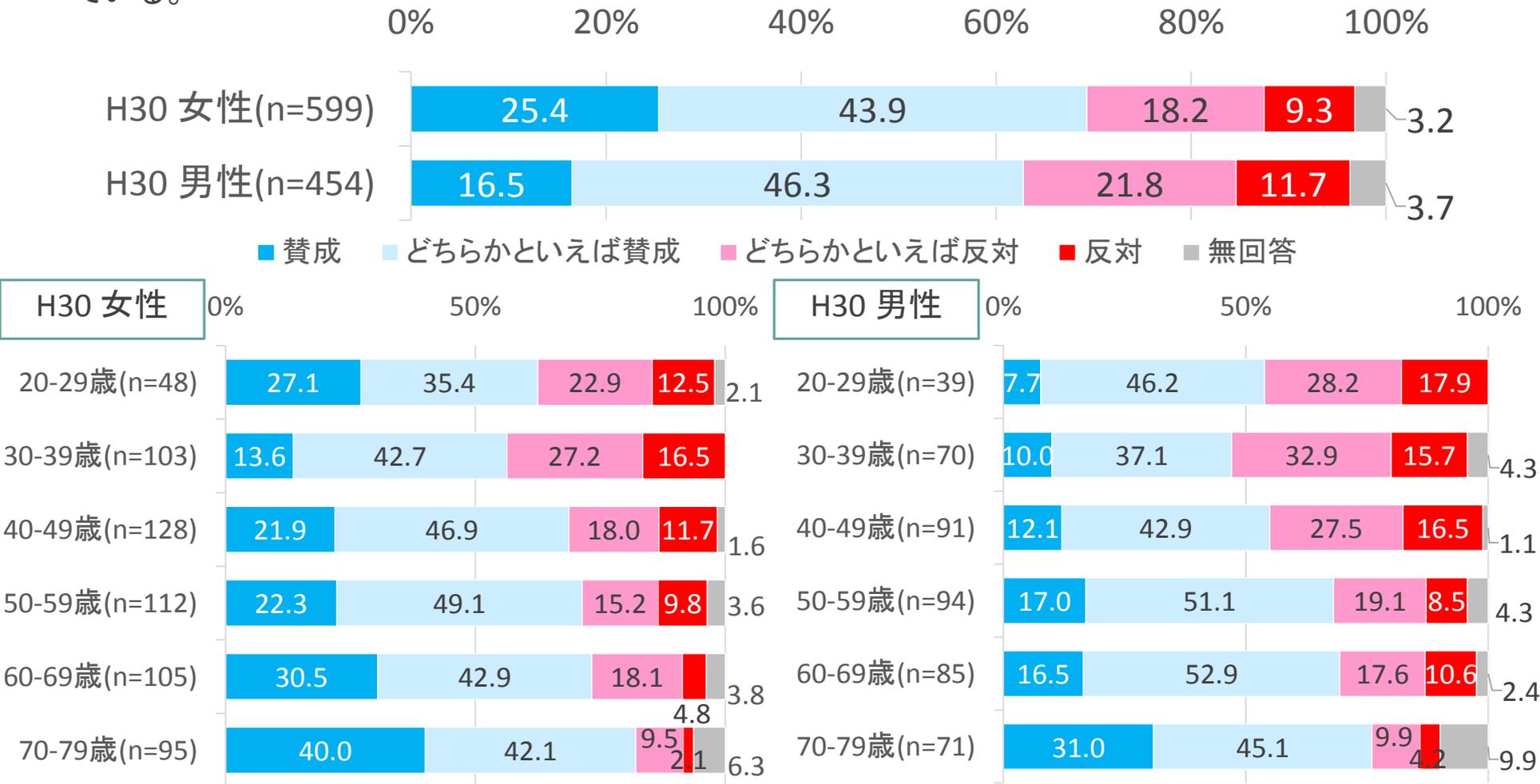
「結婚しても相手に満足できないときは離婚すればよい」

- 「結婚しても相手に満足できないときは離婚すればよい」との考えについては、女性回答者ではH26調査より10ポイント以上高い、79.5%となった。
- 男性でも賛成派が64.1%を占めているが、女性のほうが賛成派が有意に高い結果となった。



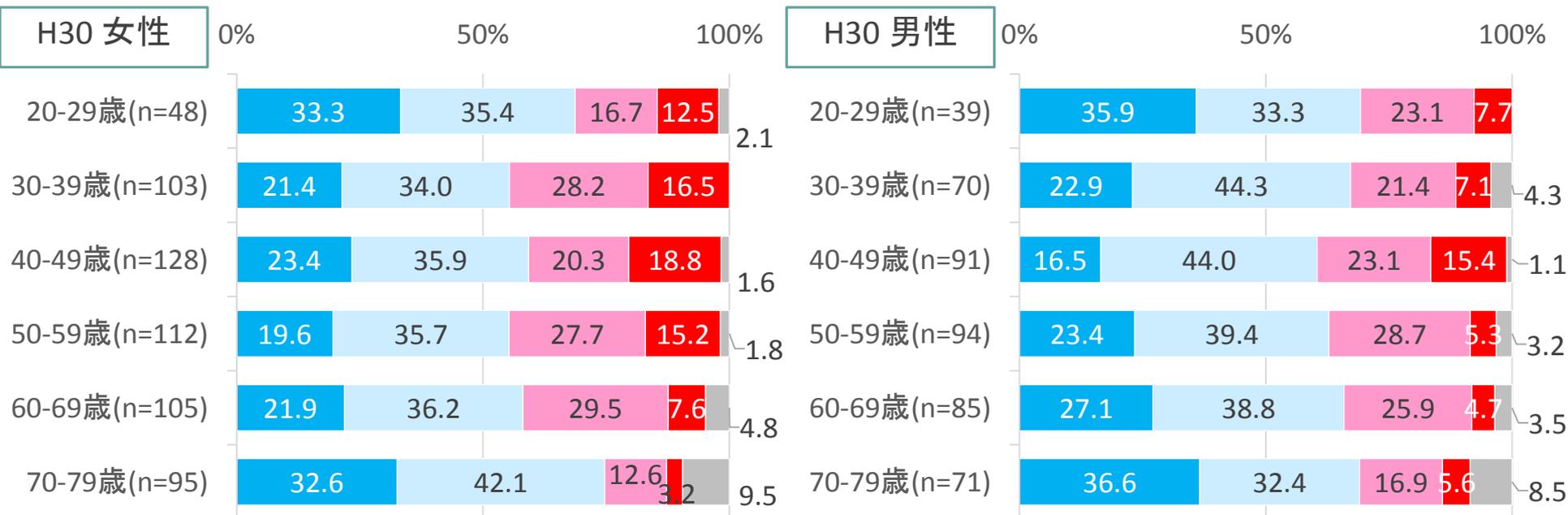
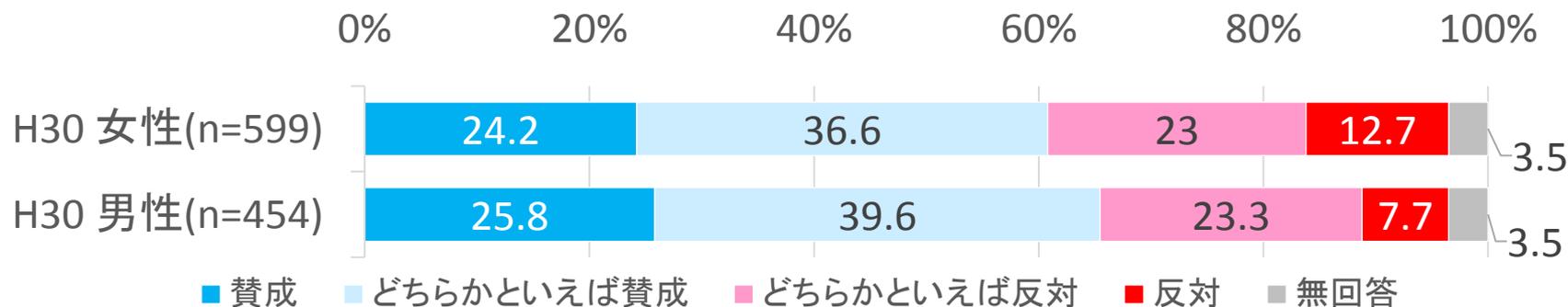
「子どもは3歳までは母親の手で育てるべきだ」

- 「子どもは3歳までは母親の手で育てるべきだ」との考えについては、賛成派が6割以上いた。
- 年代別に見ても、女性回答者では全ての年代で、男性回答者では30代を除き、賛成派が多数となっている。



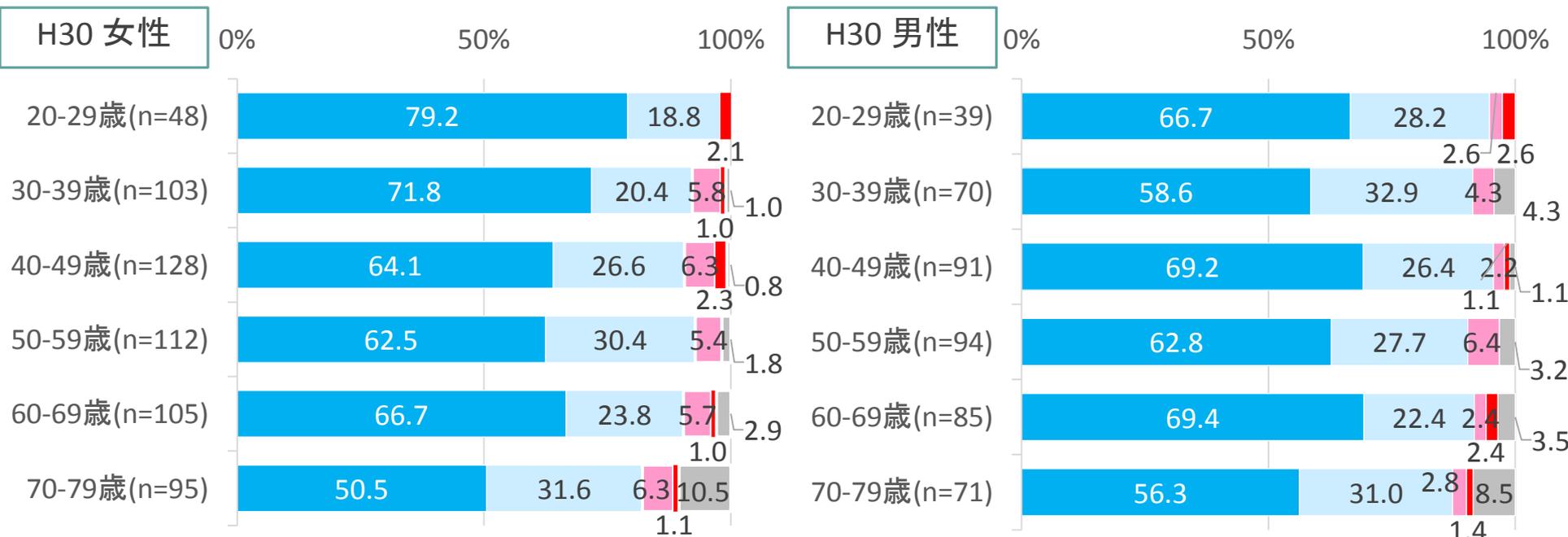
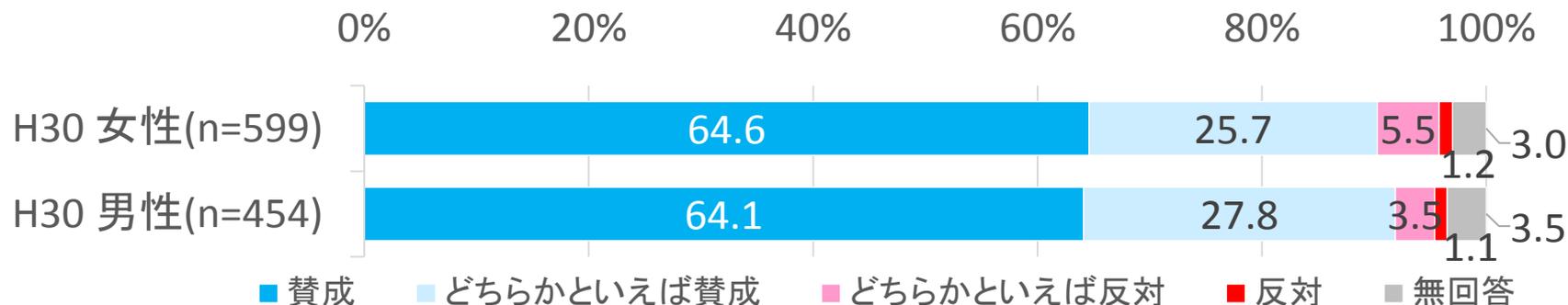
「1歳未満の子どもを預けてまで母親は働く必要はない」

- 「1歳未満の子どもを預けてまで母親は働く必要はない」という考えについては、6割以上が賛成派となっている。男女とも、どの年代でも賛成派が過半数を占めており、年代による一貫した傾向差も見られない。



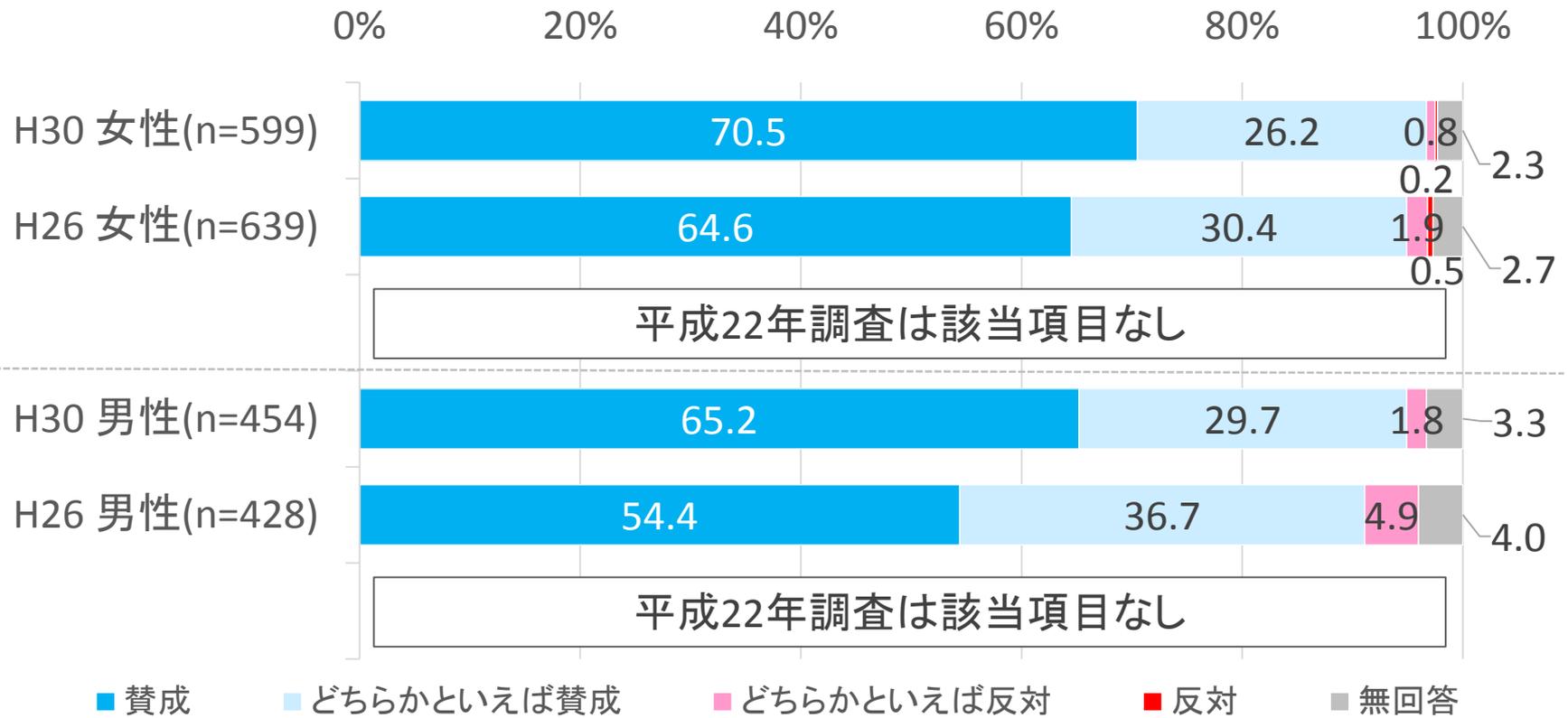
「子どもを預けたいと思う人は 全員保育園を利用できる社会であるべきだ」

- 「子どもを預けたいと思う人は全員保育園を利用できる社会であるべきだ」との考えについては、男女いずれも9割以上が賛成派となっている。
- 年代別で見ても、いずれの層でも賛成派が8割以上であった。



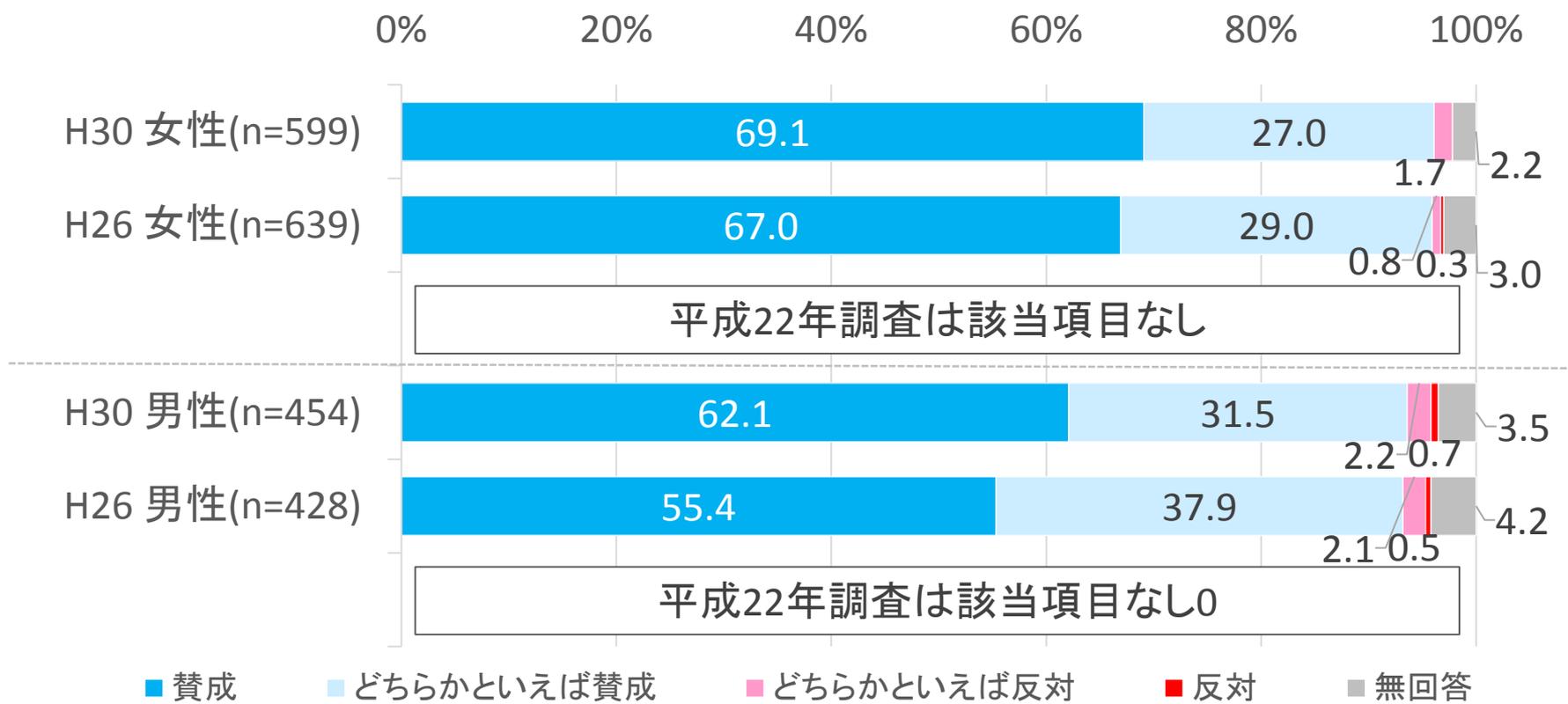
「女の子も男の子と同等に 経済的に自立できるよう育てる方がよい」

- 「女の子も男の子と同等に経済的に自立できるよう育てる方がよい」との考えについては、95%以上の人が「賛成」または「どちらかといえば賛成」と回答していた。



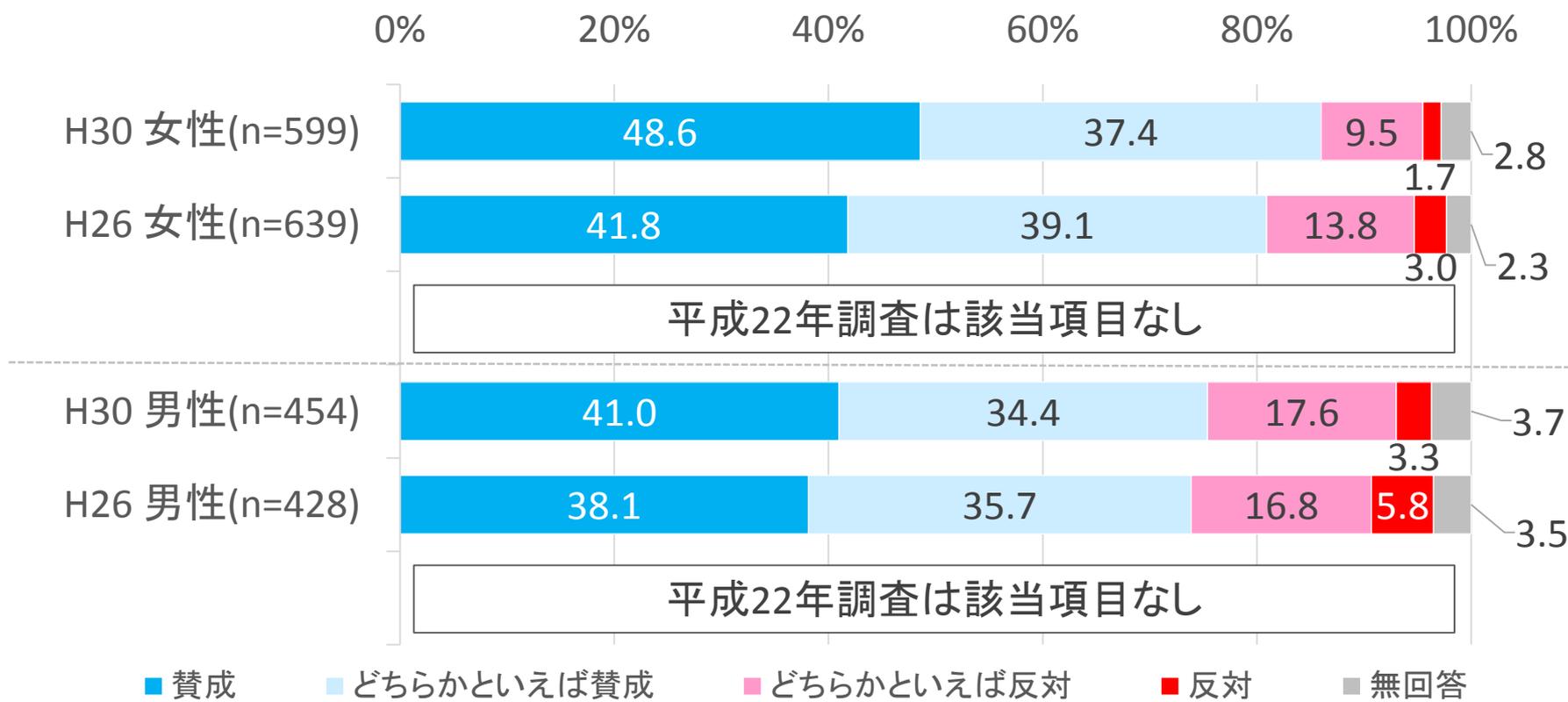
「男の子にも女の子と同等に炊事・掃除・洗濯など、生活に必要な技術を身につけさせる方がよい」

- 「男の子にも女の子と同等に炊事・掃除・洗濯など、生活に必要な技術を身につけさせる方がよい」についても、同様に大半の人が「賛成」または「どちらかといえば賛成」と回答していた。



「男の子も女の子も同じように育てたほうがよい」

- 「男の子も女の子も同じように育てたほうがよい」との考えについては、女性回答者では8割以上、男性回答者では7割以上が賛成派となり、女性の方が賛成派が有意に高い結果となった。

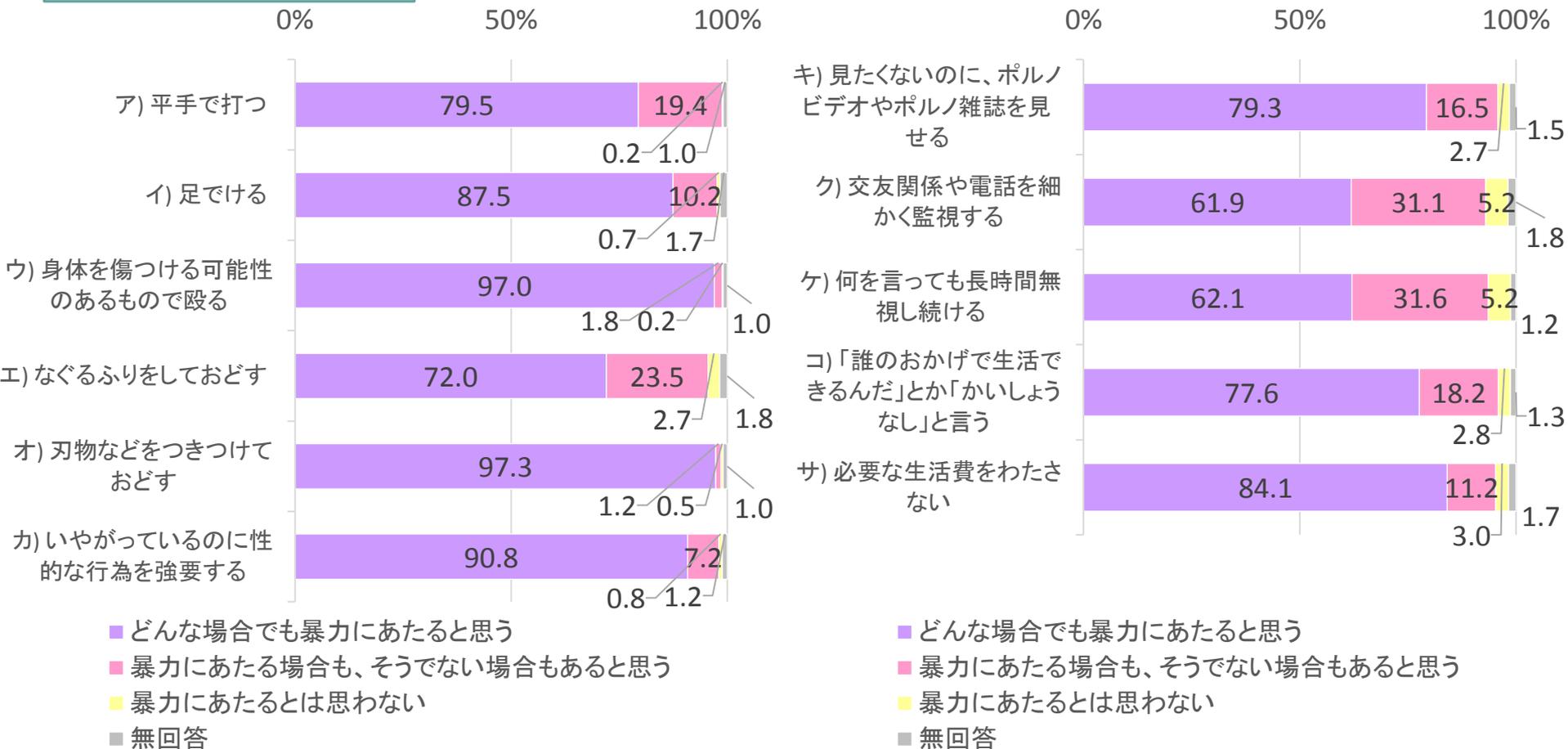


10. DV／デートDV 被害の認知と現状

DVについての認識(女性)

- 女性回答者では、DVについての認識は、〈交友関係や電話を細かく監視する〉及び〈何を言っても長時間無視し続ける〉の2項目で、「どんな場合でも暴力にあたると思う」人が6割強に留まっている。

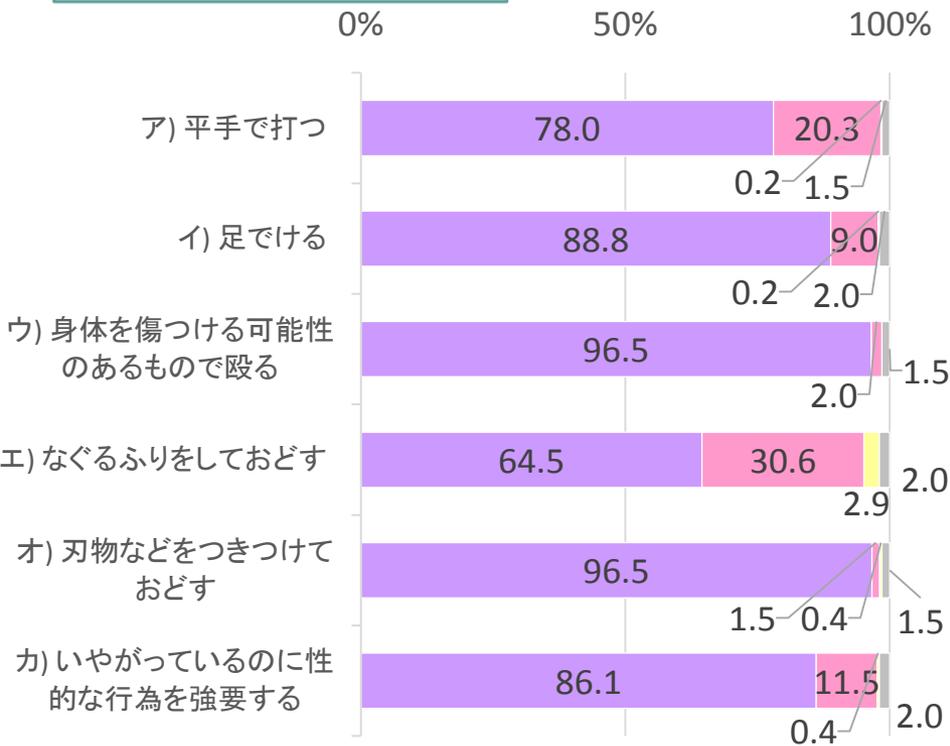
H30女性(n=599)



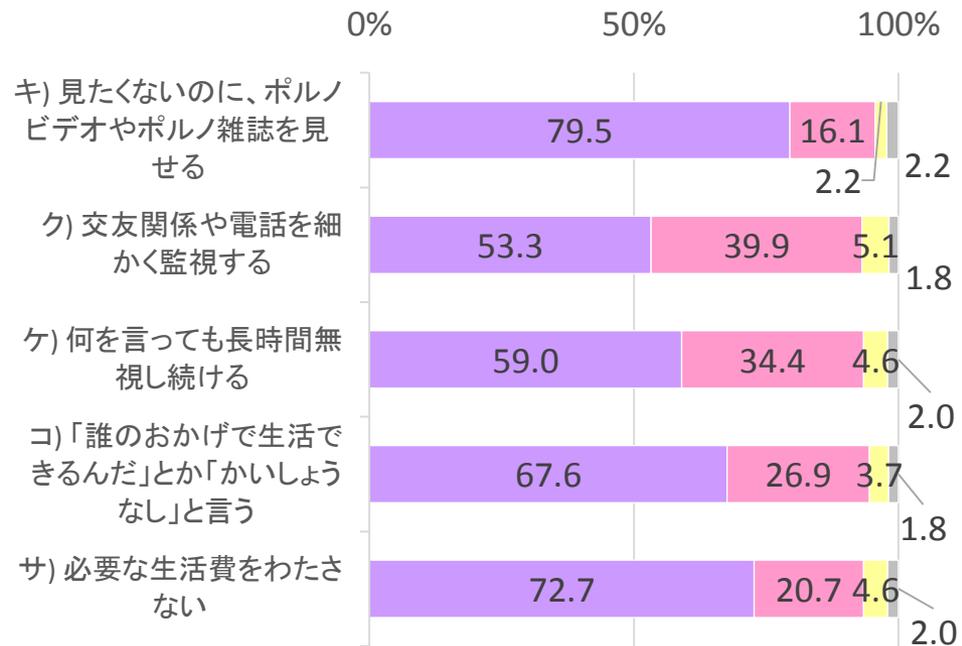
DVについての認識(男性)

- 男性回答者におけるDVについての認識では、女性回答者で6割強であった〈交友関係や電話を細かく監視する〉、〈何を言っても長時間無視し続ける〉が5割台とさらに低く、また、〈なぐるふりをしておどす〉と〈誰のおかげで生活できるんだ〉とか「かいしょうなし」と言う〉でも6割台となっている。

H30男性(n=454)



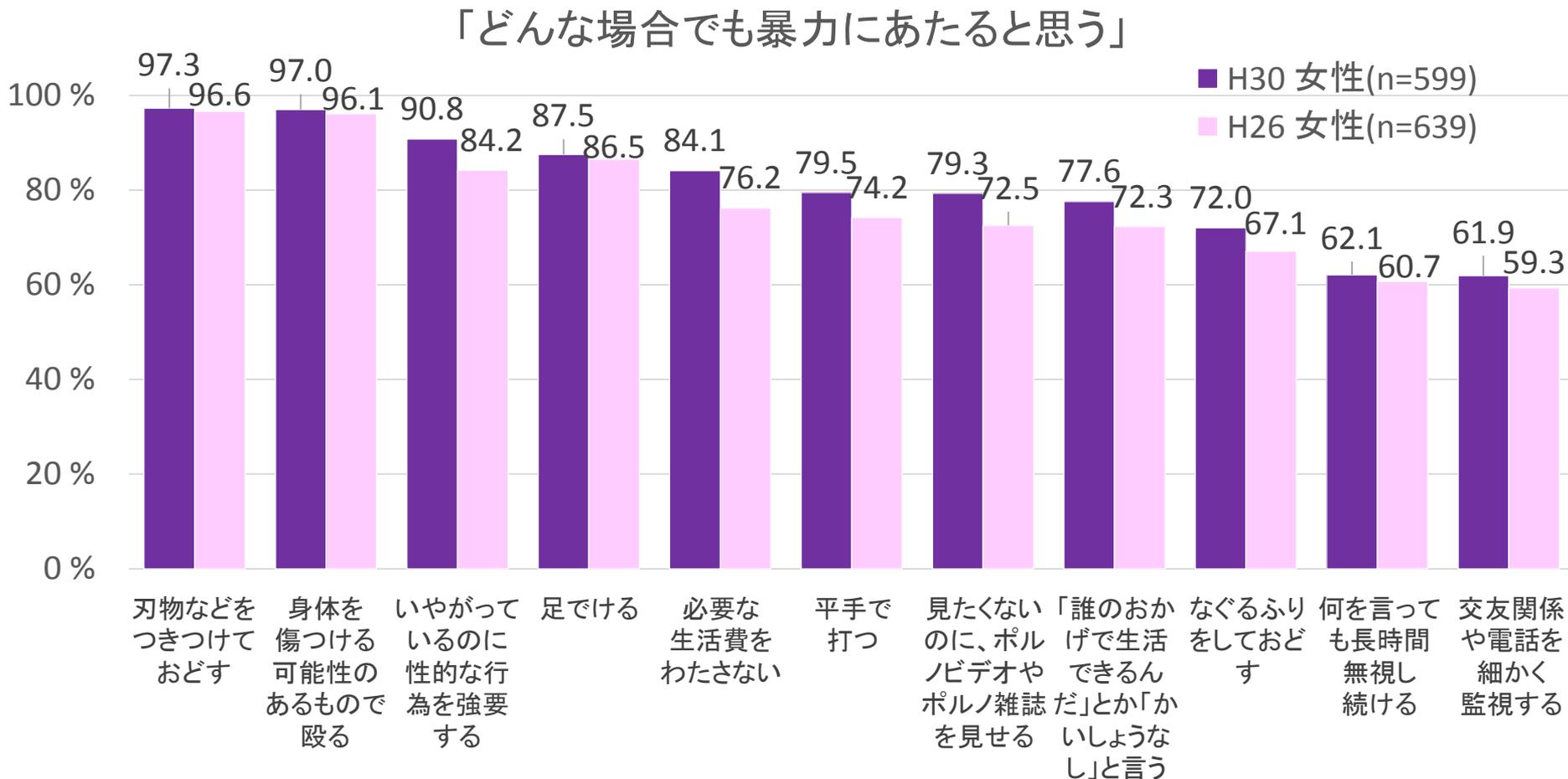
- どんな場合でも暴力にあたると思う
- 暴力にあたる場合も、そうでない場合もあると思う
- 暴力にあたるとは思わない
- 無回答



- どんな場合でも暴力にあたると思う
- 暴力にあたる場合も、そうでない場合もあると思う
- 暴力にあたるとは思わない
- 無回答

DVについての認識(女性)

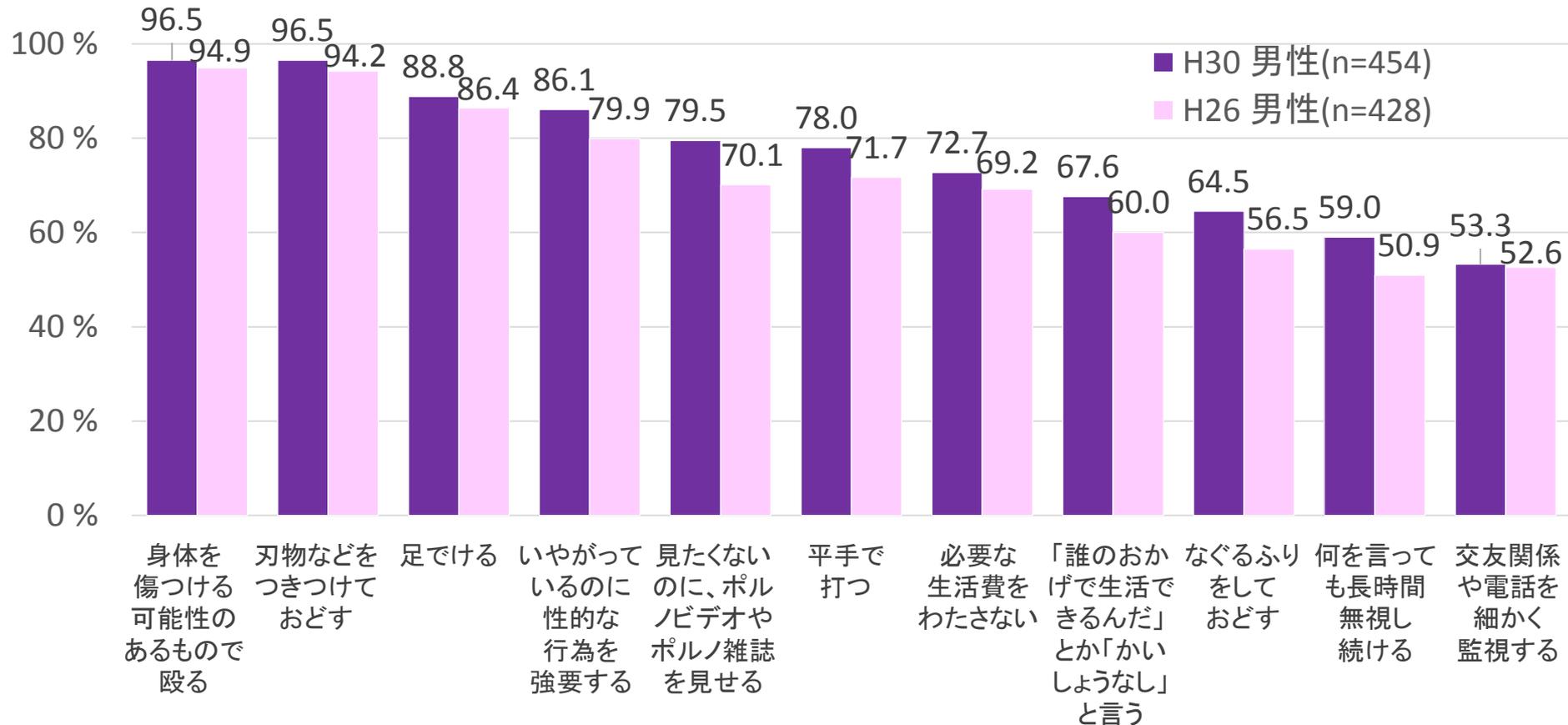
- H26調査と比較すると、女性回答者ではDVについて「どんな場合でも暴力にあたると思う」との認識は同水準か、若干上昇している。



DVについての認識(男性)

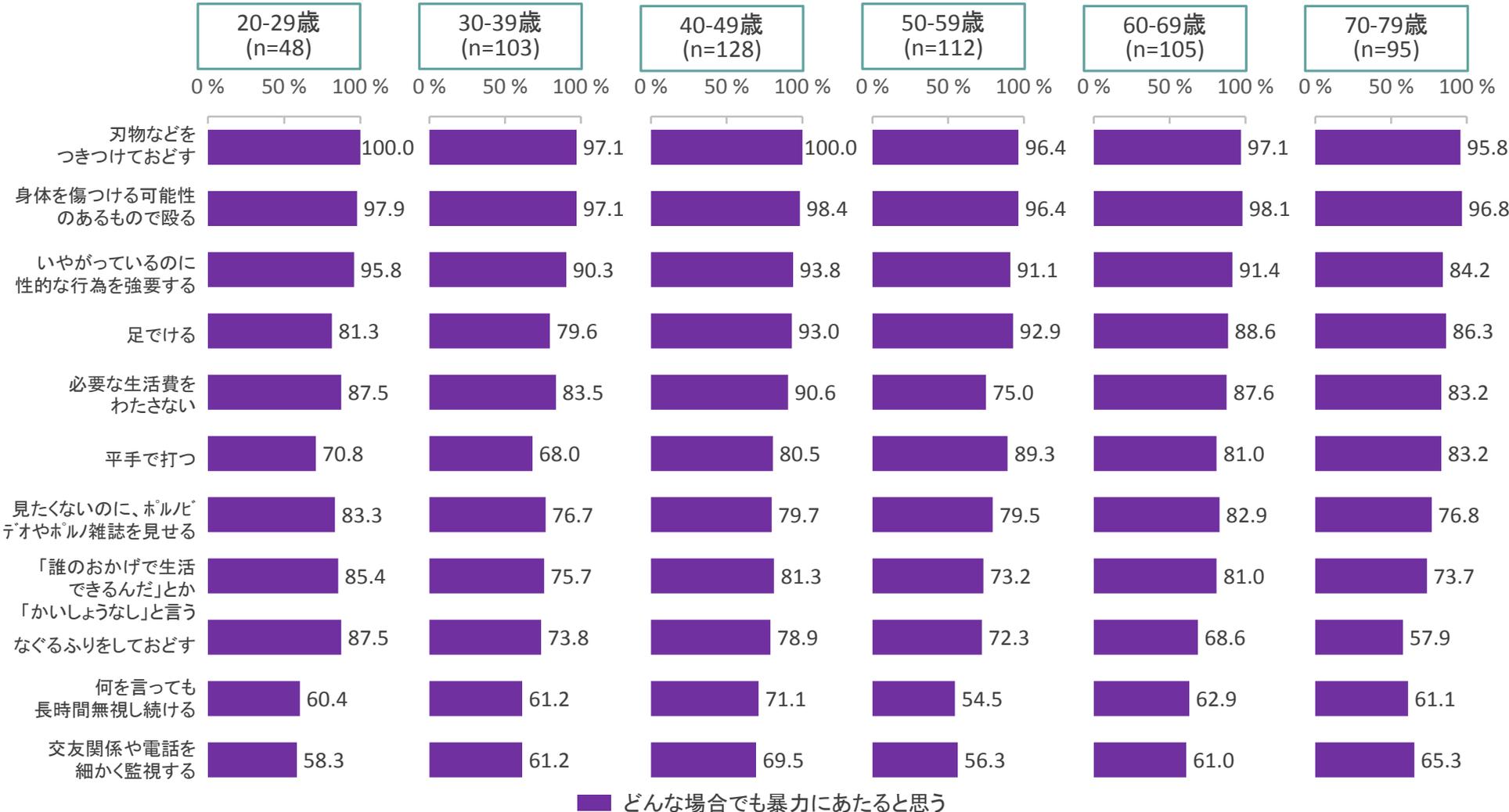
- 男性回答者のH26調査との比較でも、「どんな場合でも暴力にあたると思う」との回答は同水準か前回をやや上回っている。

「どんな場合でも暴力にあたると思う」



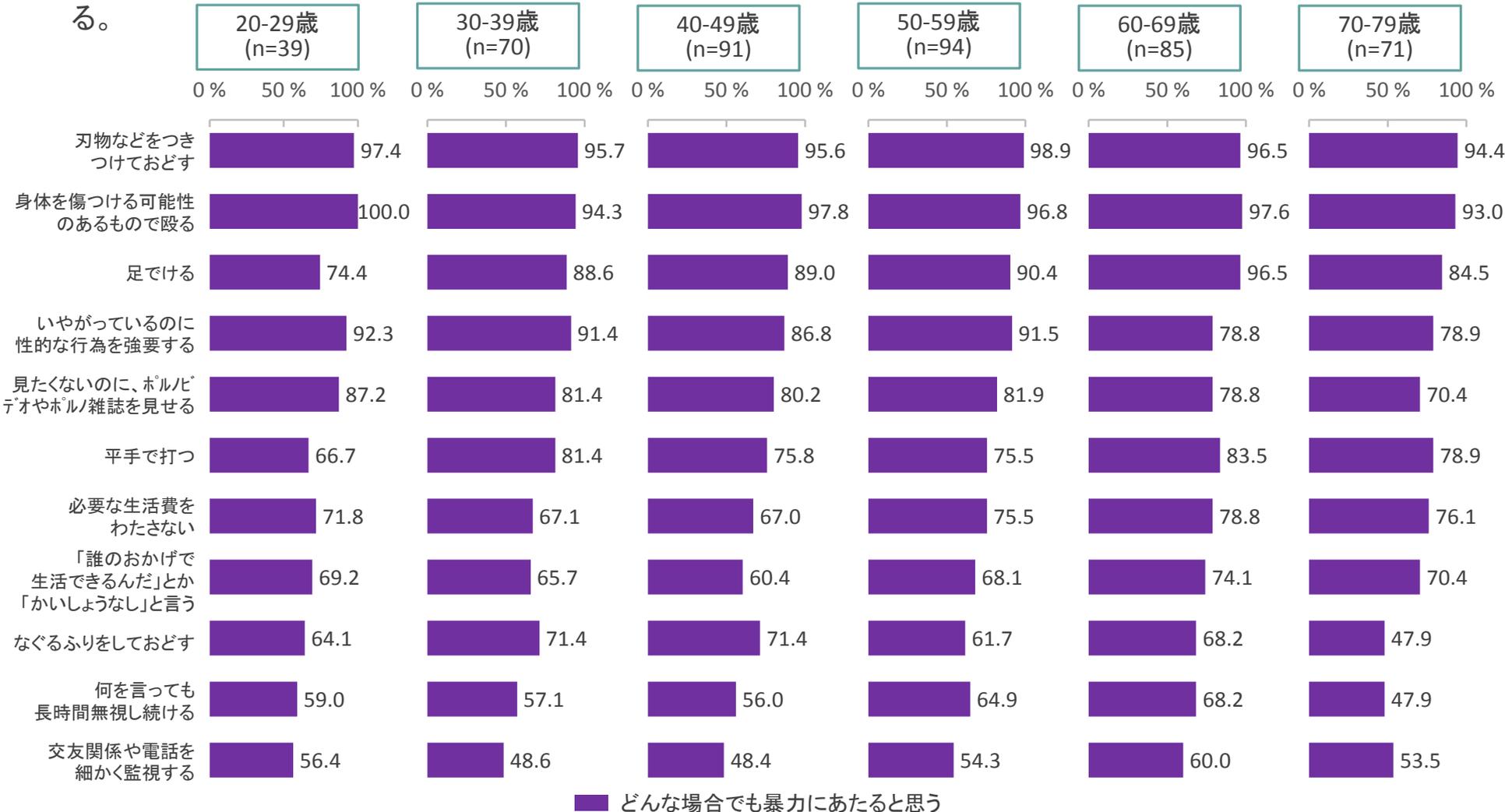
DVについての認識(女性、年代別)

- 女性回答者の年代別にみると、20～30代では〈平手で打つ〉ことを「どんな場合でも暴力にあたると思う」とする人が7割前後に留まる。50代では、〈必要な生活費を渡さない〉が75%とやや低めであった。70代では〈なぐるふりをしておどす〉が最も低く6割未満となっている。



DVについての認識(男性、年代別)

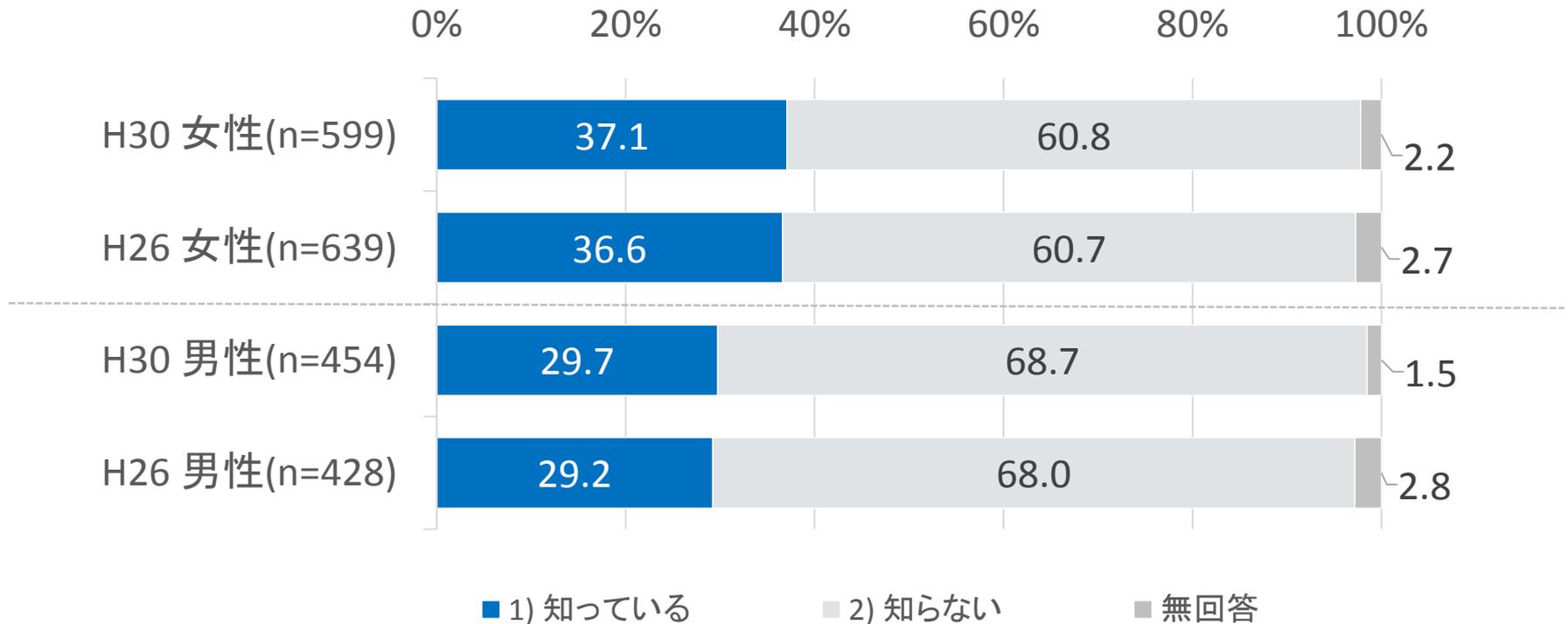
- 男性回答者を見ると、母数が少ないため参考に留まるが、20代で〈足でける〉及び〈平手で打つ〉が他の年代よりも相対的に低い。40代では〈必要な生活費をわたさない〉と〈「誰のおかげで生活できるんだ」とか「かいしょうなし」と言う〉でも6割台に留まっている。70代では、女性回答者同様〈なぐるふりをしておどす〉が低めで、5割を切っている。



■ どんな場合でも暴力にあたると思う

DV相談窓口の認知

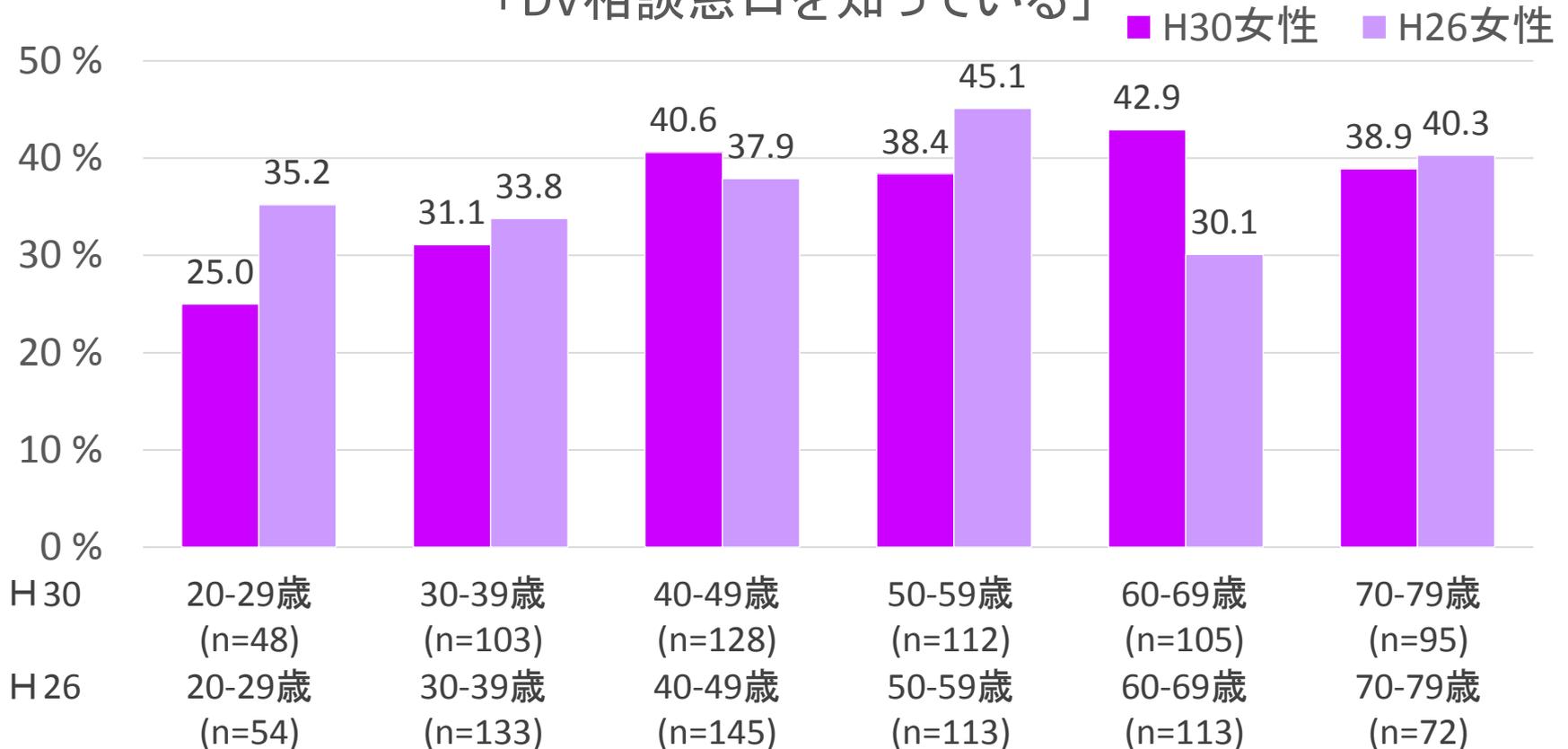
- DV相談窓口について「知っている」のは、女性の4割弱、男性では3割弱に留まっている。
- H26調査から、DV相談窓口の認知は上がっていないようだ。



DV相談窓口の認知(女性、年代別)

- DV相談窓口は、20代の女性回答者で25.0%、同30代で31.1%と、他の年代よりを下回っている。
- H26調査と比較すると、20代での認知は約10ポイント下がり、60代では13ポイント近く上昇している。

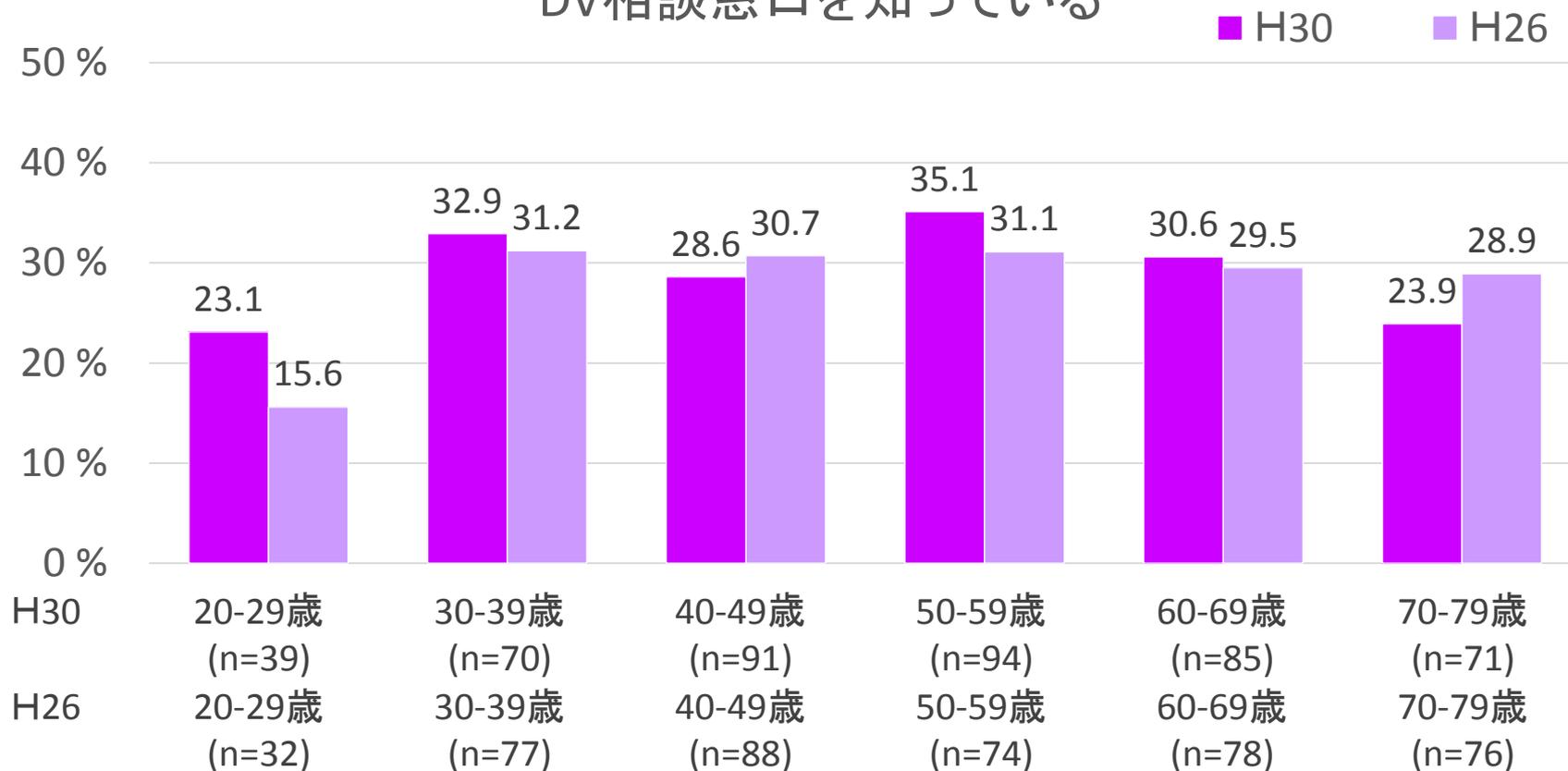
「DV相談窓口を知っている」



DV相談窓口の認知(男性、年代別)

- 男性回答者では、30代のみ女性回答者と同レベルであったが、他の年代では女性回答者の認知を下回っている。
- 20代はH26調査よりも8ポイント近く上昇したが、それでも23.1%に留まっている。

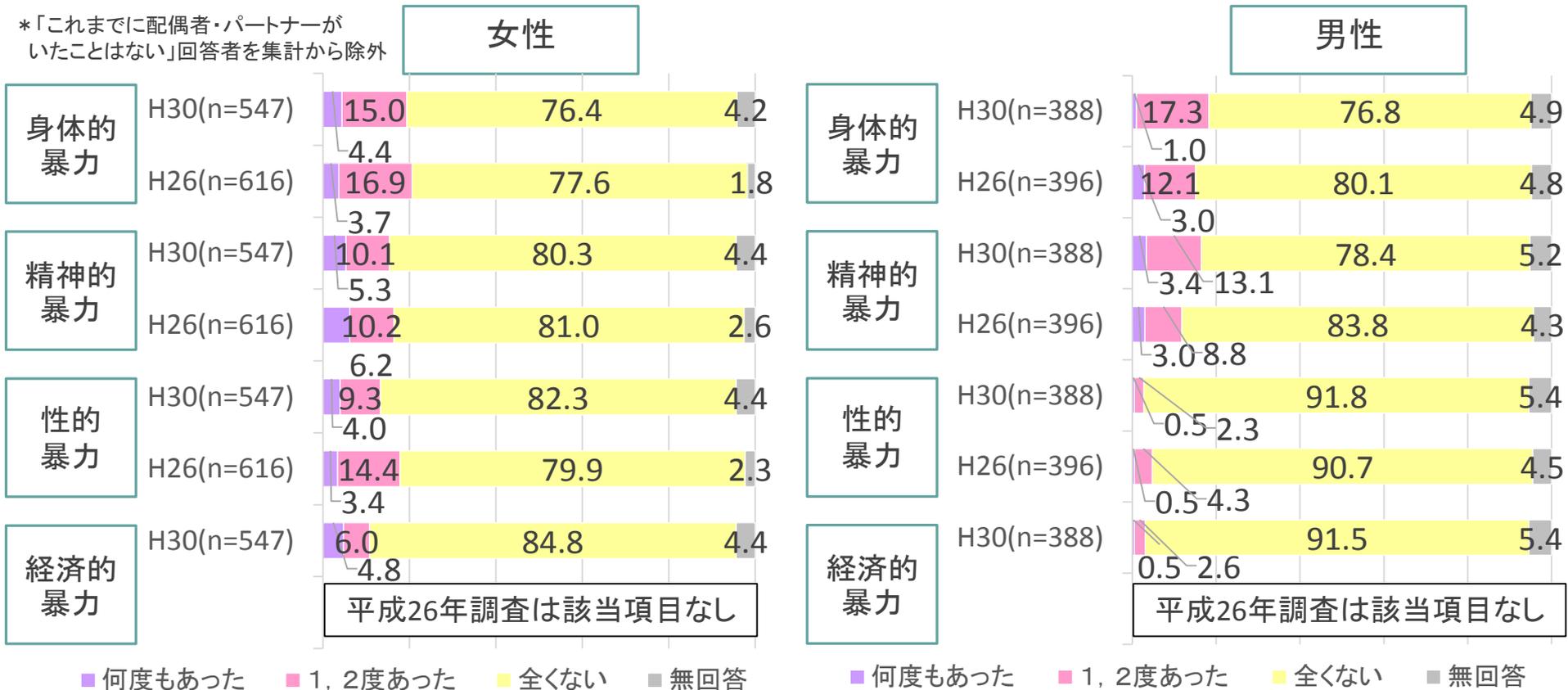
DV相談窓口を知っている



これまでのDV被害経験

- これまでにDV被害を受けたことがあるか聞いたところ、女性回答者では〈身体的暴力〉が「何度もあった」「1, 2度あった」人が約2割で、H26と同水準。男性回答者でも2割近くにのぼった。
- 新たに追加した項目「経済的暴力」は、女性回答者の約1割が被害経験があるとしていた。

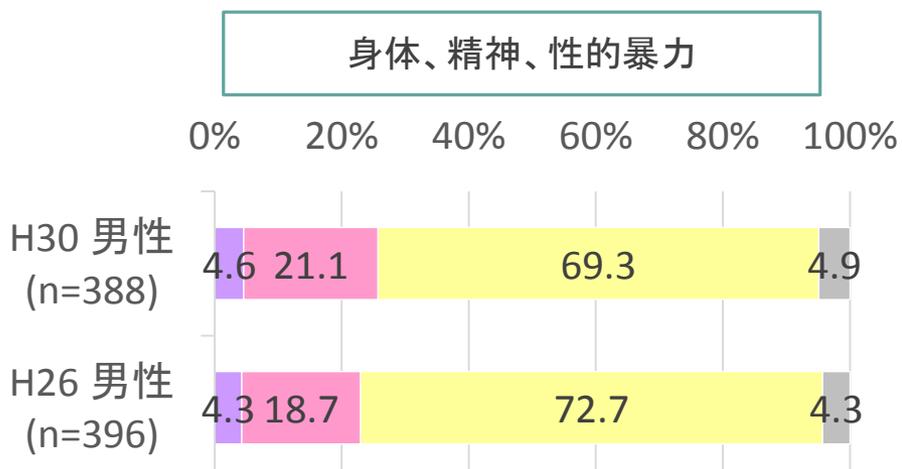
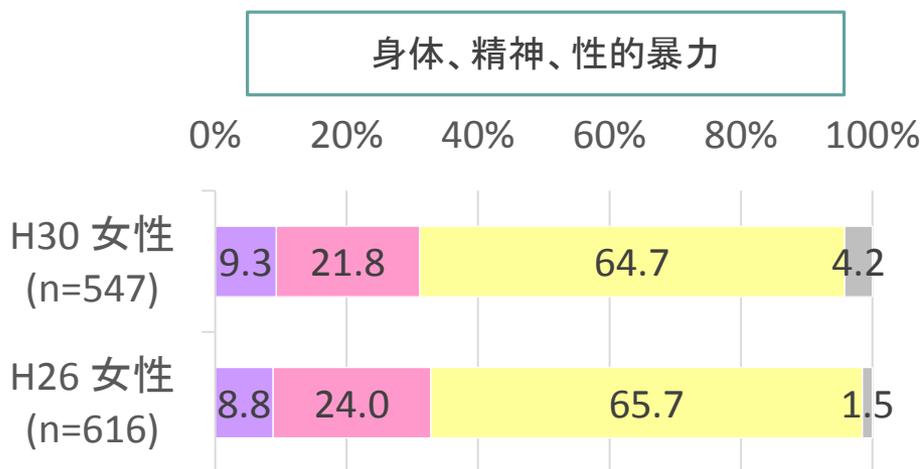
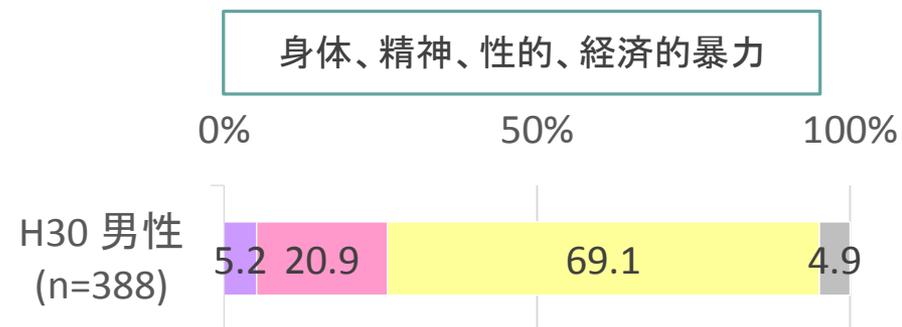
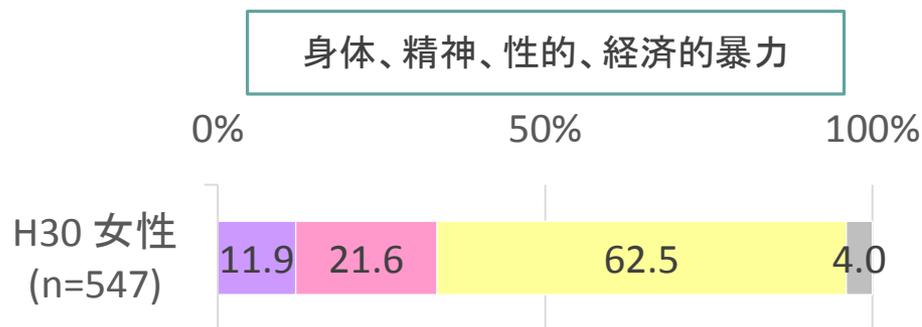
*「これまでに配偶者・パートナーがいたことはない」回答者を集計から除外



- ・身体的暴力＝なぐったり、けったり、物を投げつけたり、突き飛ばしたりするなどの身体に対する暴行を受けた
- ・精神的暴力＝人格を否定するような暴言や交友関係を細かく監視するなどの精神的な嫌がらせを受けた、あるいは、自分もしくは自分の家族に危害が加えられるのではないかと恐怖を感じるような脅迫を受けた
- ・性的暴力＝いやがっているのに性的な行為を強要された
- ・経済的暴力＝生活費を渡さない、給料や貯金を勝手に使われる、外で働くことを妨害されるなどの経済的圧迫を受けた

これまでのDV被害経験

- 前項の4項目をまとめると、女性回答者の約3人に1人に被害経験があった。男性回答者でも約4人に1人に被害経験があった。
- H26調査と比較するため、経済的暴力を除く3項目でまとめると、女性回答者はほぼ同水準、男性回答者は僅かに被害経験の割合が増加している。

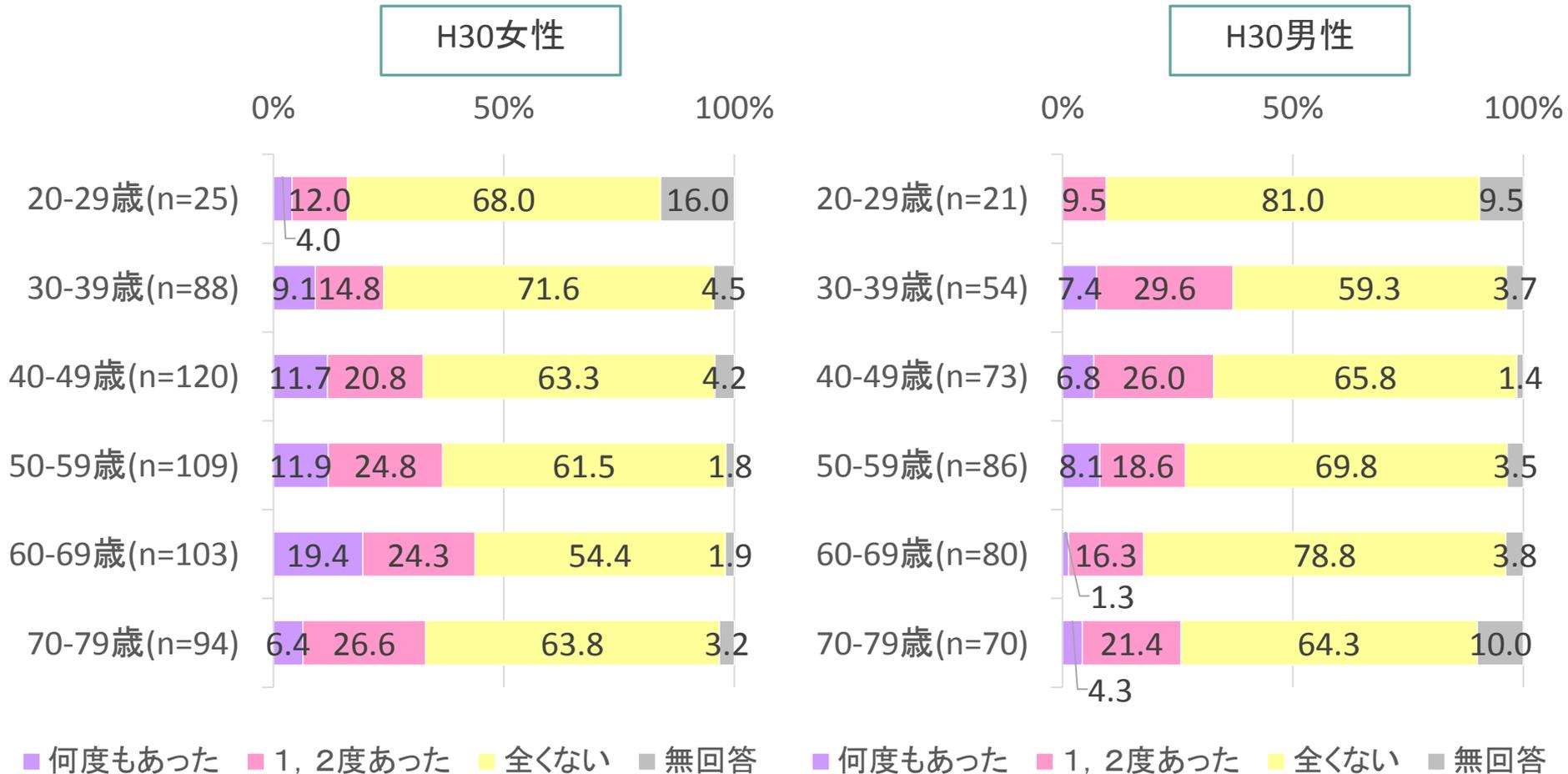


■ 何度もあった ■ 1, 2度あった ■ 全くない ■ 無回答

■ 何度もあった ■ 1, 2度あった ■ 全くない ■ 無回答

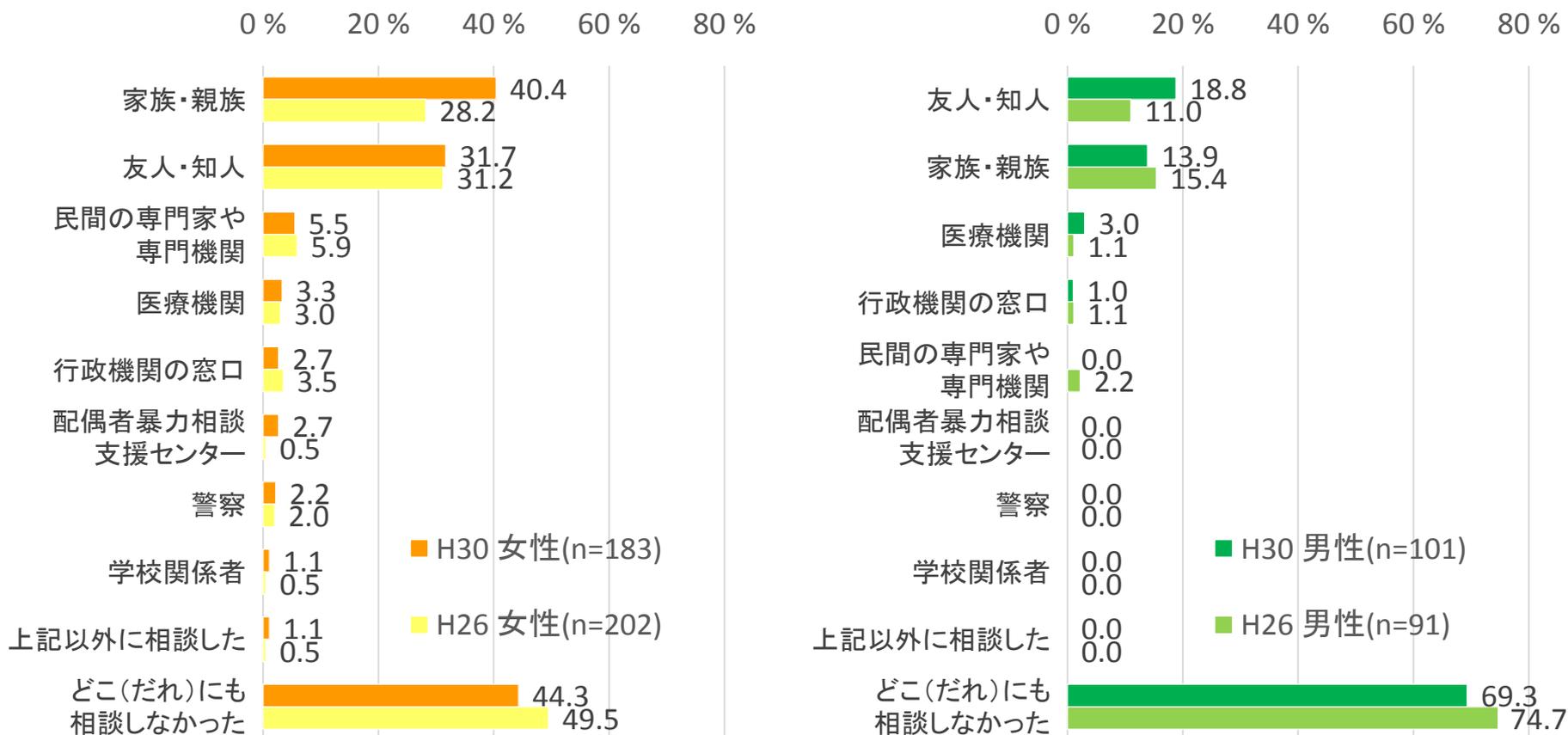
これまでのDV被害経験(年代別)

- DV被害経験を年代別で見ると、女性は60代にかけて年齢とともに被害経験が増加傾向にあり、60代では4割超となっている。男性は反対に、30代から60代にかけて被害経験は減少しており、30代で4割近くが被害経験があるとしている。



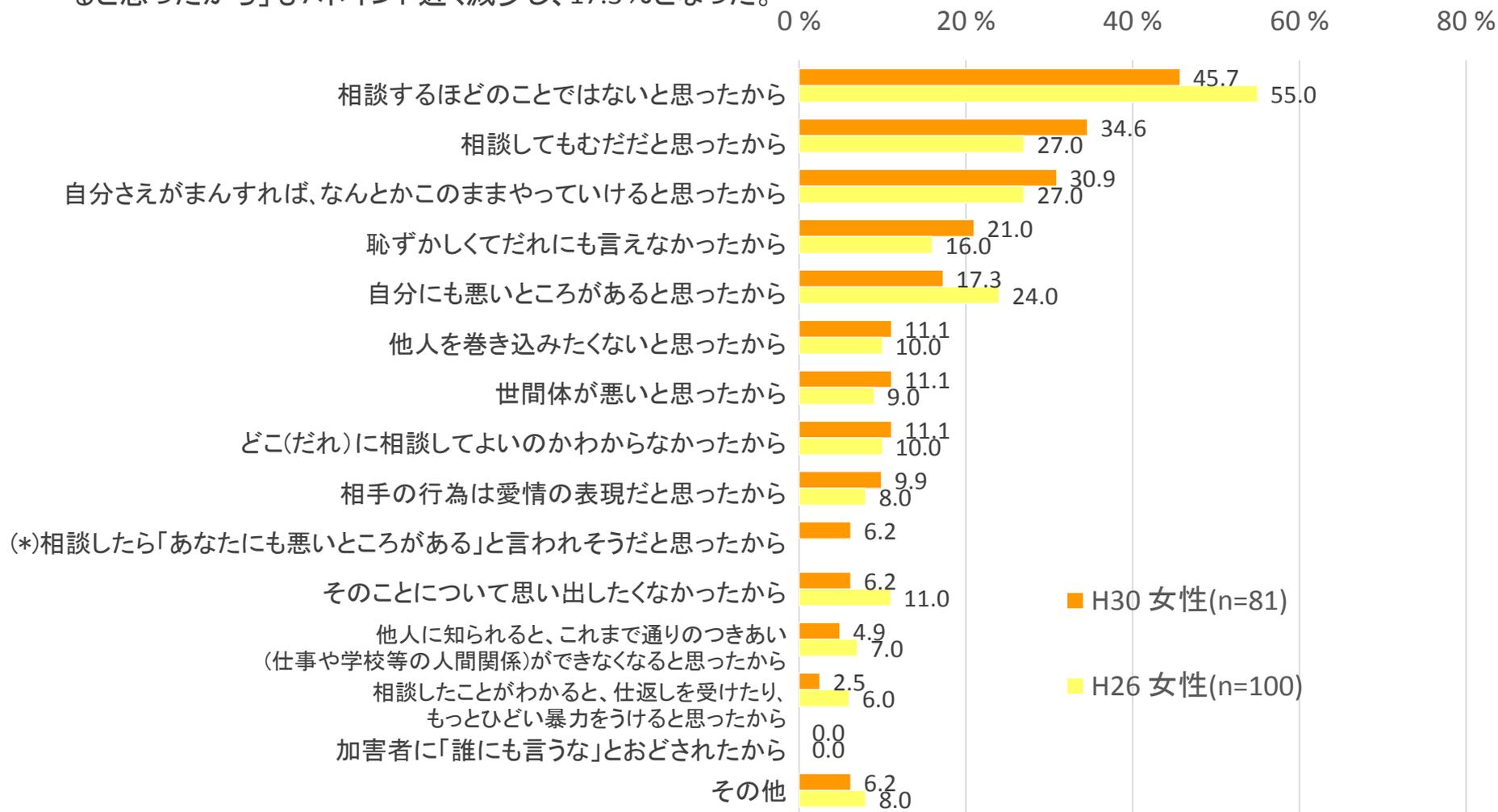
DV被害の相談先(複数回答)

- いずれかのDV被害経験があった人に、DV被害の相談先を尋ねた。
- 女性回答者は依然として半数近くが「どこ(だれ)にも相談しなかった」とし、男性回答者では約7割にのぼる。
- 相談先としては「家族・親族」または「友人・知人」に集中しており、女性回答者ではそれぞれ40.4%、31.7%、男性回答者では同様に18.8%、13.9%となっている。
- H26調査と比べると、「家族・親族」への相談が女性では10ポイント以上、男性回答者でも8ポイント近く上がっている。



DV被害を相談しなかった理由(女性、複数回答)

- DV被害を相談しなかったとした人に、その理由を尋ねた。回答傾向に大きな変化は見られないが、「相談するほどのことではないと思ったから」は、H26調査より10ポイント近く下がり半数を切った。また、「自分にも悪いところがあると思ったから」も7ポイント近く減少し、17.3%となった。

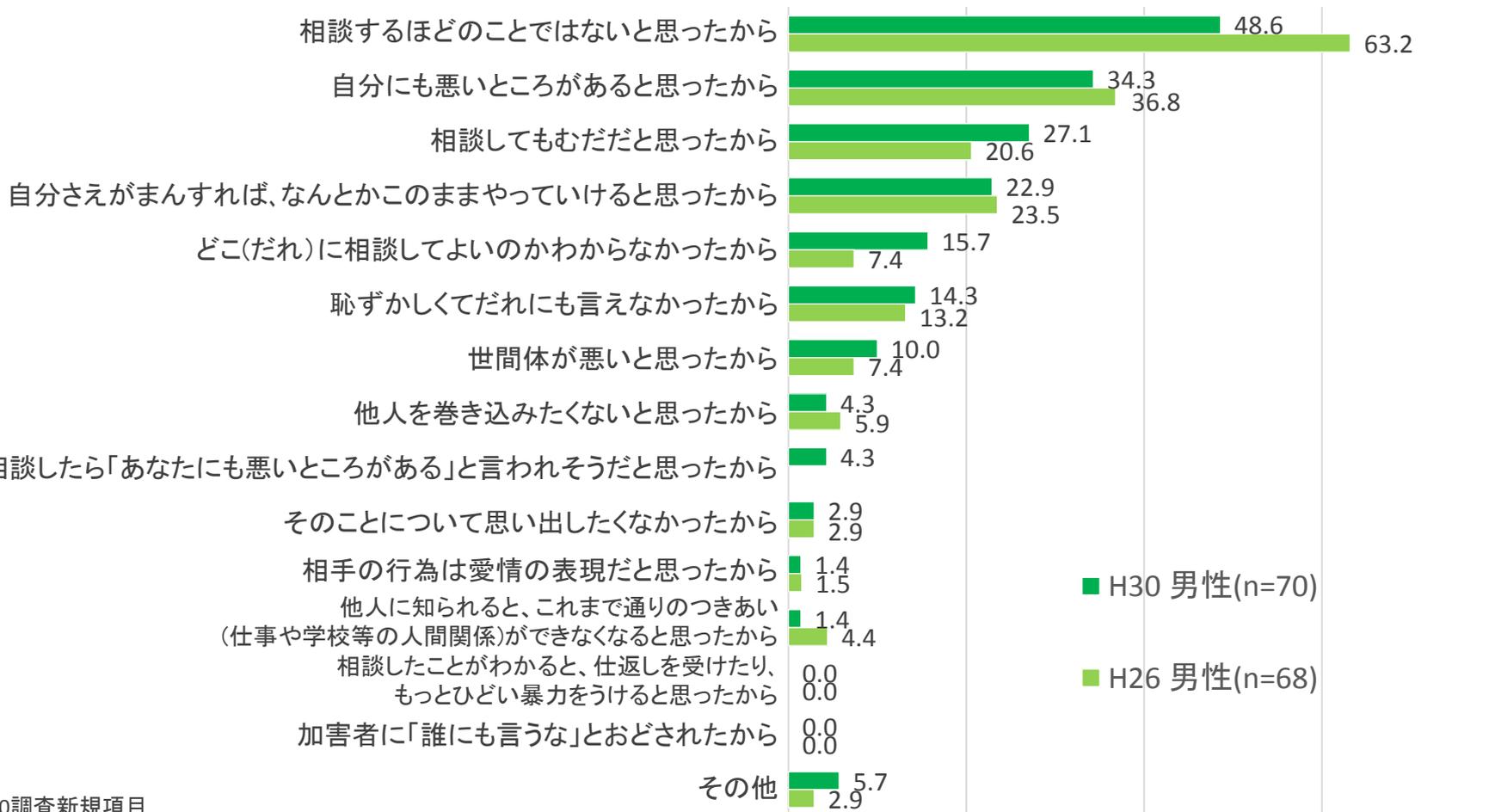


*H30調査新規項目

DV被害を相談しなかった理由(男性、複数回答)

- 男性回答者の相談しなかった理由では、「相談するほどのことではないと思ったから」が、H26調査より約15ポイント低い48.6%で、男性回答者でも半数を切っている。
- 「相談してもむだだと思ったから」は7ポイント近く上昇し27.1%、「どこ(だれ)に相談してよいのかわからなかったから」は前回の8ポイント以上増加し、15.7%となった。

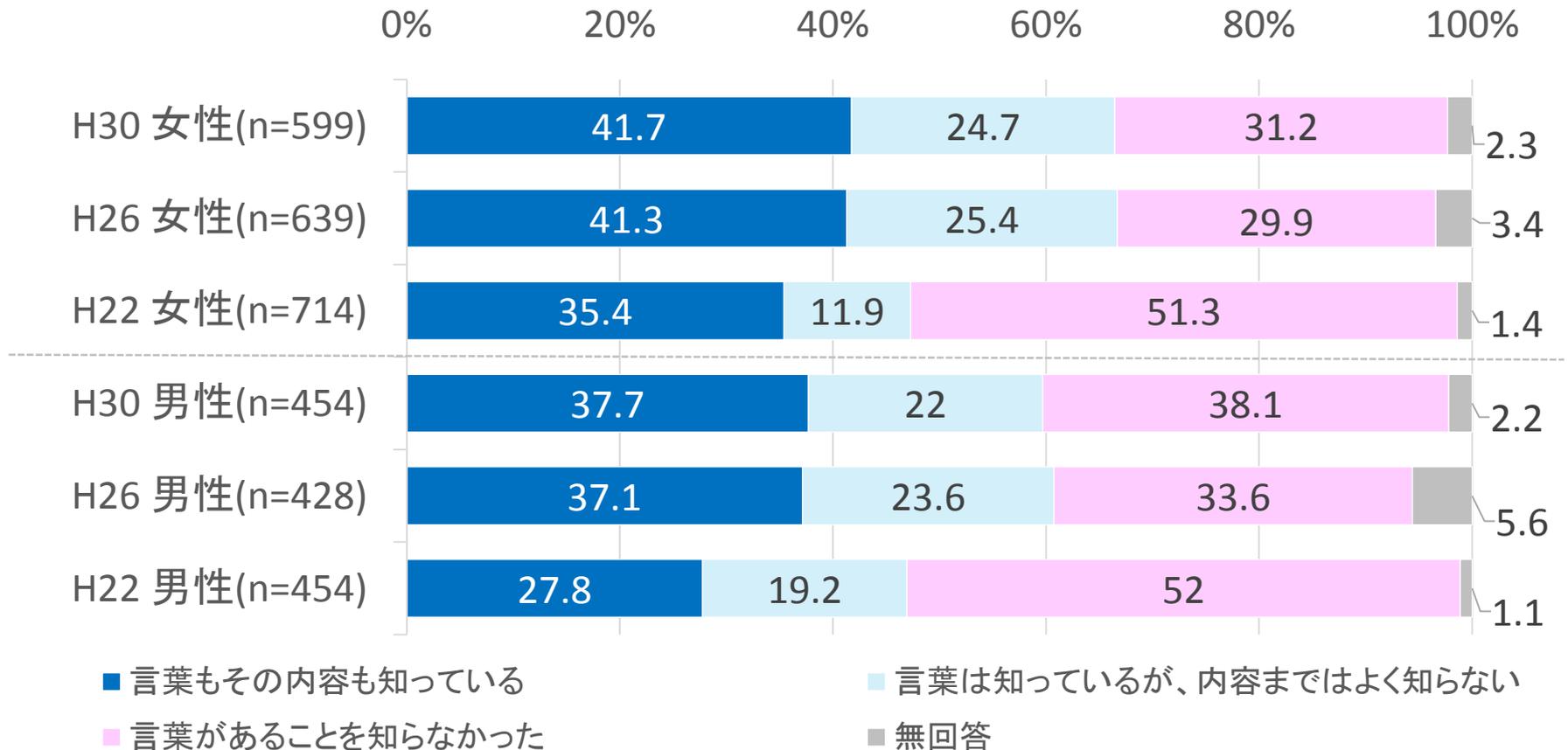
0 % 20 % 40 % 60 % 80 %



*H30調査新規項目

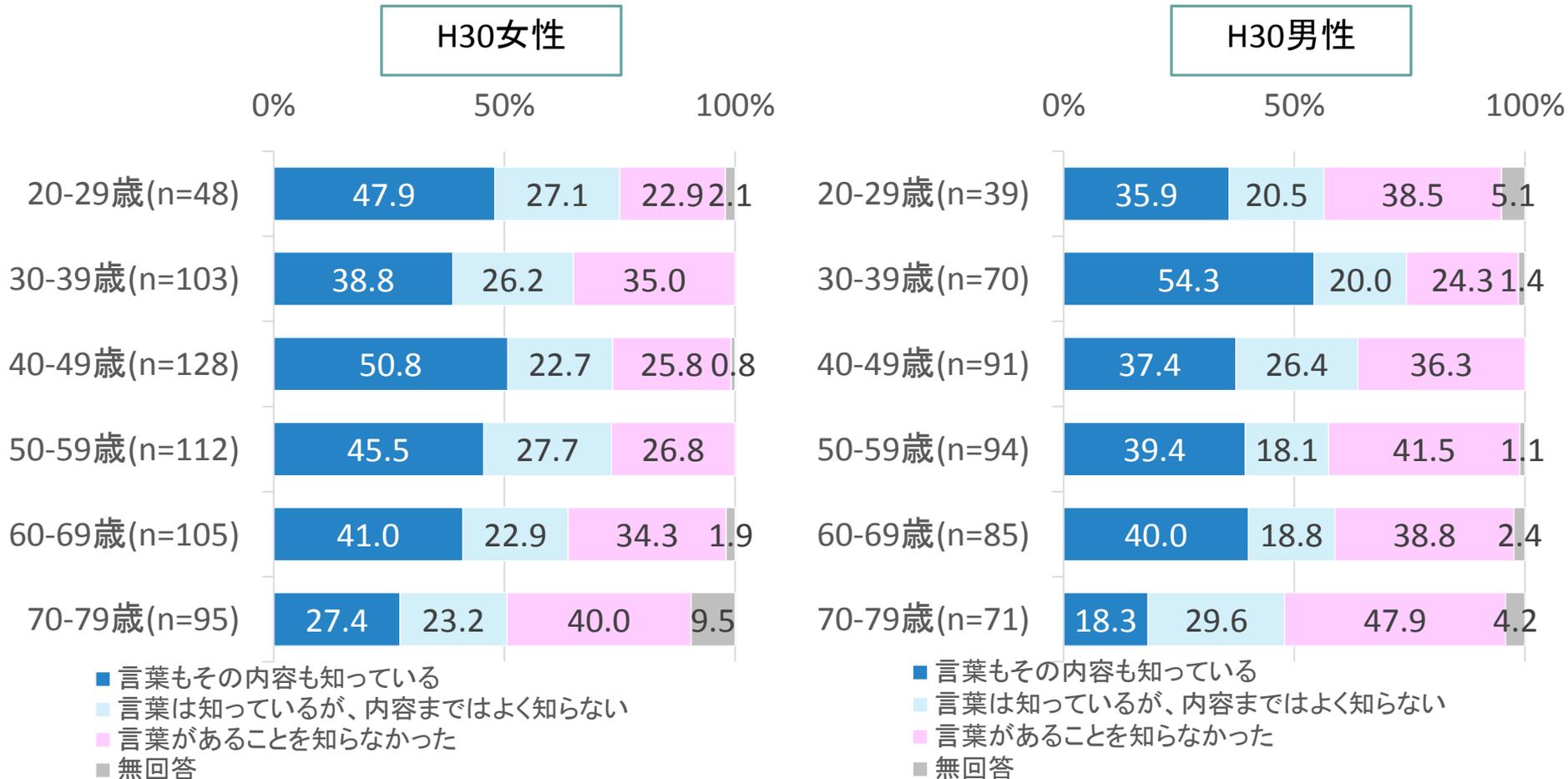
デートDVの認知

- 「デートDV」について、内容まで知っている人は、女性回答者の4割強、男性回答者では3割台後半で、前回と同水準となっている。
- 内容を知っているかを問わず、「言葉は知っている」までを見ても、女性は約3分の2、男性は6割近くで、言葉の認知も前回と同水準であった。



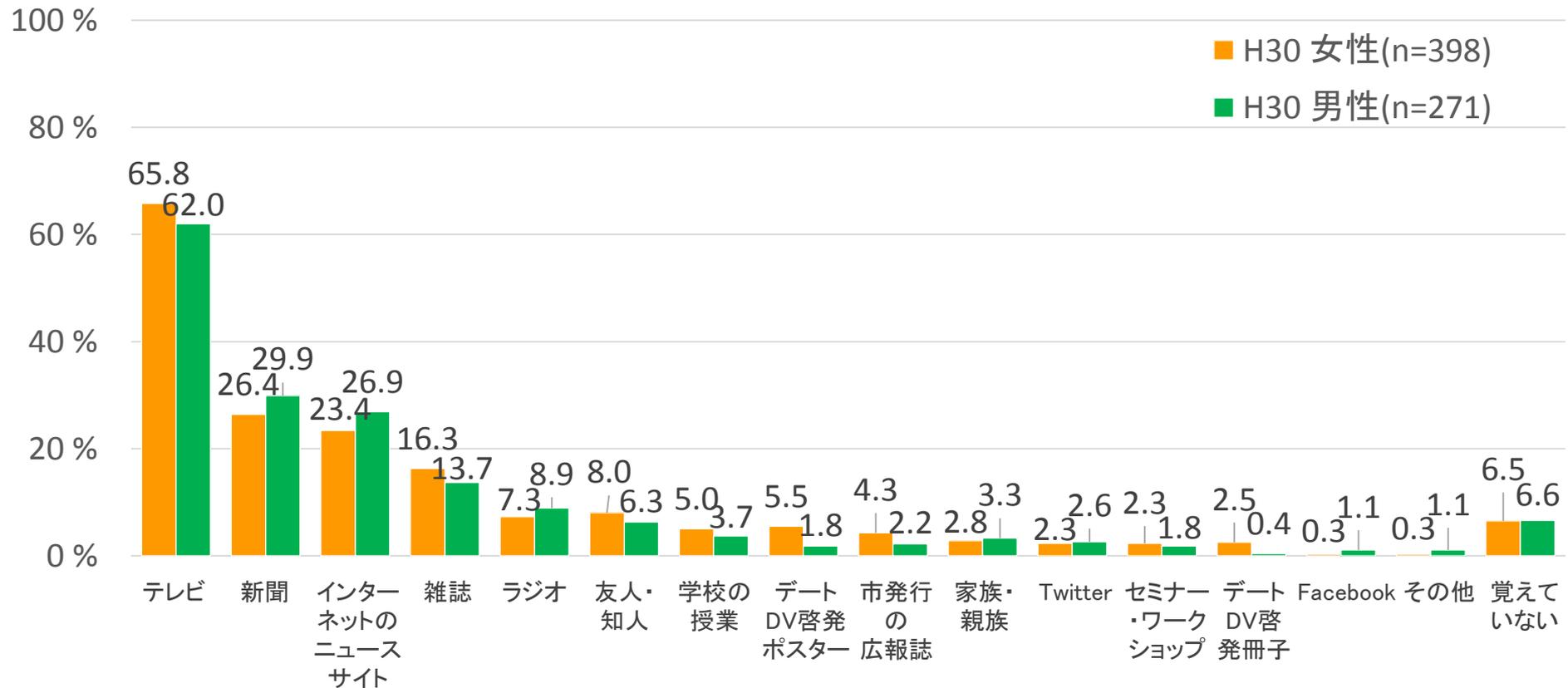
デートDVの認知(年代別)

- 「デートDV」の認知を年代別で見ると、60代以下では、女性回答者の6割～7割台が言葉は知っており、うち約4～5割が「言葉も内容も知っている」との回答であった。
- 男性回答者でも、60代以下では過半数が言葉を知っていた。「言葉も内容も知っている」のは3割台半ば～4割の年代が多いが、30代では54.3%と高くなっている。



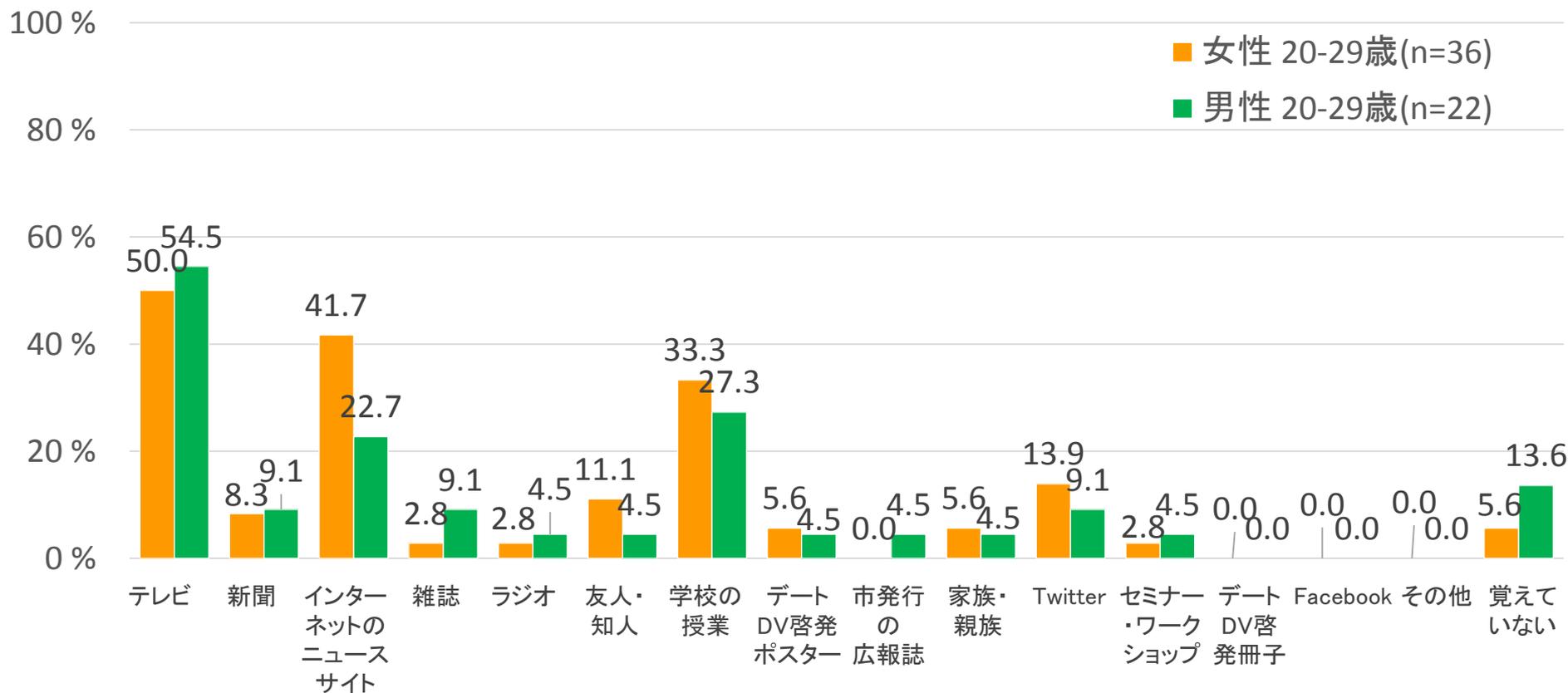
デートDVの認知経路（複数回答）

- 「デートDV」という言葉の認知経路を尋ねたところ、「テレビ」が最も多く、男女とも6割強を占めた。次いで、「新聞」、「インターネットのニュースサイト」が2割台となっている。



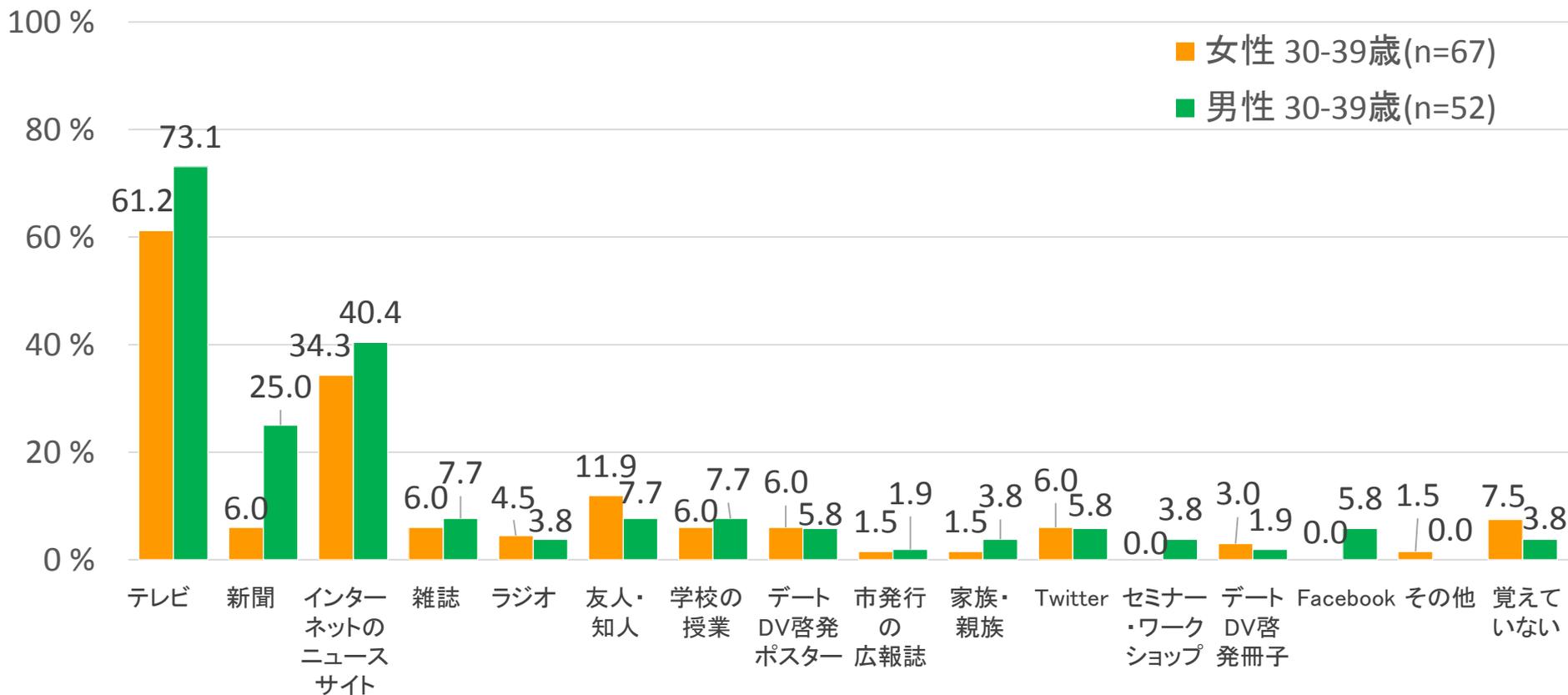
デートDVの認知経路(20代、複数回答)

- 20代に限定して、どこからデートDVという言葉を知ったかを見ると、「テレビ」が最も多く挙がっているのは全体と同様だが、「インターネットのニュースサイト」が女性回答者の4割、「学校の授業」は3割前後となっている。



デートDVの認知経路(30代、複数回答)

- 同様に、30代の認知経路を見ると、男性回答者では「テレビ」が7割以上、女性回答者では6割強となっている。
- 次いで多いのは、男女ともに「インターネットのニュースサイト」で女性回答者の3割以上、男性回答者の約4割が挙げていた。



これまでのデートDV被害経験

- 配偶者／パートナーとは別に、デートDVの被害経験を尋ねたところ、身体的、精神的、性的、経済的のいずれかの暴力を1つでも受けたことがある人は、女性回答者では2割以上、男性回答者では1割以上いた。

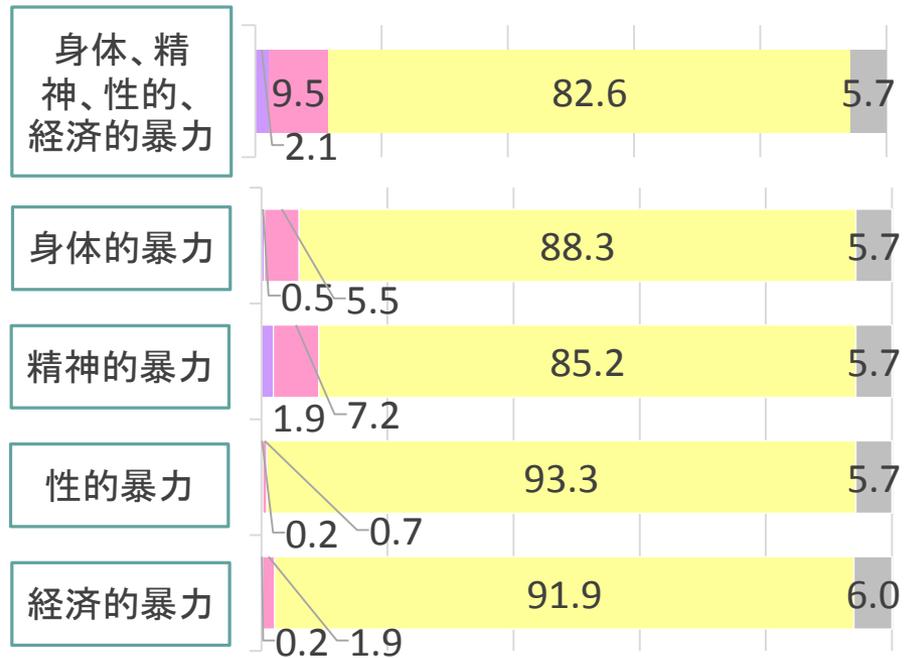
*「これまでに交際相手がいたことはない」回答者を集計から除外

H30 女性
(n=582)

H30 男性
(n=419)

0% 20% 40% 60% 80% 100%

0% 20% 40% 60% 80% 100%



■ 何度もあった ■ 1, 2度あった ■ 全くない ■ 無回答

■ 何度もあった ■ 1, 2度あった ■ 全くない ■ 無回答

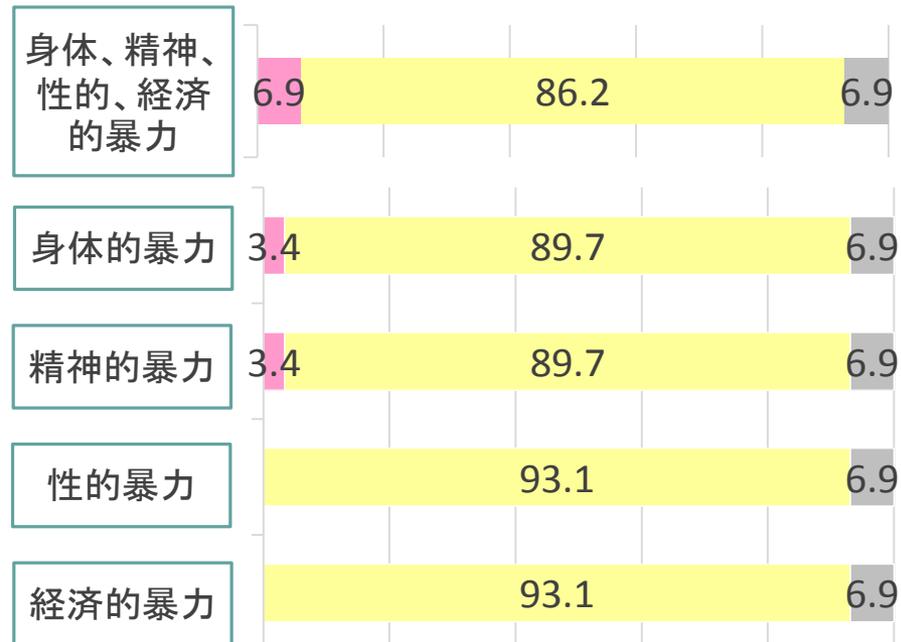
- ・身体的暴力＝なぐったり、けったり、物を投げつけたり、突き飛ばしたりするなどの身体に対する暴行を受けた
- ・精神的暴力＝人格を否定するような暴言や交友関係を細かく監視するなどの精神的な嫌がらせを受けた、あるいは、自分もしくは自分の家族に危害が加えられるのではないかと恐怖を感じるような脅迫を受けた
- ・性的暴力＝いやがっているのに性的な行為を強要された
- ・経済的暴力＝給料や貯金を勝手に使われる、デート代や生活費を無理やり払わされるなどの経済的圧迫を受けた

これまでのデートDV被害経験(20代)

- 20代に限って、デートDV被害の経験を見ると、女性回答者では2割強であった。
- 男性回答者は母数が30名未満と僅かなので参考値に留まるが、6.9%(2人)であった。

H30 女性 20-29歳
(n=42)

H30 男性 20-29歳
(n=29)



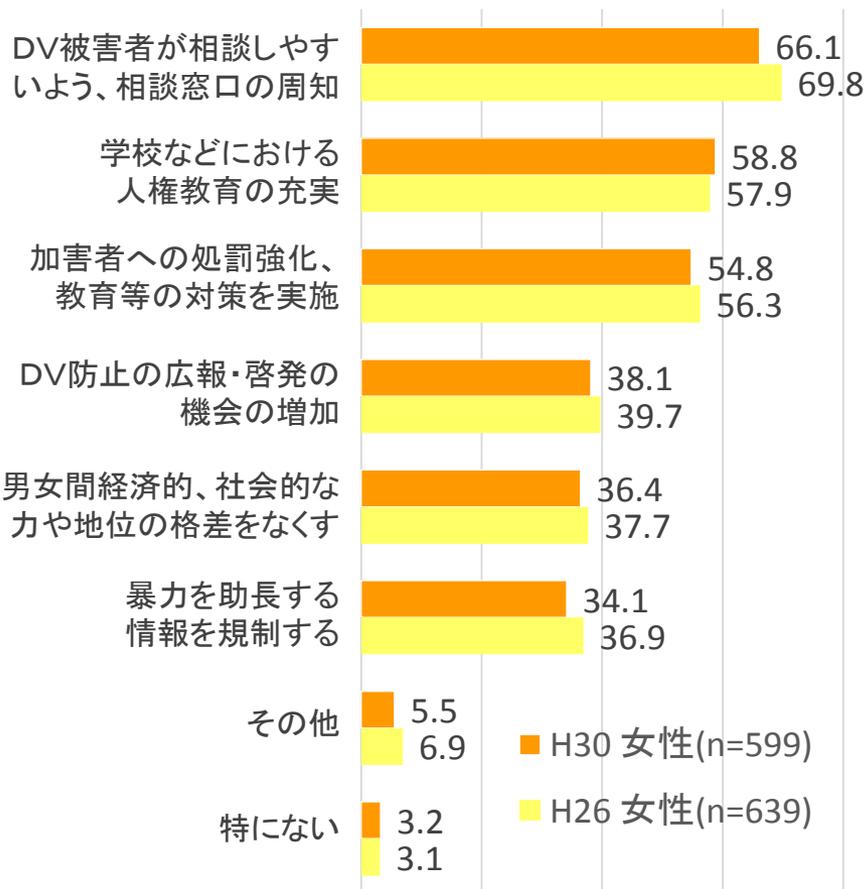
■ 何度もあった ■ 1, 2度あった ■ 全くない ■ 無回答

■ 何度もあった ■ 1, 2度あった ■ 全くない ■ 無回答

DV防止に必要なだと思うこと(複数回答)

- DV防止に必要なだと思うことを尋ねたところ、「相談窓口の周知」が最も多く、男女とも約3分の2であった。次いで、これも男女ともに「人権教育の充実」、「加害者への処罰強化、教育等の対策」が過半数となっている。
- H26調査から大きな変化は見られなかった。

0.0 20.0 40.0 60.0 80.0



0.0 20.0 40.0 60.0 80.0

